大衆部の教理既に此の如く、從て其佛陀論は色身以上の實身に馳想し。威力壽量共に無邊際、有情を化して厭足なし、且つ其菩薩の因地を語るや、有部の伏惑行因に反して、斷惑行因となす。從て菩薩最後身即ち成佛時の佛身は前世業感所現の身にはあらず。身體諸根唯無漏となす。其發する所の言語は悉く如義。說法悉く轉法輪。一音一切法を說き、一心一切法を知るとなす。（藏四26）此に注意すべきは佛陀は此の如く向上せらるゝと同時に衆生の自性に於ても亦心性の本淨を認めたること是なり。（四四76）是に依りて佛と衆生との關係は現在には天地懸隔せりと雖とも、一度其本體に遡れば極めて密接なるものあり。有部の僧中有佛は茲に生中有佛となれり。以上大衆部の所論は、果して紀元前四世頃の思想なりや否やは怪しむべきも、滅後久しからずして此に類せる思想の伏在したらんとの推察は強ち空想に在らざるべし。蓋し此兩派の分裂は諸傳の等しく傳ふる所なればなり。（『印考』530參照）

宗教は由來剛結的なると同時に分裂的傾向あり。教義研鑽の結果竟に大衆部中又異論の分裂を見る。一說部、說出世部、鷄胤部是れなり。一說部は諸法假名無體の唯名論的步調を取りて、大衆部の過未無體を到るべき點まで到らしめ。說出世部は世出世に眞妄を分ち、道果は虛妄にあらずとなし。說假部は世出世各々に眞妄を認め。就中鷄胤部は論部尊崇の理性主義にして、此三部分出後又暫くにして多聞部出て說假部起り、其年代も今日に至りては判然せずと雖とも、大略佛滅二百年中にありとは、『異部宗輪論』等に記する所なり。（藏四26）而して此等の分派は、多少教理思想の發展に伴ふものにして、次第に大乘的に傾けり。佛滅第二百年滿の時、大天（佛滅百年の大天に非ず）所屬の制多山部以外に他に二派を生せり。西山住部北山住部是れなり。阿育王時代に有名なる第三回結集あり。王子摩哂陀錫嵩に入る。阿育時代の佛教は摩哂陀が錫嵩に傳へたる教理のみなりしか、將た大乘教も包含したるものなるかは議論あるも、思潮は滔々として開發の氣運に向へるものゝ如し。此時代の佛教が王家保護の下に傳導師を派遣し、慈善事業を行ひ、教勢の熾なる外道の徒も多くは表面佛教徒と稱して、教團中に入り來れり。此進取的佛教は到底舊態に安んずべきにあらず。風は既に樓に充てり、山雨の襲來期して待つべし。縱令大乘教として當時に存せるものはなかりしとするも、思想は必ずや大乘的に向はざる可らざるものあり。現存漢譯『阿含』の所傳に關しては古來或は全部大衆部傳なりとし。或は『雜阿』『中阿』は有部傳にして、『增阿』は大衆部、『長阿』は化地部の系統に成るといひ。又更に『四阿含』全部、諸部の通說なりとの說あり。（『大史』29-30諸傳を引用せり）抑も阿含經の成立を考察せんには南傳尼迦耶との比較及諸部傳說の系統を探らざる可らず。但し吾人の見る處を以てせば現存の阿含經は確然教相の定準を守れるものにあらずして。渾然として前後思想發展の各階段を雜說せるもの丶如し。『阿含經』中の進步せる思想と大乘經とを取て之を見るに其間系統の綿々たるものあり。畢竟大小二乘の佛教は先きに所謂圓錘狀の縲線形にして、線の急變によりて、面をなしたるにはあらず。案ずるに紀元前後の佛教を生ずる迄に、既に幾多の進步を見たるものならん。惜むらくは此間史料を缺く。

上座部は元來教權傳承を重んじ、實行を主とするにありしかば、佛滅第三世紀の初めまでは分裂あらざり

き。此時迦旃延尼子の說一切有部起る。元來有部は敎理よりも實行を重んじたりしが。先きに述ぶるが如く思想の發展は豈永く有部に影響せざらんや。經を主として律藏を末とする上座部に、論を主とせる有部を生じ迦多衍尼子の『發智論』出て、上座部の理論的方面を發揮せり。此に於てか說因部は遂に上座部の勢力を奪ひ、以前の上座部は雪山に入りて雪山部となり。對法を主とせる有部獨り舊住所にありて熾に法幢を張れり。元來上座部は敎權主義なり。然るに對法を主とせば理性主義とならざる可らず。蓋し有部は上座の正統を以て自任するも、經を主とせず論を主とするは、是れ根本に於て敎權思想と矛盾せり。果せる哉有部に發したる犢子部は上座部中に一異彩を放ち、三世、無爲、不可說の五藏を立てゝ有爲法無爲法以外に非即非離蘊我を說き、生滅變化の間に一切智者の主體を認め、遙かに大乘の敎理に應ぜり。暫くにして此犢子部中更に法上、賢冑、正量、密林山の四部を出し。更に又化地部を生じ犢子部化地部は同しく有部に屬するも、思想は其圏外に出つるものあり。上座部中の大衆部とも稱すべく、化地部の如きは明かに過末無體の義を執れり。(藏四 三八七)化地部の後に法藏部あり、目連を祖述し、經、律、論、咒、菩薩の五藏を立つ。佛滅第三世紀の終りに飲光部あり。犢子、法藏等が自ら上座部に出でゝ、しかも大衆部に混同せんとするを慨し。上座部を維持せんとしたりしも、其所說は法藏部と類似點少からず。(藏四 一八七)佛滅第四紀に經量部あり。所謂「依經爲正量」といひて其名は上座の敎權主義を標榜すと雖とも、其敎義に至りては大衆部的思想を混ずる事多く、異生位中の聖法を語り、衆生に本爾無漏の種子を許せしものゝ如し。『俱舍論』に「德曰」の語を以て自部の敎義を書するは、內心經量部に私淑せるものとして、『順正理論』は上座正統主義を以て之を反破せるに見るも、經量部の思想は已に上座部中のものにあらざりしや明かなり。畢竟出藍の青を增せり。恰もよし迦膩色迦大王月支より起りて、迦濕彌羅に入り、王は佛敎信者なりしが爲めに、第四結集あり、『大毗婆沙論』茲に於てか成る。佛滅三世紀より第四結集の時代に至るまでに上座有部の敎理は次第に組織整頓せられしが、其間に益煩鎖の學風を成し、漸く詭辯的となり。異見の各派互に敎理の角逐をなし。佛敎の眞意義は漸く忘れられ、敎權傳承を重んずるの風は動もすれば輙ち固陋に陷り、又時勢の要求に適せざらんとせり。馬鳴起らざるべからず。龍樹出てざるべからず。訶梨跋摩世親亦此風潮に反抗して起てるものと謂ふべし。新佛敎たる大乘は此くの如にして起れり。凡そ分類は其分界に至るや、必ず判然たらざるものあり。大小二乘の分類の如きも亦其一なり。以上に於て見たるが如く大衆部は勿論根本上座の末派にも、所說大乘に同じきもの少からず。龍樹の無相皆空馬鳴の眞如緣起。自ら其間に系統の綿々たるものなくんばあらず。

眞如緣起論は元と『起信論』にありて、自性淸淨如來藏心によりて宇宙萬有緣起開展の理を說けに實る深奧なる唯心論哲學なり。(大衆部に心性本淨說あり)

一心の體相用を二門に分ち、(『起信論』(衆記)上七立義分)心眞如門は體大を示し、所謂宇宙の實體は空不空を離れ、言語道斷心行所滅にして、しかも過恒沙の萬德を具有するもの、言詮を假りて眞空妙有と名く。(以上同中本十七 解義分心眞如門)一衆部并に龍樹に照應)心生滅門とは相用二大にして、(以下中本。以下心生滅門)所謂現象界起滅を說くに三細六麤の九相を以て

す。宇宙體大の本體より見れば、總て平等一相なり亦名く可きなしと雖も、（中本一）相用につきて現象を眺むれば、因緣生滅を免れず。從て世出世の分ちあり。出世間を心性淨となし、世間を客塵染となす。（大衆部に心性淸淨客塵染汚說あり說出世部には俗妄眞實說あり）而して染法界の差別は實に無明熏習（大衆部の客塵）による。若しそれ眞如が無明に勝らその實體に復するは淨法界の生起にして、之を眞如熏習と稱す。（無爲有作用說は大衆部等にあり）

抑も宇宙は絕對唯一心眞如のみ、如何にして無明熏習を生じ、染法界の顯現を見るや。曰く不生不滅の眞如心が妄識の爲めに起動せらるゝによる、恰も風水波の關係の如し。（スピノーザの哲學を想起せしむ）平等性中、其差別相を生じ來る起端、之を阿梨耶識といふ。（中本一二）而して法界の理に達せざるもの是れ妄識にして、忽然として起り來るもの即ち無明なりと。然るに阿梨耶識はもと眞妄和合に成れるものなるが故に、自ら覺（中末三巳下）と不覺（中末三巳下）との二義を具す。所謂流轉還滅の二門是れなり。後者は即ち眞如の上に有する覺性たる本覺が不覺の無明を打破して、其本體に還るものをいふ。之を始覺と稱し、淨法界是によりて顯現す。前者は後者と正反對に不覺根本の無明が眞如に熏じて業識を生じ、事識を起し、分別識を生して執着を起す之を枝末無明といひ、染法界茲に現はる。三細六麁は實に此染法界生起の順序を說けるものとす。（中末三以下）起信論の一心二門の大要略、此の如し。而して眞如緣起論に於ける涅槃及佛陀論は實に此の敎理に基く。曰く其涅槃とは始覺の智極りて本覺と一致し、眞如全體の顯現せしものをいふ。本覺は元と宇宙の本體に具有する覺性なるが故に、若人、知淨相により、法力熏習を起し、如實修行、和合識を破り、根本無明を滅盡すれば、此に法身の顯現を見る。所謂一切有情に遍滿し、畢竟常恒にして大智光明、遍照法界、眞實識知、自性淸淨、常樂我淨、不變自在、未だ曾つて缺減なきもの、（下末二）要するに佛陀を以て眞如の本體と融合せしめ、認識と實在との一致（理智冥合）に於て佛を見たり。然るに眞如は無量の性德を具するが故に佛陀亦不思議業用あり。一切勝妙の境界を現じ、無量の功德を具して應化益物をなす。所謂不思議業相を現ず。此に至りて眞如の體相用は同時に佛陀の體相用となり。宇宙萬有の緣起論は遂に佛陀論と全く調和し終りたり。尙下に至りて辨ずべし。

普通大乘敎の敎系を緣起論と實相論との二に分つも、是れ其大體の分類のみ。其主とする點に重きを置きて名くるのみ。實相論の敎系は龍樹を以て代表し、緣起論の敎系は馬鳴を以て標榜するも、其根本義に於ては甚だしき差異なく。龍樹の佛敎無相皆空論なりといふも、若し『起信論』の眞如門と比較し來れば、殆んと其所說符節を合するが如し。龍樹に從へば世間の實相即ち是れ涅槃といふ。（『大史』一八〇）然れども其實相は即馬鳴の眞如のみ。唯だ龍樹にありては有相差別の見を破するに急なるが爲め所說往々消極的なるのみ。且つ其佛身を論じて眞應二身となし。若しくは法性身、父母生身となすが如きは、偶々分類の差異のみ。其の眞身中には馬鳴の所謂法身を含む。（大史二一）佛身の本源を宇宙の根底に認むるは無相皆空の中觀哲學にありても多く異なる所を見ず。

以上上座大衆二部の分類より、眞如緣起論を生ずるに至りし歷程の大略を叙せり。阿彌陀佛に關する根本

經典たる『無量壽經』はかゝる理論を主とせるものにあらざるは勿論なりと雖も、馬鳴の三身、龍樹の二身に適合する佛身論を根底となし。更に之と他力攝護の信仰とを調和し、かゝる教理に基きて、彌陀の因願果成を說けり。阿彌陀佛信仰の背景として、此等大乘思想の佛陀論と教理論とを一瞥するを要す。（『起信』の三心（直心深心大悲心）と『觀經』の三心（至心深心回向發願心）とに於て前者は眞如に對し後者は佛に對する凡夫なれるが如き見るべし）

以上は主として論藏を辿りて、佛教教理と佛陀論とか如何に點綴せられしかを見たり。然れども翻つて思ふに論は元と慧を詮す。由來理性主義なり、主智的なり、思索的なり。是によりて幽玄深遠の義趣を發揮することはあらん。されど現實的實感に出てず、直接にして明了に且つ深刻なる要求を表はせるものは、經の佛陀に如かず。論の佛陀は理論的にして、經の佛陀は信仰的なり。論の佛陀は矛盾なきも力なく。經の佛陀には不統一なるも活力あり。要するに論は之を論せるのみ事實とならず。佛教の思想開展の上に論部が補益せし効績は少からざるも、佛教を煩鎖なる教學となせるも亦論藏にあり。論の佛は究竟宗教的要求を充たすに足らず。蓋し佛教各宗中俱舍、成實、三論、地論、攝論、等所謂論宗の運命に見て明かなり。果して然らば更に論師佛教以外に佛教思想開發の內實を探らざるべからず。

（參）法身佛及其化用

羅馬は一日にして成らず。過去は現在の足なり。馬鳴龍樹の大乘佛教其起因や頗る遠く、實に歷代努力の成果なり。大小『涅槃經』を比較するに、純陀の供養。須跋の濟度。金光顯示。舍利八分等經典の骨格は兩者共に事實にとれるも、其構想に至りては甚だしく相違するものあり。『長阿』遊行經（巻九 1b）並に『佛般泥洹經』（自法顯譯 巻十 131）『般泥洹經』（東晉失譯 巻十 366b）にては「身體無堅强」といひ、「舉軀痛甚無牢無强」といひ、「治病不復年已八十」といふ。然るに『大般涅槃經』壽命品（盈五 16b）にありては「如來是常住法、不變易法、如來此身、是變化身、非雜食身」といひ「如來長壽、最爲第一」といふ。一切大衆所問品及現病品には疾病を化現となし、『小乘涅槃經』が「金剛身堅固猶不免無常」といひるは『大涅槃經』金剛身品にては「如來身 常住、金剛不壞」音、護法の因緣に由りて今此の身を成ずといふ。（盈五 1b-16b）又獅子吼菩薩品には「如來常恆、無有變易、一切衆生、悉有佛性」（盈六 97b）といひ大般涅槃は「常樂我淨」なりとなし、其の國土廣博嚴淨西方極樂の如しといひ、『小乘涅槃經』の奉持經戒或は戒定惠解脫知見の語は語として其儘に存するも、同時に常住法身の佛を表はし。「我亦在比丘僧中」は轉じて「悉有佛性」となり、佛性と如來とは全く一致し、法身は宇宙の眞相、世界の實性なるが故に、常住と共に無住所といふ。（盈八 96b）起原必しも後の本質をなさず。大小兩經かくの如く相違あり。教法法身はそも如何にして本體常住の法身に轉じ、人間としての佛陀は如何にして超人的存在となりしか。

想ふに佛陀の法音永く絕えて鷲峯の風獨り吟し。慈尊の月未だ出てずして鷄頭城の曉尙遙かなり。大乘涅槃經』（盈九 98）が阿難を請りて、母子相別るる億世。今一たび會ふとをえて暫くにして復た別る。子は愁思、親を四方に求むとは蓋し當時に於ける佛徒の心情を穿てるものとす。此時に方り佛徒の要求及其歸托は當相

(That)を超えて實相(What)に着眼し、色身以上の實身を見んとせり。

抑も法身佛の信仰や、哲學的には宇宙人生に對する深奥なる旨趣を示し、信仰的には現在佛の要求を滿たし。單なる過去に對する追想、若くは未來に對する翹望に非すして、之に由りて直下に佛陀との交渉を開くを得るに至れり。按ずるに佛陀が無始の存在とせられしは前さに所謂大衆部を起點として屢々發達せしものなること蓋し疑ひなし。原始經典中に既に思想の進歩を示せる彼の如く（「大乘と小乘」參照）論師佛教の系統綿々たる此の如し、（「論に於ける佛陀」參照）グリュンエデル氏の如く始元佛の教義を第十世紀以後の顯出となすの說は且く措き（「佛美」）西人の多くは始元佛（尼波羅西藏に行はれ毘盧遮那の如き地位に居り、喇嘛教古派にては普賢（サマンタバドラ）となし新派にては金剛持（ヴァジラダラ）金剛有情合體不二身となし、五智佛の統領とせられ、（ワッデル『西藏佛教』）法華經の本佛は其思想始元佛に同じ（ケルン『法華經』）「マンデウークヤ、ウパニシャッド」には全く異る意味に用ゐらる（エーベー『印度文明史』P28）を以て佛陀を無始の存在となせる始めとなし。紀元前後以前に遡るもの少なしと雖も、若し吾人の見る所を以てせば、始元佛の名は暫らく置き佛陀久遠成の思想に到りては其發源及其經過は比較的近代に屬するが如し。抑も佛滅後遺弟の歸托たりし、教法は勿論、遺物表徴、其他用語は直に深遠なる意義を附するに適當なりき。過去佛並に梵天勸請の思想は、未來佛の說話と俱に古跡にして新道なる三世諸佛の同一乘を語れるものなるが故に廻て佛陀證悟の久遠を暗示し。後に大乘經典に於ては一佛一衆生あれば必ず過去を語り、未來を豫言し、結緣と授記の形式を殘せり。本生譚亦た之に同じく五百（八千）本生の具象的說話は智德積集の偶然ならざるを示し、同時に佛陀化身、分身と大慈悲化用との思想を包含せり。蓋し菩薩本生の受身と現生神通の化現とは時と處とを交換すれば二者相關聯し得べき思想なればなり。又法輪を梵輪（プラヴァルタナ）となし不死輪（アムリタチャクラ）となすは、教法の久住と共に其永久性を見たり。又舍利を拜し、塔を起すは單なる追懷に出づるものにあらずして、修福生善の爲なれば生身の舍利以上に何物をか想定せるものあり。『智度論』には經卷を以て法身の舍利となし、『法華經』には經卷ある所には舍利を置くを須ゐずといへるは肉身の舍利以上に其の不變無滅の或者を要求したるが故のみ。舍利を假りて經法に名くるは同時に有形の舍利以上に普遍性を認めたるが故なり。佛像崇拜は稍後代(滅後三百年頃)なれども、表徴（シンボル）は有形を通じて無形の或者を表はさんとするに出づ。佛陀入涅槃の光景は禪定佛の想到に亦甚だ難しとなさず。蓋し神通の信仰は佛教の源頭より存せしものなれば、佛陀の理想的說明に關する矛盾と障害とは是に由りて容易に除却せられたるもの少なからず。『增阿』放牛品（巻三 P3）『長阿』阿摩晝經（巻九 P1）には外道梵志佛の三十二相を疑ふや、佛三昧に入りて廣長舌と陰馬藏とを示せりといふが如き是れ其適證なり。又入三昧の狀態は容貌常態に異るものあり。（巻三 P2）多くの大小乘經典は佛陀の一顰一笑を以て其經の發起となし、其相好の微妙を以て三昧に歸せざるもの稀なるが如き見る可し。而して三昧は神通と結合し、特に大乘經典にありては說話布衍の骨子たり。

其他原始佛教の用語中形而上的意義に解釋し得べきもの少からず。抑も如來の十號は大小經典の共通語にして、就中如來は『大論』には「如是去」となし、『成實論』には「乘如實道來」とし、『華嚴經』不還行願品には「如來不來至、此身亦不往」となし、『大集經』不可說菩薩品には佛の出世は無出の出なりといひ、『瓔珞本業經』來去

品には「如來妙法身、非可見聞法……來去義無相、諸法亦如是、非知非可說、是名來去義」となし、『菩薩念佛三昧經』には「如來生無生之生」といふ。（巻八 [illegible]）（西人は如去（thus gone）の義にとり北方佛教には多く如來とす）而してかゝる意義は如來なる語中に既に存し、一轉して諸法實相、萬法一如となる可き哲學的意義を含み、人格的には法身佛陀を産ましむ可き重要なる用語にして、始めより多くは佛弟子間、或は外道に對するに此尊稱を以てせり。『長阿』梵動經（巻九 [illegible]）の如きは我常世間を離れて如來の眞實義を示し、其他原始經典に於て或は如實智者、未顯道の開示者、未成道の成就者として常に深遠なる意義を顯はせり。（『哲學雜誌』『姉崎博士の「如來」『現法』[illegible]及び『易土集』[illegible]參照）

ナザレのエスは其昇天後僅かに五十年にして、ロゴス、キリストとなり、（『約翰』）ヴシリデースは基督をヌースの顯現となし、ニカイア會議には神父と神子とは性を同じうすとなせり。神人の信仰は其精髓の差こそあれ、殆んど各宗教の根底をなせり。蠡つて支那佛教の初期を見るに、中土未だ泥洹常住の說なく唯壽命長遠といふに過ぎざりしを、惠遠は早く既に「法性論」を著はして先見の明を示せり。（『高僧傳』巻六 [illegible]）

佛教に於ける原始的三位一體は三寶にして、後世形而上的思索を交へ同體別體を分つも、（『[illegible]』[illegible]）其三にして一なる所以の原意は、既に『阿含經』中の所々にあり。但し三寶の重點は固より佛陀にあり。佛陀は大陽にして法僧は其の反影を受くる月星に過ぎざりき。此故に、「最上法之主」（巻九 [illegible]）「諸法之本、出於如來神口」。

想ふに一定の時期に達するや。此種の構想は自ら起らざるを得ざるものあり。

（ ）「世尊爲法主、法由世尊」。（巻五 [illegible]）「世尊諸法之本」。（巻一 [illegible]）「諸法之本、如來所說」。（巻二 [illegible]）となし、法は佛の法なりしが、又「彼沙門瞿曇、依法住法、以法而言」（巻九 [illegible]）といへるを推求すれば、直ちに法の何物たるかに想到せざるをえざるなり。既に五分法身に如來の壽命を認めたるは一轉して如來の法身を生ずべき楔機を示せり。戒定惠三學成就は何故に解脫なるや。解脫智見とは果して何物ぞと問ふあらば、佛は法の如く行ひ法の如く知り法の如くにして涅槃に入りたるものといふに歸す。然るに法は三學の教法にして、同時に宇宙の法則なり。冷水焮火不變の諦理なり。解脫智見は此諦理の證得なり。蓋し佛陀の菩提は永存不滅なるが故に、法の不變は慧の不變となり。如來の慧身は又直ちに本體の法身となる。『增阿』『聽法品』（巻二 [illegible]）には福田の最上として、五分法身具足者の存在を見たり。佛身を以て二身三身四身十身となすは正しくは『華嚴』『涅槃』『法華』等の諸經。（近く付『三藏法數』巻一 [illegible]『佛陀論』[illegible]參照）馬鳴龍樹の諸論（『大史』[illegible]已下及『佛陀論』[illegible]以下參照）にありと雖も二身觀の原形は『阿含經』中に存す。「肉身雖取滅度法身在」。（巻三 [illegible]）「如來體金剛不壞慧身無涯底」。（巻一 [illegible]）「肉體雖逝法身在」。（巻一 [illegible]）「如來之身非俗數身不爲他人所害」。（巻一 [illegible]）といふが如きは肉身の裏面を考察せるものにして小乘論たる『婆沙論』（第三十一）は明かに佛の二身を認めたり。蓋し佛身論の端緒は早く既に滅後の遺弟に由りて辿られ、『遊行經』（巻九 [illegible]）には如來意のある所、不死一劫なる可きを說き、其他入涅槃の說法は悉く如來久住の可能を捨てゝ滅に入りしといふにあり（『現法』151參照）。　卽ち三明六通具神力の如來に老衰病苦あるは之を以て應現となさんとするにあり。若し夫れ上に「大乘と小乘」の項下幷に本章次下に引用せる『阿含經』中の

文によれば神通化身と現實肉身と相好莊嚴身と教法法身とは阿含諸經に既に業に混說する所なれば、此中に二身三身の萌芽を認めう可し。唯夫れ肢體既に成るも血液未だ通せず。佛作りて魂未だ入らず。小乘的ながらに思索構想頗る倭小なるを異とするのみ。抑も佛の入りし涅槃は佛陀の自證を措いて又誰人も其深廣を知るをえざれども、佛徒は漸次に積極的の內容を附するに至れり。惟ふに其源泉淺狹ならざるものの如し。但しこは後篇に至りて辨ずべし。（「涅槃と天」參照）此故に滅後の佛陀を遺跡遺物遺法に眺め、過去に投射し、未來に反影し、過去佛に偲ひ、彌勒に望み、本生譚に慰し、菩薩を慕ひ、神話を假り、古譚に基き、譬喩叙說を反覆し、是等一切內外の努力は茲に法身佛を想定するに至れり。唯だそれ流域の擴大は紀元前後にあるも源頭は遠く其三四百年前に存するものゝ如し。之れを概言するに聲聞藏卽ち小乘教は佛陀主義にして、佛に由りて菩提を求め、菩薩佛教卽ち大乘教は教法中に菩提を探れり。換言せば菩薩佛教は達磨佛教となれり法輪を以て佛教を代表せしめたるは勿論、彼阿育王の碑文は殆んど達磨の語を以て佛教を標榜し。西來三藏の名稱は達磨にとれるもの頗る多く（佛陀(69,73,97,147,42,58,165,142,5)(此番號は南條目錄高僧名の番號以下準之)僧伽(54,56,66,80,92,93,131,135,159,162,12,13,15,25,28,29,30,33,38,43,48,51,52,55,62,72,82,86,90,93,96,98,99,109,111,112,119,126,)四十餘人あり。其の他Bhadra, jñānapruṇha Muti Bodhi を名とせるもの十餘人あり。金剛(158,155)陀羅尼(165)の僧名は唐以前に付てなきを見れば密乘佛教りて此名あるを知る可く、之によりて彼を推すに達磨密乘の風を知る可し。支那僧に曇字多きは今一々擧げず。）大乘諸論師の著述と三藏所賚の經典とは多く法義の布衍にありて遙かに教義本位の支那佛教に燈火を點せり。

一言に法身佛と稱するも大小二乘に由りて其內容の意義を異にせり。（鈴木氏『大乘佛教』1270-1284參照）暫らく教法法身、五分法身、如來慧身、要するに佛の法としての法身中自ら多少の相違あり。從つて法の佛としての法身亦自ら差異なきをえず。蓋し諸大乘經所說に淺深あり。『般若經』は無所有不可得の法性體達を以て如來の依處となし、（求般若品第二十七）相好身を獲るを以て如來と名けず、一切智々を以て如來と名け、一切智々は般若に基く。此故に如來の法身、色身、智慧身等を見んと欲せば般若を修せよ（較量功德品）といふ。蓋し『般若經』は頗る多言說を費せるも、元と佛身に對する諸妄見を破し、法身の言詮以上にあるを示すに急なり。『金光明經』には佛壽無量無限なれども、衆生をして佛の光明に悅れしめざらんが爲めに、八十にして色身の入滅を示したるも、佛は本と津涯無限の智慧より生じたるが故に、我常に鷲山にあり。是れ卽ち一切衆生成道の根本たる法身にして、應身は其顯現に過ぎずとなす。（寶九ノ如來壽量品等）特に『法華經』には成佛已來甚大久遠、慧光照無量、壽命無數劫の如來を見、其の暫らく滅度を示せるは方便に過ぎず。薄福の人をして善根を植ゆるに急ならしむるが爲めのみ。佛は醫王の如し衆生の諸病を愈すに巧みなり（盈一38,39壽量品）といひて久遠成佛發跡顯本の由來を示せり。『涅槃經』壽量品も亦同趣。章始に引用せるが如し。『華嚴經』七處八會の說法は實に大方廣にして容易に端睨す可からず。且らく如來不思議境界を示現しては如來諸相の中に十方佛刹を現じ、諸好の中に往昔の行門を現じ、眉間の光を放ちて空中毛端量の處に無量の佛刹を現し、如來の成正覺を見せしめ。（『如來不思議境界經』天十一23已下）佛の壽量を示しては、娑婆界、極樂界、袈裟幢界等各前者の一劫は後者の一日一夜に如かずとなし、

乃至無數の世界以上に勝蓮華世界の長壽無量を示せり。（『大方廣佛華嚴經』『壽量品』天三18b、『頌無邊佛功德經』天十86b）其他「盧舍那佛、於一塵中、示現十佛世界、微塵數等、多威儀路、以攝衆生」といひ、「於一念中、悉能示現、一切三世佛、教化一切衆生」といひ、「法身多門現十方、如是眞應、理事混融、無障無礙」、（佛境界）といひ「清淨法身中、無像而不現」（入法界品）といひ「如來一毛孔中出一切佛刹、微塵等化身雲」、（法界品）といひて悠大なる汎神論に立ちて衆生も器世間も悉く如來身の顯現に皈し、多く佛身を藉りて宇宙論の解決を試み。「或作日月遊虛空、或作河池井泉」等といひ、「佛身充滿、諸法界」といひ、「觀見如來一毛孔、一切衆生悉入中」といふ。蓋し『華嚴經』の佛陀や業用多端稱說すべからず。要するに如何なる言辭比類を假るも尙之れを顯はすに足らずといふにありて。正さに般若經と表裏をなせり。

法藏の所謂「佛則理、即事、則一、則多、則依、則正、則人、則法、則此、則彼、則情、則非情、則深、則淺、則廣、則狹、則因、則果、則三身、則十身、則同一、無礙自在、」（『華嚴經旨歸』（華嚴經の明文は主として此の書による）（陽二72a）といへるもの華嚴經稱性緣起の法身を約言せるものとす。

以上は主として壽量によりて如來久遠の本體を說き兼ねて普遍實在の佛身を見たり。蓋し時間的に久遠なるは空間的に普遍ならざる可からず。諸大乘經中又之れを光明に假りて、其の無量を言はんと欲し若しくは言明せるもの少なからず。而して其の光明は佛陀の智慧を表するものに外ならず。『思益梵天所問經』には三十餘光を列ね（字數は他の二異經亦た同じ）又「如來身者即是無量無邊光明之藏」といひ、『本業瓔珞經』には菩薩四十二位を表するに四十二光を數へ、（列一12）『大集經』には菩薩八智を表して八光を數ふ。（玄一）凡そ一經一論苟くも佛陀の勝德を擧ぐるに光明を缺くものなし。セナル、ケルンの諸氏が曾つて佛陀の傳記を以て巧に大陽神話に歸せんとせしが如きも蓋し偶然ならず。若しそれ經典中の光明のみを取るも、優に一箇の研究たるを失はず。而して光明は常に法身佛陀の廣大を具象的に說けるに過ぎず。大乘經典の佛陀は此の如くにして、神話を假り、譬喩に寓し、形而上的思索と觀念論的哲學とを經緯とし、神通示現の思想と結びて常に本體佛を見るに努めたり。

大小二乘の佛陀を比して其の相違を示すものは彼の大乘佛陀の四德なり。『無常依經』（眞諦）には如來最極の常樂我淨の功德は聲聞緣覺の所智に非らずといひ、（菩提品）『涅槃經』には大涅槃を常樂我淨となし、（德王菩薩品第十）『本業瓔珞經』には明かに此の四德を以て滅諦涅槃を說けり。（集散品列一12）『大雲經』（無讖）（獅子吼品第十一等）には如來法師法界甚深の常樂我淨を示せり。（初分大乘鍵度第一）常樂我淨の四德は大乘經典の殆ど通說といふも可なり。以上によりて法身佛陀は壽命無量、光明無量、常樂我淨の實在なるを見たり。

抑も佛陀證悟の源頭を尋ね、之を法身久成に見たるは確かに深奥なる思索に基くものありと雖も、客觀の理を主觀の智に結合するは同時に主觀の客觀化を免れず。況んや汎神論的佛陀は往々にして神格の精神的方面を失ひ、萬有中に雲消霧散し去るものあり。『法常住經』に「有佛無佛法性如故」といひ、『維摩經』菩薩品には

一切人法不起不滅の如を本體とするが故に彌勒の受記は同時に一切衆生の受記なりといへり。佛教にして哲學たらんか、如々法性を見るのみにして可ならん。苟くも宗教的要求に應ぜんか、茲に離言絶相の眞如以外に性德具足、本覺佛陀の業用を缺くをえず。（本覺と眞如との差別は議記中本14）『大集經』には流布の爲めに十力と說くと雖も、一力中に無量力を具すといひ、（玄一31）十八不共法は『俱舍』『婆沙』『大論』『瑜伽論』『雜集論』に五種の異說あり。（『佛陀論』337巳下）『無上依經』には一百八十不共法を說き、（如來功德品第四、三十二相、八十種好、六十八法、（十）力四無畏三念處大悲十八不共法三十二種如來獨得）『十住毘婆沙論』には四十不共法を說けり。（四十不共法品 發八42巳下）（般舟三昧經により佛の相好を觀ずるに四十不共法を以て佛の功德法身を觀ずるなり）『寶積經』には三事教化は悉く神通の形式をとり。呼ぶに三種神變を以てせり。

法身佛は元と佛の法を法の佛となせり。法は元來教理研究に屬し、佛は感化度生の中心をなすものなるに、佛教思想發達の沿革中にありては、先つ佛身論の開展に於て、哲學思想と宗教觀念との結合を遂げぬ。蓋し是れ佛陀感化の餘薫が常に佛身考察の中心を成せるが故なり。前に現實佛陀の化他方面を記するに當り、其の教化の特色及び形式を擧げしが、今法身佛の化用は畢竟其加上に過ぎざるを知るべし。山河長へに默するも、横說竪說五十餘年、一たび點ぜし感化の燈火は南北に傳へ東西に移るも、曾つて其偉大なる人格を反照せざるなし。

抑も覺他の根本は佛陀人格の一面たる慈悲に基けるは、前に既にいへり。此故に『阿含經』中にありても四無量心は所々に散見し、（『增阿』『利養品』从一33）（『苦樂品』从二12）（『中阿』『那伽羅』『若經』从五35）（那伽支羅經从五103-104）（維云經从五18-19）（波羅奈經从五27-29）（牛長經从五55-56）（愛師經、馬色經下）（半渠破群那經、阿那律陀經下）或は三業の慈を數へ（从一130）或は凡常の六力に對して佛には特に慈悲力を認め、（从二27）或は衆生の爲めに六法（施、教戒、忍、說法、護衆生、求無上道）厭足なしといひ、（从二33）或は如來愍念衆生の大慈悲は一切の未度者を度するに、恰も母の子を念ずるが如しといひ、（从二336）或は如來の慈愍は世界最勝となせるあり。（从九123）其他『增阿』『三寶品』『中阿』『福經』等皆慈行を勸め、『增阿』『邪聚品』には如來五事の爲めに出世すといへる所謂五事とは化他に外ならず。（从二33）又天部が他を害せず、涅槃をえたるは慈悲なりといひ、（从二49-50）『增阿』『馬王品』には慈心生梵天の勝果あるを說き、佛陀の樹下成道も慈最第一を知れるにありといへり。（从三21-22）是の馬王品の如きは前に述べたる如く降誕の意義を二利の完成にありとなせるに同じ。『本事經』一法品には慈悲解脫最第一、諸福業其十六分の一に及ばずといひ、（从六28）諸佛傳特に『佛所行讚』の如きは諸有形容を假りて、慈悲を宣顯せり。大乘經典に至りても亦た其原意を失はず。否益々之を布衍せり。『法華經』譬喩品の火宅喩。信解品の窮子喩。壽量品の醫王喩等皆佛陀の慈悲を顯示し。『瓔珞本業經』には大智悲を成就し、無緣の大悲を以て衆生を攝化すといひ、（列一1-2）慈悲心なきは菩薩にあらず。佛は一切衆生を見ること恰も羅睺羅の如く、提婆亦平等一子の慈愛に漏れずといひ、（列一56b）彼の無相空觀の『般若經』にありても其の菩提を得る目的は慈悲攝化にありといふ。（菩薩住品第四十八）『維摩經』の如きも亦如來の本體は智慧慈悲にして、他は善權方便となせり。（菩權品不思議品黃七29-30）『思益經』第七品には三十二種の大悲を擧げ、特に『涅槃經』（盈五65b-68a）にありては佛陀教化の形式たる十力に大慈を加へて十一種となし、大慈大悲を添へて十二種となし、『大論』（鎧一35a に據る）には慈悲

を拔苦と與樂とに配せる如き。如何に佛陀の慈悲を重視し來りしかを見るべし。彼の如來の十號を以て悉く慈悲に配し、（榎興『述義述文贊』中に『瑜伽論』に據れり）佛陀は自覺覺他の義となり、如來の來字に化他の意ありとなし、（『大乘義章』二十一「乘六波羅蜜十二空來」）菩薩は上求菩提下化衆生の義となすに至れるもの、蓋し因て來る所あり。古來諸論師が佛智、佛身、佛土、の分類をなすや、多くは悲智の二門を以てせり。『起信論』の智淨、不思議業の二相。『攝論』の根本、後得の二智。『佛地論』の實化二色身。並に自他二受用身。『觀音玄義』の一切道稱の二智。『法華玄義』の本迹二門。『金光明玄義』の性、方便の二淨涅槃等皆此二面を表顯せるものとす。佛陀人格の二面は前後を通じて佛教經典の眼睛なり。彼の獨覺も部行獨覺にありては一部の利他を認む、恐らく佛陀論の反影に出てしには非ざるか。

但し大小經典等しく此の二面を見たる中、阿含經にありては師主としての覺他を距らざるも、大乘經典にありては之を法身佛の相用に歸せり。理佛に基ける事佛なるを言明せり。馬鳴の三身論は此の理によりて起る。即ち佛陀の自性は無明斷滅の絕待智境即法身にして此の法身佛智は眞如の妙用によりて、諸相を具し、衆生を攝護す。體は一なるも其相用は報應二身となり。凡夫二乘菩薩に應じて種々莊嚴無量の色相を現じ、無量の應化をなす。（『起信論』（義記）下本 25, 26）所謂眞如の自體は絕待普遍、其性德や大智慧光明、遍照法界なるが故に、其用や亦普遍にして、十方に及び三世に亘る、法身は不動なるも、衆生の見聞に從つて攝化萬差なり。是れに由りて彼の本生因地の誓願の如きも亦一に眞如の用に歸せり。（『起信論』（義記）下本 26）是れ即ち形而上的本體たる理智合一の法身上に、差別的功德を說けるものにして、絕待智と其化用との關係を哲學的に又宗教的に說明せるにあり。而して龍樹の二身論も亦此三身說と歸趣を同うせり。（『大史』207『佛陀論』278-308）要するに馬鳴の佛教は其修行信心分に至るや、如上の佛陀觀に基き佛の勝方便なる攝護と衆生の信行とを結合せり。此に至りて信心念佛は佛陀大慈悲の攝護に基き、吾人本具の性德と佛智菩提との二者融合に宗教的關係を認めたり。馬鳴は四五百年間の思想を大成し、現身佛陀救濟の慈悲心は、今や無量の功德を具する報應の佛身となり。正覺自證の佛陀の內證は、始覺本覺の合一となり。法身智身となりて佛陀の人格が理想化せられ、詩化せられ、深奧なる觀念論と敬虔なる信仰とは中正の位置を得て、他力本願の佛陀が何故に法身佛より生じ來るかを示せり。法身萬德を具有するが故に、其の報身を現じ應身を示すも悉く佛の方用中に包含せられ、從つて現在多佛は此に其教理的根據を得たり。斯くの如くにして師主なる佛陀は遂に救主なる報身彌陀の信仰を生ぜり。

第五章　阿彌陀佛

佛陀論は其發足點に於て、既に現實の佛陀を起本とせり。此故に法身理佛は各種の信仰を說明すべき大本たりと雖も、宗教的崇拜の對象となし、之を一般民衆の歸托とせんには、又再び具象的說明を假らざるべからず。阿彌陀佛は正しく其一なり。

『無量壽經』は本生の發願と其願成とに成る。之を釋迦佛の本生に比するに法藏比丘の本生譚は其場所及人

物悉く構想的にして、其の因行は唯だ綱目を列ぬるのみ（『梵本』第十章）。但し釋迦佛本生の模型に出づるは勿論なり。前きに佛傳は譬喩的叙說と神話とによりて着色せられしを述べしが、今阿彌陀佛を見るに其光明は澤婆の月光以上といひ、「如耶摩天」といひ、「成那羅延力の發願者」といひ、佛敎以外の諸神を假りて其の佛を形容するが如き、明かに譬喩的神話的痕跡を認むるを得べし。特に『梵本』第二章第十二章第四十二章中の佛名を見るに、光明と吉神と譬喩とによりて立名せられたるもの多し（2, 3, 11, 14, 15, 16, 18, 20, 23, 24, 29, 30, 34, 35, 41, 45, 52, 50.（此數字は梵本番號））。或は因陀羅、須利耶等諸神の名により（33, 43, 44, 11, 16, 34, 41, 45, 10.）或は栴檀金寶、（39, 67.）或は幢幡、（69, 70.）或は山岳（5, 21, 19, 26, 25, 16.）或は華果、（31, 32, 33, 53, 53, 63.）或は獅子、（40, 66, 71, 80.）を借りて佛名とせるが如き之によりて同時に阿彌陀佛が如何に構想的なるかを推するを得べし。詳細なる叙述は繁に失するが故に略す。（『梵本』第一章第一頌、第八章、第廿二、第廿四、第廿一頌、及三聲偈、第十一頌、第十二頌第九章第六頌第七頌并に格樂の形容を見るべし）但し此等佛名は始め純粹比喩として用ゐられたる語なるを忘るべからず。日月、蓮華、諸寶、醫王、獅子象等は皆佛傳の譬喩として使用せられ、就中光明と蓮華とは到處に散見せり。由來佛敎經典は頗る譬喩に富み（上「敎化特色」參照）譬喩は人格化せられ、遂て佛名とせらる。『平佛名經』見るべし。概言するに『阿含』部中に譬喩とせるものは大乘經典は多くは之に事實的構想を加えしを見る。惟ふに藥師 Bhaisajya の如きはアシヂンの天醫 Daivyā Bhusajā と相通じ、特に佛陀が醫王たるの譬喩に基けるには非るか。『雜阿』（辰四 63, a-b 辰五 82, b）『增阿』（從三 83, a, 83, b）等を以て『藥師本願經』に比較し、更に『法華經』壽量品の醫王を假らんか、略ぼ藥師如來を說明しうべきが如し。是によりて類推するに阿彌陀佛の信仰亦かくの如くにして說明しうるもの少からざるが如し。但し神話譬喩を假るは元と佛陀業用の偉大を說くに在り。此故に元と神話の材料を取りて佛身の勝德を稱しながら、しかも神話を脫せんとせるを見る。蓋し佛敎敎理上然らざるを得ざるものあるに出づ（『梵本』第一章第一頌、第九章第六頌第七頌尙下「佛と天」參照）。元と佛智は佛身の根底にして、光壽無量も有福莊嚴も是によりて其成立の根據を有す。『無量壽經』にありては理論を主とせざるが故に『般若』、『維摩』、『圓覺』、『法華』等の如く、敎理其ものに就きての叙述はなし。然れども譬喩的說話的叙說の間に、此等諸經典と同一の意を漏せるもの少からず。第一光明は智慧の相智慧の發表となし、「無邊無比の覺證なる無量光よ」と（第四卷第一第二頌）いへり。是れ世自在王佛の諸嘆偈なるも法藏比丘が其佛の如くならんとの希望を述ぶるに先立ちて、彼佛を讃嘆せるもの故に阿彌陀佛の形容と見、同時に該經の佛陀論と見るをうべし。又邊地胎生の原因を以て佛智の疑念に歸し、佛は勝智、不可稱智、無盡智、廣智ありといふ。（第四十一章「魏」には佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智といひ、「唐」には佛智、超過智、不思議智、無等智、成德大智といい）佛智內容に就いては詳細の記事なきも光明を以て智慧の顯現となし、淨土の莊嚴は悉く佛陀覺者の功德とせるは觀念論的豫想を假れるものにして、此等の佛智は聲聞緣覺の所知に非ずとなせるは、（第四十四章第四第五頌）是れ普通大乘敎典の敎理に基けるや明かなり。又「佛陀導師たらんがためには最上の智見を有せざるべからず。故に無着智見を有せる主世尊が、有爲（界）三種の（學）を知り給ふが如く、我亦等しき所恭敬者、諸聲の最勝者諸人の導師とならん」と云ふ（第九章第十頌）。十力を有せる最上無比の所恭敬者、世界の師主は皆覺者佛陀によりて、始めて得られべく、是れ智慧成就の結果なり。獨り佛のみにあらず。極樂の衆

生は皆無礙智を得と云へり。此故に法と佛とは密着不離にして、法藏比丘の發願は法王たらんがためにして、「法主の智を成就して、今の世自在生佛の如くなり、法王となり、衆生を生死より、度脱せしめん」。(第四章第四願)といふ。但し第四十四願(「魏」「唐」第四十六願「宋」第三十五)の法敎は敎法の法にして、又第二十八得辨才智の願には、「爲諸衆生通達法藏」(「宋」)といふも、是れ又敎法の意味なり。其の他此意味に於ける敎法の語も屢々遭遇するも、「法は深廣微妙なり。覺者の最上なるは海の如く不可思議なり」(第四章第三願「魏」深諦義念、諸佛法海、究其源底「唐」「宋」同意)。等といふは單に敎法の意味のみにはあらず(此經典に於ける法の意義に關しては、第十八章、第十一章、第三十八章、第三十九章、第十章等に在り)。

明かに法を以て宇宙の根元、萬有の眞源となすべき、所謂法性の形而上的說明はなきも其意味は十分に存せり。『無量壽經』の阿彌陀佛は表面酬因感果の佛陀を描くにありて、彼の性具本然の佛陀を表し、或は唯識所現の佛陀を說くにあらずと雖も、其具象的說話の中心核實は實に大乘佛敎の敎理に基けり。此故に開卷第一、三世十方の諸佛に歸依を表し、佛身の常住なるを述べては「如來は無礙因智見を有するが故に一食施を以て能く永劫常存の可能を具有す」といひ、又行業不可思議なるが故に佛壽無量なりといふ。又其佛力も法佛の威力なるが故に頗ぶる增大擴張せられ、「諸佛出現に就き如來へ問ふべき、此義を考ふるも、是れ實に如來の威神なり」(第二章)といひ、又法藏別願を說き終はりて次に偈を說かんとするや、「覺者の威力によりて此等の諸欲を說く」といへり。

佛陀の譬喩的叙說と其神話化とを混じ宗敎的に慈悲攝護萬德具足の佛陀を讃き、裏面即ち常住の思想を含み、此を以て地下に沒せる伏水となし、彼を以て地上に表はれたる井泉となしたるもの、是れ即ち『無量壽經』の阿彌陀佛なり。

前きに序論に於て阿彌陀佛の起原を耶摩に求め、微瑟紐に迫り、若くは大善見王に追躡し、吠陀にも優婆尼沙土にも其前身を探るをうべく、就中梵の思想にも關係あるべきを見たり。蓋し佛敎佛陀論が梵の思想に負ふ所頗る多きは下本篇末に述ぶる所の如し。然るに『如幼三摩地無量印法門經』の威德王は釋迦佛なり。而して其所謂威德王は微瑟紐蛇床中の梵天に類するものあるは前きに既に云へり。かくの如くにして釋迦佛と阿彌陀佛とは始終關係あり。阿彌陀佛は一方梵天に迫りうべきの外釋迦佛と頗ぶる密關せるものあり(「本生譚」阿彌陀佛章末參照)。大乘佛陀觀を看却しては到底阿彌陀佛を論ずる能はず。特に『無量壽經』に於ける阿彌陀佛本生名は漢譯に曇摩迦留、(地八16)吳譯に曇摩迦、(地八13)魏譯に法藏、(地八16)唐譯に法處、(地八25)宋譯に作法(地八19)といふ。(此中「吳譯」の曇摩迦は同譯始めの諸佛列名中、第廿九曇摩黎提は「梵本」第三十七法慧菩王 Dharma-ni なるべく、蓋し吳譯には Dipuḍkara を提恕揭とするか故に恐ら pu なるを知る可し。然らば曇摩は法なると明かにして恐らく漢譯曇摩迦留の略體ならん。「宋」譯の作法は ākara を ākara 若くは kara と見たるものの如く、作字は後の二語に近く、且つ「宋」譯第廿三願には法藏の譯語あるか故に法藏とせずして作法となせるは何等か原語に相違ありしならん。「唐」譯法處も亦かゝる韓訛に出でしものならん。)此等諸名悉く法に關せざるなく、『梵本』の法藏 Dharmakara と同一思想なり。『大論』には法藏或は法積といひ、(往一68a)『悲印三昧經』には慧上といひ(南一23b)『智印經』には慧起となせり。『阿含經』の寶藏如來特に『大方等大雲經』の法藏如來(盈十52)の如きは同所の文に「能開如來、秘密法藏」の語あるに徵し、佛敎的命名たるを見るべく、法寶藏(碧二95b)の語の如きは藏經中到る處に發見せらる、果して然らば法藏比丘は佛敎的名稱な

ると明にして、更に密教には阿彌陀佛は蓮華部主にして法部の主たり。後代淨土教家多くは阿彌陀佛と涅槃とを同體異名となし、「一如法界ヨリ、カタチヲアラハシテ法藏比丘トナノリタマフ」（親鸞『一念多念文』、『唯信鈔文意』其他『原理論』[以下の引文参照]）といふが如く多く法身佛の顯現と見たり。此の如きは固より宗義の解釋に過ぎざるもそも阿彌陀佛はかゝる教義に擬せらるゝも未だ曾て何等畸形を呈することなし。然らば則ち之を佛教内發となし、阿彌陀佛を釋迦佛に遡り、佛陀論の思想開發に歸するも亦一考說たるを失はざるべし。若しそれ前章法身理佛の思想を假り、諸經の壽量品に無量壽佛を認め、佛身莊嚴に無量光佛無量淸淨身を觀じ得べく、抑も法佛の根本は實に阿彌陀佛ならざるべからず。不空譯『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』（四七[b]）には『法華經』壽量品を念じて、次に無量壽如來（阿彌陀佛）の眞言七遍を呪すべしといへるが如き、明かに『法華』の壽量品に阿彌陀佛を認めたり。其の救世の本願、無限の慈悲、易修の信行は、佛陀化他の業用によりて說明せらるべく、阿彌陀佛に附屬せる極樂の莊嚴、其の他悉く佛教教理の說明によりて可能ならざるはなし。但しそは全篇の論述に涉るが故に略す。玆には以上章を重ねて論述せしが如く、佛陀論は佛教教理と相待ち相助けて層層變遷發達し來りしが、是に對して阿彌陀佛は如何なる要求に基き、如何なる特色を有するか、以下廣く諸經に於ける阿彌陀佛を觀察すべし。

(壹) 阿彌陀佛は現在佛なり

諸經中阿彌陀を過去佛とするもの一もなし。『大方等菩薩念佛三昧經』には無邊光佛は過去佛中にあるも、次に別に阿彌陀佛あり。（去八[b]）『觀自在菩薩母陀羅尼經』には阿彌陀佛は觀音本生の過去佛となせども、同時に又現在佛とせり。（成十[b]）又未來佛とするものもあることなし。『不思議功德諸佛所護念經』に未來阿彌陀佛あるも、亦西方極樂の阿彌陀佛を遇せず（黃三[b]）。但し或過去時に出てたる佛が、阿彌陀佛の前身即本生の阿彌陀に當來成佛の記莂を授けて、其已成未成を說かざるものはあり（『大法炬陀羅尼經』等）。『無量壽經』には十劫正覺となし、『寶積經』には燃燈以前の成道となし。『訶離陀經』には然燈佛同時成道となし、『文殊根本儀軌經』には過去六十二恒阿沙の彌陀を語るの相違あるも（『說林』七[b]）結局阿彌陀佛の現在佛たるは諸經悉く然り。彼の『出生無邊門陀羅尼』に「佛無量壽爲法師、我等賢劫皆隨喜」（四八[b]）といひ、又彼の『十住毘婆娑論』（卷八）に然燈を過去佛の筆頭に書し、阿彌陀を現在佛の首位に置き、彌勒を將來佛の第一とせしは、阿彌陀佛は現在佛としての信仰が特に著しきを示せるものとす。

(貳) 阿彌陀佛は事佛なり。

毘盧舍那の如きは常に法身佛にして、釋迦佛は多くは應身佛として、時に法身報身として表はさる。然るに阿彌陀佛は理佛として表はさるゝ事もなきにはあらざるも數に於て極めて少なし。宋譯『無量壽莊嚴經』の「來無所來、去無所去、無生無滅、但以酬願度生、現在西方」。觀經の「法界身」。『大乘入楞伽經』の（黃六、[b]異譯黃六[b]同之）。「十方諸刹土、衆生菩薩中、所有法報佛、化身及變化、皆無量壽佛、極樂界中出、於方廣經中、應知密意說」。『瑜伽集要焰口施食儀』の「法界藏身阿彌陀佛」。『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』（四十三[b]）の

「性虛空阿彌陀法身」。『不空羂索神變眞言經』（四十一 57a）の「阿彌陀法身」。『華嚴經』（實叉難陀）普賢行願品の「十方無量土遍滿」の阿彌陀佛（天四 11.b 94.b）（從賢譯入法界品同意）の如きは、理佛としての阿彌陀佛なり。勿論『論註』の「入一法句」『法事讚』の「報體即元來不動」を以て解すれば、事佛以外に理佛なく、阿彌陀佛は又直に理佛たるべく、後代淨土の教義に從へば阿彌陀佛は本佛にして、諸佛の根底なり（『念樂』121）。迹門以上の本門に遡らんか、「久遠又久遠塵點又塵點」（『說林』七 2）なるべしと雖も是れ教義の解釋のみ。其の著しき點を取り其の經の趣旨を併せ考ふるに、阿彌陀佛は理佛として表はさるゝこと極めて少なし。先に引ける『入楞伽經』の如きは、南天竺龍樹の懸記（黃六 111）を載せたるより見れば龍樹以後の成立なること勿論にして、理論的討究の結果、阿彌陀佛を理佛となしたるものならん。是れ支那に於ける解釋者が阿彌陀佛を理佛となしたるに同じ。同經文に「應知密意說」といふは、明かに顯說には阿彌陀佛は理佛ならざる事を反證せるものにあらざるか。『瑜伽集要』の如きは勿論密教經典續出後の成立なること明かなり。阿彌陀を明せる經論二百四十餘部中、阿彌陀佛を理佛とするもの甚だ少なし。彼の『起信論』に諸佛菩薩が巧善方便を以て衆生を攝護する中、特に專念阿彌陀の思想を表はせるは、眞如の相用に於て阿彌陀佛を見たるに在り。就中大乘經典中主要なる理論的經典に於ける阿彌陀佛を見るに於て益々其然るを知る。

(參) 理論經中の阿彌陀佛

(イ) 般　部に屬するもの廿九部七百四十七卷中『說林』（第一卷廿）には『般若經』中僅かに三所（洪 165 等）に出づるのみといへり。而して、其文は唯だ「此佛土妙莊嚴猶如西方極樂世界」といふに過ぎず。釋迦佛土の莊嚴を以て彼の極樂に比況せるのみ。

(ロ) 涅槃部に屬する經典總て十六部一百二十一卷。(一)『北本涅槃經』（盈五 8.b 盈五 18.）(二)『南本』（盈七 9.10.52.）盈八 18.）(三)『法顯譯』（盈九 5.b 13.b）。以上三經十文、釋迦佛土或は其衆生が西方無量壽極樂世界の如しといふに過ぎず。(四)竺法護譯『方等般涅槃經』、(五)那連提耶舍譯『大悲經』には種々の善根によりて極樂に生ずと說き、(六)隋毘尼多流支譯『大乘方廣總持經』（盈九 103）、淨命比丘たりし因位を說き、(七)姚秦佛念譯『菩薩處胎經』（盈十 33）、極樂幷に懈慢國のことを說き、(八)同人譯『中陰經』（盈十 107）、觀音と勢至とが佛の威神力によりて「我師無量壽永劫不滅盡」の頌を說くのみ。少きは一行多きも三四行（縮刷藏經にて）を出てず。

(ハ) 法華部に屬する經典十四部五十七卷。(一)西晉法護譯『正法華經』。(二)姚秦羅什譯『妙法蓮華經』。(三)劉宋智嚴譯『法華三昧經』。(四)隋闍那崛多譯『添品法華經』。以上四經には化城喩品の大通智勝佛の十六王子の一人として（盈一 25）及び藥王菩薩本事品中「如來滅後五百歲中、女人此經典を讀誦して阿彌陀佛國に生ず」（盈一 48）との二文の異譯に過ぎず。(五)劉宋智嚴譯『廣博嚴淨不退轉法輪經』に此經を流布せば阿彌陀佛の安樂土に生ず。(六)西晉法護譯『阿惟越致遮經』、(七)凉土譯經『不退轉法輪經』も同意僅かに一行。しかも其經典讃誦の爲に引合に出されたるのみ。(八)『大法鼓經』にも離車童子が其の經を宣揚して安樂國に生じたるを記せるのみ。法華部中、八經十二三ヶ所に多くは事佛にして數行の記載あるのみ。

(二)華嚴部二十八部二百三十三卷に於て覺賢譯『文殊師利發願經』(天二83)。唐實叉難陀譯『大方廣佛華嚴經』(天三12)(天四11, 94)。唐提雲般若譯『大方廣佛華嚴經修慈分』(天十1-32)。唐玄奘譯『顯無邊佛土功德經』(天十86)。提雲般若譯『大方廣佛華嚴經不思議境界分』(天十1-52)。同じく實叉難陀異譯(天十1-55)。宋法賢譯『佛說較量一切佛刹功德經』(天十86)。以上七經に十二ヶ所の文あるも、覺賢譯『大方廣佛華嚴經』中に散說せる經意以外に出づるものなし。但し『華嚴經』中には、比較的重要の文あり。(一)入法界品是なり(善財五十三番)。其大要は、善財普く知識を訪ひ、其數都べて五十三師。始め文殊より終り普賢に至り不思議法門を尋ぬ。然るに普賢は示すに專ら西方往生を說き、自信敎人信二利圓滿菩薩行成就の意を以て敎ふ。善財一切佛道の成辨唯だ西方往生に在ることを證知すといふの意なり。此入法界品中の文句の分量は少分なれども、經意上全體に關するものにして『說林』著者は「私云古人讃念佛法門、而言華嚴之終歸、此言不誣也」といへり。而して此の阿彌陀佛は事佛なり。『說林』によるに此經中十一ヶ所の文を列擧せり。(二)或は「如來不來、此身不往、若し見んことを欲せば無量壽如來意に隨て現ず」といひ、(三)或は「彌陀觀音灌頂地に住し、十方無量土に遍滿す」といひ、(四)「臨終一刹那に極樂に至り文殊普賢觀音彌勒を見る」といひ。(五)又普賢十大願の義を說き終りて次に「此願王を疑ふなくんば阿彌陀佛の極樂界に往生す」といひ、(六)又「願我臨欲命終時、盡除一切諸障礙、面見彼佛阿彌陀佛、即得往生安樂刹」といひ、(『文殊師利發願經』同意)(天十一)、(七)又「我は此れ普賢殊勝行無邊の勝福皆回向して諸衆生をして無量光佛土に往生せしめん」といひて、前來の諸經典に比して阿彌陀佛を主として說けるもの少からず。華嚴經は幽大なる汎神論なるが故に、此中多く阿彌陀佛は又華嚴經的なり。先きの不來不去遍滿無量土の如きは其の適例とす。但し阿彌陀佛は本來事佛なるが故に『華嚴經』の理想たる勝蓮華世界の賢首佛に比するときは、固より劣れるものとす(八)(天八85)。壽命品、實叉難陀譯(天三12)『顯無邊佛土功德經』(天十86)『較量佛刹一切功德經』(天十86)皆同意の文あり。以上は縮刷藏經の分類即ち智旭『閱藏知津』の分類に從つて、天臺五時の判敎に基き、經典の部門を分ちたるものなるが、天臺五時の判敎中小乘諸經を除きて大乘中には尙方等部(アイウンセン)の部に屬する經典は其部名の表する如く極めて雜多なり。其中理論を主とせる經典中(ホ)方等部にては先づ『金剛經』『圓覺經』『勝鬘經』中には一所も阿彌陀佛に關說するものなし。其他(一)『菩薩瓔珞經』姚秦佛念譯(列一)には西方衆智自在佛刹等が壽命阿彌陀國に類す。但だ男女衆生阿彌陀佛國に如かずといふのみ。(二)『維摩經』(支謙、羅什、玄奘の三譯)には十佛或は十一佛中の一佛として擧ぐる外は極樂を比例に出せるのみ。(三)『大方等大集經』(曇無讖譯)二箇所の文あり。其一は極樂を比況に出せるに過ぎず。他は惡口を禁ずる說法をなせしといふにあり(玄二15)。(四)『金光明經』(曇無讖譯)淺淨譯を合せて其中七箇所の文あり。而して四方四佛の一佛として表されたるもの四ヶ所、他の文も亦重要ならず(黃九64, 12)。(五)『入楞伽經』は先きに引けり。

以上に擧げたるものは必ずしも理論的の經典といふをえざるも、世人の之を見るや、比較的其の敎理を愛玩するもの多く、又此中多くは哲學的敎理宗を發生せしめたるが故に暫く之を理論經と稱せり。之を要するに理論的經典にては阿彌陀佛を全く說かざるか。或は比況として擧ぐるか。經典讃嘆の手段とせるか。若く

は該經の教理中に調和せるものかを出でず。就中事佛たる事最も多し。抑も諸經論に於ける佛陀は、其經論の旨趣に從つて多少着色を異にす。此中『般若』『法華』『涅槃』は史的佛陀を迦りて其內證智を探り、諸法實相に達せんとし、多く智的佛陀を見たり。蓋し佛傳中特に注目を惹けるは成道と說法と涅槃とにして、佛陀の成道に佛を見たるものは『華嚴經』。其轉法論に佛を見たるものは『涅槃經』にして、此等諸經によりて起れる涅槃宗、天台宗、華嚴宗が、多くは教理的にして教判論に匆忙を極め、『無量壽經』等によれる淨土教の如く信仰的にあらず。主智的にして主情的にあらず。自力的にして他力的にあらず。難行道にして易行道にあらず。要するに彼等諸經が佛陀內證の自覺に遡り、法身の法を見るを主とし、多く法に即せる理佛に傾き後代に至りても『法華經』を中心とせる日蓮聖人は五時を序、正、流通の三分となし、延いて其餘流は今尙人法本尊の爭をなせるが如き、法に即せる佛を離るる能はざるを知るべし。法に即せる佛陀は多く宇宙的汎神的、若くは本體的形而上學的にして動もすれば輒ち宗教信仰の埒外に逸し、哲學思辨の範圍に入らんとするの傾向あり。之に反して阿彌陀佛が多く事佛として表はされたるは、後來北方特に日本佛教が其宗教的活力を此佛陀に於て繫げるに併せ考ふるに大に趣味あるものとす。阿彌陀佛は法に於て佛を見たる佛陀たる點もなきにはあらざるも、しかも佛に即せる事佛として表はさるゝ事最も多し。尙下「極樂」の項下を參照すべし。

（四）說法佛としての阿彌陀佛

『大方等大集經』（玄二15-5）には西方安樂世界の無量壽佛東方妙樂世界の阿閦等と共に娑婆界に來るや、一梵王菩提自在の爲に口業の過患を說けり。『寶星陀羅尼經』（玄六13）是と同意の文あり。此他に『七佛所說神咒經』（四14）『大陀羅尼末法中一字心咒經』『瑜伽大教王經』（成四41a）。『一切如來金剛三業最上秘密大教王經』（成四94, 93, 95）此他尙二三の經典に說法の事あるも、要するに說法佛たるは阿彌陀佛の特色にあらず。『大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋』（四八870）に法部の加持あるが故に水鳥樹林皆法音を說くといへるは密經にては阿彌陀が蓮華部即ち法部の主なるが故に之を以て『無量壽經』の經意に附會せしに過ぎず。又彼の『大經』『觀經』等に阿彌陀佛が極樂にありて說法すといへるも、何等の說法をなすかの記述なし。若し又少しく記述するものあるも、是れ唯だ諸佛同道の說法の形式を與ふるに過ぎず。之を毗盧舍那、釋迦、彌勒の諸佛に比するに阿彌陀佛は說法佛たらざりき。說法佛は理に即し教義中心の佛陀となり、阿彌陀佛は人格中心の佛陀にして法に即了せる佛陀にはあらず。畢竟信仰の對象としての佛陀なり。

（五）禪定佛としての阿彌陀佛

阿彌陀佛は禪定所現の佛陀にして、尼波羅及西藏に於て又支那佛教史上に於て常に禪定佛たること多く、『觀無量壽經』は主として此觀念禪定中に阿彌陀を感見せんとするにあり。『無量壽經』は阿彌陀佛の因願果成を說くにあるも、禪定佛たる痕跡なきにあらず。先づ阿彌陀佛の久住と不壞身との起原を定門の成滿に歸せり。又彼土菩薩の修行には善分別勝三摩地あり（「梵」四十頌）又無盡の普等定あり（「梵」第四十三頌）。從つて法藏の修

行中にも禪定を略せざりき。特に中華の文には定不散亂念の語あり。禪定所現の佛に就きては詳細の記事なきも、此經典の同類たる『觀無量壽經』には此經所說の佛身を直ちに禪定所現の佛となせり。更らに廣く諸經を見るに阿彌陀佛は禪定佛たること多し。阿彌陀佛傍明經典最初の譯者たる、支婁迦讖の『般若三昧經』、是と同經なる後漢失譯の『拔陂菩薩經』には觀佛往生の旨を記し、(玄九 83, 84) 馬鳴龍樹共に念佛は觀佛の趣味を脫せず。乃至支那日本に於いても後代に至るまで含て此方面を失はざりき。蓋し阿彌陀佛の信仰に著しきは念佛にして、念佛は觀佛と離るゝものにあらず。詳細は下「信行論」に讓る。又尼波羅西藏に於ける禪定五佛の配合に就きては附錄「阿彌陀佛と一類とせらる諸佛」の項下を參照すべし。

(六) 阿彌陀佛は現世利益の佛陀にあらず。

過去佛は歸托の標的とならず。未來佛彌勒は印度にありて暫時信仰を博し、支那に來り日本に入りて法相宗と其盛衰を俱にしたれども、其信仰が現在釋迦佛より獨立するをえず。遂に一菩薩としての信仰以上に出づるをえず。現在佛は是に反して、所在に其靈感を顯ずるをえ、且つ其佛が終極の目的たり。而して現在佛中多佛あり。其中阿閦(不動)、藥師、觀音、文殊、虛空藏等は今も尙信仰盛んなれども、其多くは現世利益と關聯せざるもの稀なり。然るに阿彌陀佛に至りては現世利益の意味殆んどなしといふも可なり。(加藤氏『日本宗教風俗史』中現世祈願の阿彌陀佛の信仰殆んどなし) 固より西藏の無量壽佛(西藏にては無量光を別體とせり)は現世に於て長壽を祈る佛陀とせられ、(ワッデル 448) 密敎中にも往々此意味を有するものあれども、經文中殆んど現世利益の臭味あるものなし。『說林』所引の文中僅かに四五を搜索し得たるのみ。即ち『陀羅尼集經』(四四 410) 『一切如來烏瑟膩沙最勝總持經』(成六) 『請觀世音消伏毒害陀羅尼經』(成十 45) 等なり。而して是等多くは密敎經典なり。蓋し密敎經典は多く曼拏羅の効力を現益に認め、或は除賊治病に(480, 481, 482, 483, 491, 括弧內の番號は南條目錄に據る以下皆然り)。惡靈の退散に、(486, 487) 中天を除かんがために(802) 其の他(490, 492, 983, 809) 等、外護摩の儀式を迎りて、現世利益を說くもの頗る多し。阿彌陀佛亦其感染を受けたるに過ぎず。其他『龍舒淨土文』(二、八、二以下 24, 10) に所々現益を述ぶるあるも、淨土の經論中かゝる類少なく、後世の淨土敎に於いて現益を以て不求自得の利益と稱するもの、寧ろ阿彌陀佛本來の信仰に近し、從つて現世的迷信少なし。但し往々虔信惑溺の風を存するものあり。要するに彌陀は本來現世祈願に關係薄く、其偶々現益に關係せるは主として密敎經典の阿彌陀佛なりとす。

(七) 阿彌陀佛は本願の救主なり。

廣く諸經を按ずるに本願獨り阿彌陀佛に限らず。『阿閦佛國經』には阿閦が大日如來の所にて六度無極の說を聞き、斷瞋欲の本願を起せるあり。『勝鬘師子吼一乘大方便經』には得正法智、說正法智、護持正法の三願あり(地十二 51)。『藥師如來本願經』(隋達摩笈多譯) には無量光(一)琉璃光(二)無量智(三)趣向大乘(四)修梵行(五)諸根具足(六)衆病悉除(七)轉女成男(八)引正道(九)得解脫(十)妙味飽滿(十一)衣服隨念(十二)の十二願(貳四 86)。更に之を布演したる『藥師琉璃光七佛本願功德經』(義淨譯) の吉祥王佛及び光音自在の各々八願。妙行成就、最勝吉祥、海雷音及び遊戲神通の各四願。其他藥師の十二願(餘五 55) あり。『地藏菩薩本願經』(唐實叉難陀譯) には六道衆生能引道の願(四十)

あり。又『菩薩本業瓔珞經』には一切願を二十四願とせるあり（列一三—一五）。此他諸佛本願經少からず。若しそれ上の「本願」の項下に列擧せしものを併考するに、稱名念佛も慈悲攝護も轉女成男も國土嚴淨も皆既に餘佛の本願中にあり。但た『無量壽經』の本願は所有本願を悉く合糅せるを異とせるのみ。

阿彌陀佛の特色は種々ありと雖も、就中本願と慈悲とは其の信仰中に重要の位置を占む。彼の『稱揚諸佛功德經』（黃四三）には阿彌陀佛を以て「興立大悲誓者」となし、『大法鼓陀羅尼經』には「成就本願者」となせるが如き見るべし。抑も佛陀論に三方面あり。情的と意的と智的と是なり。彼の『華嚴』、『法華』、『涅槃』等の佛陀は主として佛陀の自覺を宣揚し、常に法身理佛に迫るは智的佛陀と稱するをうべく、之に對して本願佛は意的佛陀にして、慈悲佛は情的佛陀と名くるを得べし。而して阿彌陀佛は特に後の二者に屬す。前きに佛陀論を一貫せる兩個の眼睛に比すべきは自覺覺他の二方面にあるを述べしが、阿彌陀佛は其正しく覺他を代表するものと謂ふべし。彌陀の本願は諸本其數量に於いて、將た又內容に於いて多少の相違あるも、攝法身、攝淨土、攝衆生の三類を出でず。而して此等諸種本願思想の根底に入らむか、全く化他主義ならざるなし。念佛修善の易行、淨土莊嚴の說意、一に佛陀無限の慈悲に基かざる無きは言ふを待たず。獨り攝衆生、攝淨土の諸願のみならず。攝法身の願亦成就衆生の外に出でず。『論註』は此意をえて阿彌陀佛を爲物身となせり。果して然らば本願全體は衆生のためにして、全く化他救濟を出でず。一々願文に佛位を賭して其の成就を誓ひ、其の發願の牢固なるを示しては、「假令身止、諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」といひ、（「魏經」「其本」第四章第十願其の他諸譯同意なり）「我は無間に行きて常に住すとも復た願力を轉ずることなし」といふ。其修行段も亦雜多の行法ありといへども特に化他の行法多し。是によりて之を觀れば法藏比丘の發心出家、五劫思惟、選擇本願、莊嚴淨土、抑も彌陀の佛身も亦吾人人類の救濟に外ならずと謂ふべし。廣くは『無量壽經』『悲華經』（仙三）等見るべし。

由來觀念は冷却に過ぎ、空理は救靈に適せず。佛の法は一たびは法の佛とせしが、轉じて又佛の佛を生ぜり。青は藍より出て、愈々青きが如く佛の佛は又佛の慈悲に非ずして慈悲の佛となり。佛の力にあらずして力の佛となれり。眞善の人格にして、眞善其者にあらず。之を要するに現實佛陀の慈悲覺他の餘薰は發して終に他力救濟の阿彌陀佛を生ずるに至りしなり。

篇外　佛と梵。佛教と印度諸教學

以上は主として佛教內部に於ける思想開發を略叙せり。同一海水も東に黑潮となり、西に紅海黑海となる。印度に發生したる佛教は又印度教學の着色を免れざりき。前きに阿彌陀佛の起原を追蹤して優婆尼沙土に於ける類似思想の一端を叙せしが。今梵の思想を中心となし廣く印度諸教學と佛教思想との關係を畧述すべし。（但し本書には「優婆尼沙土と阿彌陀佛」の一項を省けり）

抑もアリアン宗教は神人同格（セミチック）にして神人懸隔（セミチック）のセミチック宗教とは明かに區別あり。蓋し印度に於ける汎

神の思想や古く、梨俱吠陀十卷毘首羯磨(ヴィシュヴァカルマン)の歌の如きは既に其の萌芽を示し。加ふるに更に其の統一神を求むるあり。優婆尼沙土梵我の教義の如きは其の最も幽大なるものとす。蓋し主客合一理智冥合の觀念論哲學は特に印度教學の特色なり。ブリハダーラニヤカ、ウパニシャッドには梵我不二の高調を示して、眞理なる法 Dharma は諸神以上の力 Kṣatra の力なりとゝひ(Bṛh., I. 4; Chand., I. 9.[1-2])チャンドーグヤ、ウパニシャッドには無始無終、大の大なる最高我を知るものは又偉大なる世界を征服すとゝひ(Chand., I. 9.[1-17])此他法の哲學的說明少からず。從つて法身佛の理論的根據等諸餘の優婆尼沙土に追蹤しうるもの枚擧に遑あらず。(「現法」249-254 參照) 數論の三德は三毒に類し、其の反對なる佛陀の三德と無關係にあらず。ブリハダーラニヤカ、ウパニシャッド(II. 1-4.)中の阿闍世と Balaki 並に Yajñavalkya の教義には最高梵 Param Brahma と現象梵(即ち後の吠檀多に第二梵 Amūrtam Brahma) とを說き、其體 Mūrtam 絕待 Amūrtam 應化 Martyam 不死 Amṛtam 此有 Sat 彼有 Tyam の兩面を說きて、非々 neti neti を以て最後の歸結となし。其の現象梵は名色業を具有すとゝひ、加之、唯心論的見地に立ちて我を認識の主となし、我あれば一切有なりとゝへり。此等其儘には佛教教義に非るも、法報二身の關係、空觀の佛陀、唯識哲學の先驅として全く絕緣にはあらず。此の如き類似は啻に一二に止まらず。今は唯た古ウパニシャッド中に其平行思想の一分を擧ぐるのみ。チハンドーグヤ、ウパニシャッド(III. 14.)の世界を梵とし、其の實在、生滅、還滅、呼吸 Tajjalam(Tat-jū-la-am)に於ゝて之を觀すべしとゝへるが如き(吠檀多の Śāndilya Vidya)六大周遍毗盧舍那の當體に類せずや。婀烏莽 Aum 三字和合の唵(オーム)は(「守護國界陀羅尼」 同七 59.b) 佛教經典中にも同樣の說あり。中には唵字即是れ盧舍那の眞身となせるあり。此他下「信行論」見るべし。ヤヂュニャヴルクヤは知識 Prajñā 實有 Satya 無終 Ananta 歡喜 Ānanda 安固 Sthiti の六相を以て梵を見たり。(Bṛh., IV, 1. 吠檀多の cit ananda 是より出づ。) 是等法身若くは報身の形容語として悉く適當の好文字なり。(起信論(義記)下 32 眞如自體用の文と併せ見るべし。) 抑も優婆尼沙土の根本義たる「我は梵なり」 Ahambrahmāsmi「彼は汝なり」 Tattvamasi の語中には觀念論も汎神說も悉く此中に包含せられ、唯心觀佛も法界藏身も亦甚だ新說とはなし難し。其他梵我の眞相、現相、其認識の方法を示すや、頗る大乘佛教の性相、所謂本體現象の說に類するあり。平等即差別論化身說觀神法の如き亦多少の緣あり。佛教法身の思想が優婆尼沙土に於ける久遠の眞理なる法(達磨)不滅初生の梵の思想に負ふ所あるは蓋し掩ふべからず。(現法 254-6 參照) 優婆尼沙土は吠陀の新約聖書にして(ドイッセン氏) 優婆尼沙土中に萌芽するも(伊溫伐羅の人格神崇拜は Iśa.; Bṛh., IV, 4.2; Kaus., III. 8; Kith., IV 12 參照) 薄伽梵歌にありては梵天或は毘瑟紐は宇宙最高の實在たるの外、人格的最上神となし、(伊溫伐羅) 其の化現の信仰は廣く人心を支配せり。信仰歸命の念神と恩寵攝護の救濟とは佛陀の二身、三身、願力攝取、念佛往生の思想と相呼應し。起信論の如來有攝方便の文と薄伽梵歌第八章との如きは頗る類似せるものあり。今一々枚擧に遑あらず。(テラング氏「英譯」の序 24-35、常盤博士「馬鳴菩薩論」[96 補註] 遠氏「梵歌の他力宗教」「求道」巻の一、「上印」245 等參照)

抑も三位一體の思想は其由來極めて古く、吠陀に既に存せり。但し其整形は三種現體說 Trimūrti 即ち是れなり。梵と毘瑟紐と濕婆との三人格神を假り、或は特に後の二神を重んじ。或は更にキリシナを中心とし、現體化現 Avatāra を說明し、斯くして人格神崇拜と萬有神敎との調和を計りしは、恰かも佛陀の人格崇拜と法身の理想的說明との融合の爲めに、佛身應現の觀念を作り出せるに類し、毘瑟紐の化現と佛陀本生の受身とには共通の思想あり。縱令其運路に多少の相違あるも、少くとも何れか其の兄弟ならざるべからず。果して後には佛陀をも毘瑟紐の第九化現となし、印度敎の諸神は亦佛陀應現の一部とせらるゝに至れり。彼の富羅那文學は常に佛敎文學と彼此材料の交換をなせり。波羅門敎の神像崇拜、富羅那の三種現體說（梵、毗瑟奴、濕婆）の如きは明かに佛敎の影響ならんとはダット氏（II.198-9,194）の考定なるも、彼此摸倣の痕迹は單に此に過ぎず。尙下「淨土論」見るべし。之を印度敎學の正統派たる吠檀多に見るも商羯羅に大成せらるゝに至りては、內秘公開の二敎を說き、認識の上下高劣に應ずべき梵の二面を布衍し、無屬性の最高梵に淸淨圓滿の屬性を附すれば劣等梵 Apparam Brahma なりとし、汎神論も唯心觀も有神敎も悉く此の中に合糅せり。又彼の祭祀により て神力を左右すとは、咒法作業の根本にして密敎事相の思想を包含せり。果して後期のウパニシャッドには密敎經典と頗る相類せるものあり。佛敎顯密兩敎は決して印度敎學中の單獨戶主にはあらざりき。

抑も優婆尼沙土は印度思想の源泉なり。其敎義は佛敎經論と共通のもの少からず。然るに直接其の交涉の痕迹を傳へず。其名稱すらも表はれずといふ。是れ抑も一大疑問なり。或は彼の梵我は佛敎無我の敎理に合はざるに由りしか。或は認識思辯は佛敎の實行本位に適せざりしによるか。蓋し有我主義は憍慢を生し、行實に迂なりとは『增阿』安般品（及一32）火滅品（及一32）等に詳述する所なればなり。或は又數論尼乾子等の直下の異端を破するに急にして遠く彼の哲學に及ばざりしか。或は當代一般が富羅那文學の風に流れて純智主義を顧みざるに出てしか。或は佛敎僧侶が異時異處に於ける著作は傳說を便りとして其の本典を見ざるに出てしか。蓋し聖典を秘するは印度一般の風なればなり。抑も亦佛敎經論中に果して之に資すべき材料の未發見に歸すべきか。尙幾多の研究に待たざるべからず。但し開發論の數論と解脫論の吠檀多と思惟觀察實行主義の瑜伽とは優婆尼沙土の思想を受け、佛敎思想の先驅をなせるは秋毫疑を容れず。

印度に在りて今古を通じて重要なる神格は梵或は梵天なり。梵の思想の佛敎中に入れるもの少からず。先づ勸請（五分律、眼一98 佛傳の轉法輪品）と尊法（雜阿四四 辰四55）とを以て佛敎中に重要なる神格たり。『中阿』等心經には陀然、梵天尊崇、舍利弗之に對して、如來の四梵室を說けるあり。（及五34）三明經の沸伽羅も亦梵天を執せり、經旨上に同じ。（及九83）『長阿』典尊經には大梵天一童子に化して大典尊（佛の前生）に我人の想を捨つべきを敎へ、佛道は梵道以上なるを示し（及九83-6）同闍尼沙經亦同樣の趣向に成り、三十三身示現の梵天を說けり。（及九83-8）又佛は我は波羅門にして汝等は我が口より出てたる法王子なりといひ、（雜阿十二 辰五30）同四姓經には「大梵名者即如來號」といひ其他佛と梵、佛と法との關係を示せるあり。（及九31）巴梨『中阿』には佛を梵を得たる敎示者と云へり。（現法83）衆集經には遍淨天の止息樂を梵堂となし、（及九43）『增阿』、苦樂品には前きの中阿等心

品に同じく如來の四無畏を四梵室となし（及二）『長阿』梵動經には能造獨存、常住不變、世界最尊の梵天を斥破し、（及九 72上）同堅固經亦之に同じ。同種姓經には外道の語として「沙門瞿曇、明解梵法、能爲人法、亦與梵天、往返言語」といひ（及九 72b）。又當代諸種の異見は四、十六、十八、四十四、六十二等の分類の名數を擧くるあり。（『增阿』及三 64a）、特に法輪を梵輪と名け（『增阿』81a）（『瑜伽四諦品』及一 順正理論』冬六 27b）清淨行を梵行と名くるは通例にして又彼の波羅門梵志の語は必しも異端とせず。（『菩薩』參照）其他如來の語聲を梵音とするが如く梵の思想の佛教中に入れるもの少からず。就中梵天勸請の說話は佛陀內證の自信を確めたるものなれば是れ蓋て諸法一如の基礎をなし、形而上的思索の端緒を開けるものにして頗る重要の意義を含めり。固より佛教と波羅門諸教とは同一にあらず。根底に於いて相違する所多しと雖も是によりて略々梵と佛との相關を知るをうべし。惟ふに阿含經中に三典或は四典として所々に古書の趣きを傳ふるは吠陀なりしが如し。（中阿及五 67, 71. 長阿及九 67, 78, 81, 85, 91.）此他諸種の三種現證說は諸經論に引用せらるゝあり。現に摩醯首羅の汎神論は佛教經論の所々に傳へらるゝあり。（『外道哲學』天論一因論の項下 『佛陀論』72巳下 『大史』132巳下）又造世間者として之を破せるあり。（文殊問經 列一 8）若し夫れ阿含經以外の諸經論と梵天以外の諸神とを取りて諸見執計を案ずるに略々印度教學の一班を窺ふをうべし。尙第三篇「佛教の天部」と同篇外「佛教の俗化」の章下を參照すべし。是によりて之を觀れば佛教教義が諸異道に異るものあるは勿論なりと雖も同時に彼此の交渉あるべきは推知に難しとせず。唯だそれ佛徒の外道說を攝取するや、往々名によりて之を捨て。實に於いて之を取れるもの鮮しとせず。

彼の馬鳴『大莊嚴論』開卷第一に乾陀羅の一商賈を假りて、摩醯首羅毗瑟拏の信徒に對し佛の最勝最大を說くに、呪術を假らず、大悲衆生を愍れみ、能く解脫の道に進ましむるといへるもの、案ずるに當代の印度教徒に對する佛徒の主張と見るをうべく、異道の諸神を假りて佛陀を更に其以上となせしは秋毫疑を容れず。

第二篇　信行

第一章　自力念佛

(壹)　信佛歸佛

釋尊は教權主義を排し、數論と同じく波羅門の有神教を棄て、自ら正法に由りて證見をうるを以て教徒の信行となせり。所謂法歸依、自歸依是れなり。換言すれば自律的行法なり。此故に涅槃鶴林の夕にも、他に依ることなく、自ら法によりて自の燦然を勵ませり。凡そ自歸依法歸依の文の如きは、殆んど常套語として『阿含經』中到る所に存せり。然るに阿彌陀佛にありては、信心攝護他力念佛の信行にして、明かに依法不依人の教義に違す。蓋し佛陀論の發達と教理論の開展とは、既に上に述べしが如く變遷せり。信行豈獨り依然として自歸依法歸依の舊株を墨守するをえんや。此篇論ぜんと欲する所は、佛陀論並に教理論の變遷と共に、信行亦自ら差違を生じ、漫然として之を觀れば其間實に霄壤の差のみにあらずと雖も、其形式其内容中には幾多の共通點あり、異中の同、同中の異、變化の多樣中、自ら脈絡の一貫せるものあるを見んと欲するにあり。

佛陀の直說と見らるべき教義も、必ずしも一樣ならざる如く、其修行の方法につきても、或は婆羅門教の行法を佛教化し、或は其人の常習に從つて之に佛教的意義を附したるものあり。(上「教化特色」參照) 所說必しも一樣ならずと雖も、自燈 (Atta dīpa) 自洲 (現法173, 135參照) といひ、自知自覺自作證成就遊といひ、自歸依といふ語が特に多きに見て克己努力が主たりしことを知るべし。

自律的修道錬行にありては、固より自己によりて道行を修するにありと雖も、内に正智をえ、外に正行をなすは、實に師主の教化による。彼等が歸佛の始めは實に佛陀の人格に歸服せるなり。故に先づ歸佛によりて佛教中に入るも、少くとも後世の如く崇拜の意義にあらず。佛の力によりて解脫を求むるにあらず。五分法成就を思惟し、之によりて度脫をうるは信佛なりと雖も、是れ元と自歸依を離るるものにあらず。解脫を求むる努力は全く自己にありて、信行は佛に信順すると共に自己に信托せるなり。此故に周那(チュンダ)は佛は不滅安穩の道に入りし人と信じ、佛の如く其道を歩まんとせり。(長老偈) 佛在世既に追慕の切情を表はし、尊崇營ならざるものありしと雖も、(長三79 長四124參照) 未だ他力の信賴にはあらず。要するに原始佛教にての法と佛との關係は佛の法なるが故に (上「法身佛」の項下參照) 歸依佛によりて歸依法となり、しかも歸依法を重んず。固より歸依佛によりて歸依法となるが故に歸佛の德を記せるもの少からず。然れども單に歸依佛のみにて得道をえず。少くとも傍が自知自證を辿りし徑路を踏まざるべからず。彼の八聖道は勿論、戒、聞、定、惠、解脫 (長三33,50) 若しくは信、戒、淨、知、の如き悉く自律的行法にして、原始佛教は徹頭徹尾自力的己人主義なり。

自燈の光明に辿るは佛陀在世時にありては親しく佛の人格及び其道行によりて目擊したりしと雖も、滅後にありては教法を以て佛陀の遺身として之に聞き、之に賴らざるべからず。然るに佛陀の教訓は戒定惠を主とす、戒は不放逸の方便。定惠は内觀思惟にして、自燈法燈は直に内觀の靈光を辿るに至るべし。恒河は北

流すとも佛敎に誤りなしと信じ、加之佛は神通を有すとは現身佛陀に對して既に有せし信仰なりしが如く、師主の言敎に信順するの思想と共に自燈のみにては不足を感じ、善知識を以て外の强緣となし、是によりて解脫の目的を達せんとするものあり。（『增阿』『普知識品』、及一49b、『本事經』『辰六28b』）抑も佛は佛徒理想の體現者たり。婆羅門敎にありては曾て梵となりしものなきに佛は自ら梵と稱し、佛徒亦佛を以て梵に擬し、（上「法身佛」項下參照）諸天以上となせり。（下「涅槃と天」項下參照）佛敎に尊ぶ所のものは三寶にして就中其重點は佛陀にあり。此故に『增阿』三寶品には佛を最尊最上となし、五眛中の醍醐に比せり。（及一 b）其他歸佛を不墮惡道の因となし、（及三 33a、及二 30a）祀祠中の火、諸論の頌、人中の王、衆流の海、明中の日月に比して佛陀の最尊を稱せるの頌は諸處に見る所なり。（及二 25、等）縱令千章萬句を誦すと雖も、不義何の益ぞ、一句に如かず。（『增阿』『增上品』、及一16a）佛陀は實に最尊最上なりとすれば、そを稱念するの功德亦尋常なるべからず。此の如くして遂に念佛とならざるべからず。況んや六念或は五念十念中に念佛あり。五停心觀（數息觀、別相念、總相念、因緣、念佛。天台にては不淨、慈悲、數息、因緣、念佛とす）に念佛觀あり。六念中施戒天を以て生天の因とせるは佛敎外にも此說あり。轉じて念佛生天となるべき順序なり。（下「念佛生天」項下參照）加之『中阿』『哺利多品』には如來を憶念するは心靖く喜をえて、惡伺と不善とを除くといひ、（及七 70a）『增阿』『廣演品』には「正身正意、無有他想、專精念佛、未曾離目、念如來功德」といひ、（及一 b）『增阿』『邪聚品』（及二 30a）には念佛無貪欲の文あり、又『增阿』『禮三寶品』には禪定、觀念、信念、稱名、恭敬の諸念佛の義あるが如し。（『觀如來神等十一法』）此他『增阿』『善聚品』（及二 17）禮佛五功德見るべし。信佛歸佛は遂に念佛とならざるべからず。念佛は六念五停心中の一隅たるべきものにあらずして、佛陀の自覺、說法、化用、神足、皆是れ佛ありて初めて能くせるものなれば、若し廣義に之を解すれば、其三學修行は皆悉く一種の念佛なり。（『辨阿』『欲捉拯』20念佛に總別あり、萬行悉く念佛なり。）

前篇以來屢々論じたるが如く、佛と法とは佛陀論にありて曾て離すべからざる二要目たるが如く、佛徒の信行も亦此二に對應せるものあり。法を觀るものは我（佛）を觀るものなるが故に、（及一 a）佛に對する信仰 Buddha-dhū と其所說に對する知見 Ñāṇa, paññā とは亦暫くも離すべからず。此の故に智見に佛を見るものは持經者となり、行中に佛を見るものは持戒者となり、定中に佛を見るものは習禪者となり。敎法念佛、持戒念佛、禪定念佛是によりて生ずべく、此他遺物遺跡の崇拜亦一種の念佛なり。第一會誦の經戒は聽て經律論三藏となり。上座部末派の法藏部は三藏以外に呪藏菩薩藏の二を加へて五藏となせば念佛は又從つて其範圍を擴むるに至らざるべからず。此の故にタントラ佛經の如きは菩薩の念佛は陀羅尼を誦するにありといへり。（『無量門破魔陀羅尼經』『成九14』）後代の思想は暫く措き『增阿』『弟子品』（及一 b）には諸弟子各勝る所あり、江迦葉は斷結。優留毗迦葉は供養。阿若拘隣は勸化。馬師は威容。舍利弗は智慧。目連は神通。二十億耳は精進を以て衆に秀づといへり。（其他及二 b、a參照）優婆離をして言はしむれば佛自制は戒律のみならん。（『疏』『淨名』）かくの如くにして信行各異るものは佛を見るも亦自ら相違なかるべからず。『有部毘那耶』には經師、律師、論師、法師、禪師の五師を列ね（亞八 b）『四分律』には「阿闍若々々々共同、乞食々々々共同、納衣々々々共同、不作餘食法々々々々共同、一坐食々々々共同、一搏食々々々共同、塚間坐々々々共同、露坐々々々共同、樹下坐々々々共同、常坐々々共

同、隨坐々々共同、三衣々々共同」といひ、（列三 102）『無量壽經』三毒段『觀經』九品の行目等諸餘の經典に同じく髣髴として滅後種々の行法を生ぜしを見るべし。更に支那高僧傳の諸師の言行を見るに譯經、義解、神異、明律、亡身、誦經、興福（造塔作寺）、經師、唱導、（特に聲音勝れ經經梵唄に巧なるもの）の目を立て。法顯傳（攷六 [illegible]）には誦經、座禪、造塔、說法等の行別を擧げ、又比丘尼は阿難塔。諸沙彌は羅云塔。阿毘曇師は論部。律師は律。摩訶衍師は般若經幷に文殊觀音を供養すといへるが如き、當時に於ける人々行々相異の跡を傳ふるものたり。一言にして盡さば念佛は念法念僧中に含まれたりと謂ふべし。而して佛の敎法は佛陀にありては自證の法なれども遺弟にありては他燈他證にして、念法は一轉して他燈を信賴するに至るべき機を示せり。

一就中遺物遺跡の崇拜と禪定觀念の修行とは大に注意すべきものあり。遺物遺跡の崇拜は一般民衆特に無智の輩に適切なり。殆んと大小一切の經典に起立塔像、懸繒燃燈、散華燒香等の文あるに見、法藏部（佛滅後三百年分出 藏四、[illegible]）は窣堵婆供養を奬勵し、殆んと同代の阿育王が起塔の事蹟、其他僧伽密多、摩晒陀の菩提樹佛塔に關せる事蹟を見、『大般涅槃經後分』遺敎品には舍利供養は現在佛に供養するに異ならずといひ、其他諸種の事情より見るに阿育王代を中心として前後蕩々として此の如き風潮の盛んなりしを察しうべし。（上「滅後の佛陀」參照）彼のリリー佛傳（165）には本史を引きて迦葉が遺物崇拜の妄を認め、一旦舍利を集めて一所に置くといひ、『增阿』廿八（及二 41）『金剛般若經』（月九 25）『海龍王經』舍利品には須菩提を假りて形像尊崇の無要を見たる、又彼の『異部宗輪論』（藏四 [illegible]）には窣堵婆供養に就き有部末流が法藏部に反對して其の少福を主張せるが如き、偶々以て其反動と見るをうべし。此の如くにして靈跡の四所を禮拜し、四所には各之を代表すべき聖樹を定め、（『遊行經』『涅槃經』）其他遺身の舍利佛牙に供養し、佛鉢三衣の遺物を恭敬し、菩提樹を拜し、法輪を崇め、塔を起し、寺を造るは元と佛陀崇拜の情に出て、之を以て佛陀の人格的代償としたるは明かにして、又同時に修福生天の因と見たり、（『增阿』及二 [illegible]）生天の因行中に此種の行目多きは下「往生論」に至りて述べん。是れ念佛の有形的發表、若くは原始的なるものにして、巴梨『涅槃經』の傳ふる如んば（『譯本』97-9、英譯 130-135）闍維送終、舍利八分、造塔供養の記事中已に崇拜の意味あり。漢譯は更に之を布演せり。又滅後曼陀羅華を供養せしは Cullavagga（XI）（『譯本』103）見るべし。此等の崇拜は滅後久しからずして起りしものゝ如く、從つて禮拜讚嘆は遺物崇拜の中に含まれ、後に他力信行の中に五念門（世親『往生論』）五種正行（禮拜以下稱土門の要行）の行目あるも、蓋し其の因由する所を察するをうべし。

遺跡崇拜は久しからずして又佛像の崇拜を生ず、殘存せる古代彫刻其の他より察するに、後代の作製にかゝるものなることは美術工藝家の等しく認むる所なるも、已に遺物遺跡の崇拜と共に、觀念に於いて佛を見るものは、佛身の無礙を認めて分身化身神通の信仰を生じ、現在遺跡なき所にも禪定感見によりて、佛足石を生ずるに至る。特に內心に現れ來る佛陀は容易に之を想化しうべく、又外面的なる佛像遺跡崇拜に比すれば直接なるものあり。且つ又、止觀は專念專信の風を生ず。觀心專住は由來信仰の熱烈なるものあるによる。元來信佛は歸佛と一致し、佛を親

愛し喜悅を生ずるにあり。（『現法』117卑婆婆羅門の語を見るべし）七解脫中の隨信行、（色無色滅盡を經驗せざるも如來を信し敬愛Pema するをいふ）信解脫、（滅盡を盡し如來に對する信根を固むるをいふ）は即ち其一なり。（及七 57.等參照、『倶舍』にては七加行位（五停心、別總相、煖、頂、忍、世第一法）の後ち見道以上の行となし隨信行は見至と稱せり（賢聖品牧十79））而して又其信行は信根信力として、幾分か之を具象的に見たり。（倶舍牧九、105.契經に基き信等五根增上用ある所以を述べたり）彼の『增阿』利養品（及一22.b）に如來に於いて信根成ずるものは根本移動せずといひ、『長阿』自歡喜經（及九69.a）に如來に深著して信根既に立つものは力と智とを獲得すといへるもの是れなり。

念佛觀の基因は六念或は五停心觀中の念佛に求むべきは前既に云へり。然れども五停心觀或は六念は元と自歸依の佛敎と離れざるものにして、從つて其念佛も未た他力念佛の義にあらず。畢竟自智自覺自作證にあり。（及七 57.b）此觀行が如何にして他力念佛の起因たりしか。抑も優婆沙土にありては沈思瞑想の結果は萬物を左右しうべしと信ぜり。既に祈禱を以て神を動かすもの、從て祈禱は神以上の力あるものとせられ、ブリハスパチ、ブラーマナスパチは全く祈念の神格化なり。從つて優婆尼沙土は形式的祭祠Yajña よりも精神的觀念Upasāna を主とせり。而して禪 Dhyāna (jhāna) は實に神通 Rdhi,iddhi をうる必須の道にして印度一般の信仰に基き、況んや瑜伽 Yoga の觀行は佛以前にあり。知るべし禪定は佛の取りて以て修行の中に加へられしのみならず。其以前に已に其方法と組織との整頓せるものありしことを。彼の四向四果といひ、四禪といひ、四無量といひ、十念三三昧といひ多く禪に關し、五根七覺支八聖道中曾つて念若くは定を缺かず。加之七加行位の如きは皆禪觀に關せざるものなし。禪定は五根を攝し、心意を正しくする要道にして自歸依法歸依の佛敎には必須なるものなりき。特に後期に至るや、禪、三昧、瑜伽、神通は全く結合し、原始佛敎の單なる正定靜慮は甚しく觀念化せられ、次いて神秘を交ふるに至れり。凡そ佛敎は經律論の三宗若くは敎禪律の三家を出てず。而して禪は諸宗に通ず。彼の所謂禪家の如きは特に其の方面に力を致したるに過きず。彼の羅什が菩薩禪たる『禪法要』三卷を出たし、（致二31.）達磨が二入四行の說を傳へし以來、小大を分ち、祖師如來の諸禪を簡ぶに至りしも、唯た大乘の禪觀は小乘の禪觀に內容を附し外形を增し、大乘敎理に潤色せられたるを異とするのみ。禪は古來佛敎に通じて一貫せるものあり。禪家に所謂、見性は佛性を見るにあり、佛性は即ち法性なり。唯た有情非情により主觀客觀其名を分てるに過ぎず。（『智論』三十二、9）佛に本覺といひ、法に眞如といふ。佛と法とは一なるが故に觀法は觀佛たらざるべからず。特に法身佛の思想に於いて然り。然るに佛の所說中、慈悲度生の說法頗る多く、阿育王の碑文は盛んに慈悲を鼓吹し、又從つて其敎法の根本たる佛陀を慈悲の權化と見るに至るべき楔機を示せり。此頃より其萌芽を發したりと推せらるる大乘佛敎が又如何に自覺佛よりも覺他佛の原意を廣衍せるかに見て、兩々相對して念佛に他力を混じうべき經過を暗示するものあり。而して佛身論に一轉機を與へ、念佛行に一新機軸を出だせるもの、固より敎理論の發達に負ふ所多大なるは辨を待たざるべきも、特に禪定に關係する鮮少ならざりしなり。而して六念或は五停心觀の念佛は直ちに禪定念佛となる。彼の五禪定佛の如きは全く禪定感見の佛陀たり、リス、デビッヅ氏等は五禪定佛を以て七世紀後の成立となす。然れども彼の三位の五佛を組織し構成するに至りし年代は暫く措き、禪定佛

の信仰は頗る盛代に屬せり。こは後に至りて辨ずべし。

(貳) 禪觀念佛

支那初代の佛教史を見るに梁僧傳以下習禪篇中の高僧の多き、明律誦經等の高僧も亦禪に關せざるものなく、又當時禪數之學と稱して頗る盛大を極め、安世高に『安般守意經』を始め、十部の禪經あり。支婁迦讖以下、曇賢羅什を經て、陳眞諦に至る迄に總じて四十部に近き飜譯あり。如何に當時禪學の盛んなりしかを知るをうべし。此等は廣く佛教の觀法を記せしものにして、因緣觀あり、慈悲觀あり、不淨觀あり、數息觀あり白骨觀あり、五停心あり四念所あり。就中觀佛念佛は其主要なるものなりき。但し彼の大乘禪として有名なる覺賢譯の『達摩多羅禪經』の如きは法を觀ずるを主とせり。『思惟要畧法』『座禪三昧經』は觀法と觀佛とを混ぜり。其觀佛を主とせるものは『般舟三昧經』『觀佛三昧經』等にて『般舟三昧經』には問事品、行品、四事品、譬喩品、四諦品、擁護品、勸助品、至誠品の八章に分れ。彌佛一心なれば目前に彌陀並に諸佛或見の旨を記せり。而して其の念佛觀は同時に觀法を離れず。又從つて知者は成就者なりとの觀念論に普通なる定格に漏れず。「是心是佛是心作佛」は『般舟三昧經』(玄九 30)『觀經』等皆然り。而して又觀佛は佛の威力に待つものとせり。(玄九、30b 其他攝聽品并に『觀佛三昧經』等に加被滅罪生淨を明かさざるなし)

抑も觀佛の原形は佛教以前に基因せるが如く、又觀法の變轉とも見られ、又佛陀追慕の情より發せしものもあるべく。又更らに小乘經中にある吾人身心を觀ずる觀法より起り、佛陀論の變化と共に其佛身を觀ずるに至りしものなるやも計り難し。蓋し『中阿』『因品念處經』(大六 19-3c) 同しく自觀心經(大六 31-b) 等を以て『觀佛三昧經』『觀相品』『觀無量壽經』佛身觀等と比するに前者は此身の不淨等を觀ずるにありて、後者は佛の好相を觀ずるものなるが故に目的異なるも、形式內容共に對稱の關係にあり。而して又觀佛には佛身は多くは莊嚴身を以つて表はれ、其佛心は慈悲となせり。

以上は敢て一佛を中心とせず、廣く觀佛を說きたるものにて、其一佛中心、殊に彌陀佛の觀法を明したるは『觀經』なり。今其內容を見るに日想觀に其心を西方に一定せしめ、次に水想觀にて水と氷とを觀じて、極樂の地面を觀ずる前方便となし、以上二觀によりて假觀を終へ、次に正しく極樂の依報を觀ずるに地觀、樹觀、池觀、高樓觀、華座觀(佛の座する蓮華)をなし、是れ即ち依報の眞觀にして、次に正報を觀ぜんとするに、先づ佛の像を觀じ、假觀終るや正しく彌陀の眞身を觀じ、更に附屬として觀音勢至の二菩薩を觀じ、普觀にて極樂の全體を觀じ、雜相觀にて佛菩薩を經めて觀じ、次に三類九品(次經によれば三觀)を觀ずべきを記せり。以上眞假正依を合して十六觀法あり。觀佛の功德と佛の威力能く衆生を救ふ事とは下三觀中に於て特に明かなり。

元來觀佛の目的は佛陀は世間の最勝者、功德の集合體なれば、斯かる佛陀と人格的交涉をなさんとの希望及び過去以來の罪業深く、愚痴暗昧心根怯弱にして、佛道の修行に堪へず。因て佛の身相を觀じ、佛の目前に現はるるを見、その愛慈攝護を受け、因りて以て其修道を成し遂げんとの希望に出づ。從つて此の罪惡苦惱の娑婆世界に在りては開悟便りなきを以て、未來佛國土に生れ、濁惡なき世界に至り、遂には成佛せんとの

希望となり。諸觀佛三昧は必ず往生を說くに至れり。特に阿彌陀佛は觀佛と最も密接なる關係を有せり。

第二章　他力念佛

(壹)　他力念佛

觀佛の方法は身に禮拜をなし、口に佛名を唱へ、而して心に佛を觀じ、所謂身口意三業密々佛と相應して始めて成就するものなるが故に（『觀佛三昧經』の終り參照）觀佛は同時に稱佛を離れざるものあり。念佛三昧 Buddhānusmṛtisamādhi の念 Smṛti は記念想念にして、同時に口稱の義に轉じうべし。（Macdonell 363-9參照）今日に於て念佛といへば殆んど稱名念佛を意味するが如きも、觀佛と念佛とは同義にして、念字は觀念の念より來れること明かなり。

印度撰述中明かに『無量壽經』に關する著述として今に存せるは、密經儀軌を除き恐らく世親の『往生論』のみならん。而して此論一部に記する所は淨土の依正二報（佛と衆生と國土）二十九種の莊嚴なり。就中觀察門は其主とする所なり。所謂禮拜は身業、讃嘆は口業、觀察は意業にして、就中意業主要なること勿論、觀察門の毗婆舍那、作願門の奢摩多は所謂止觀にして、其信行の重點はいふまでもなく意業觀念にあり。彼の優婆尼沙土に於ける唵 oṁ の敎義中にも供犧口誦の一部と其中に潛める眞義を念誦するとの兩面あり。勿論後者の功德を偉大なるものとせり。（Chand. I, 1, 1-10. S. B. E. I. 23本文及脚註）而して觀佛は念佛中至要の行法なり。稱名念佛と觀念念佛といつれが先きにして何れが後なるかは未定なるも、此の兩者は密接なる關係あり。稱南無佛の語は阿含經中にあり。（『增阿』放牛品及三17b 同『雜』品及二17）巴梨本生經序（ユダーナカター リスデビッヅ氏英譯1-3）にもスメーダか燃燈佛の名を聞くや、佛陀佛陀と連呼して轉た歡喜の情を生ずと云へり。若しそれ讃嘆稱佛の形式のみは或は三歸若しくは遺跡崇拜と前後して起り、觀佛に先立てるものならんも、『無量壽經』『觀經』等に說ける稱名往生の思想は觀佛思想より脫化したるものならん。或は稱佛の形式は多く後代の印度敎に類するものあり。是によりて傍系の混入とすべきものか。尙下に至りて辨ずべし。既に前に云へるが如く觀佛の意義に二あり。一は固より佛陀追慕の情に發し、他は法によりて佛を見んとするに在り。後者は自己中心自歸依と離るべからざるも（とは後に禪の系統をなし、自己の中に見性を力め、唯心中に佛見んとの傾向を生じぬ）前者は佛陀の人格に委托し歸依するものにして容易に他力思想を混じうべし。蓋し禪觀は主觀的なり、故に其觀念中に表はれ來る佛陀は自ら獨立性を有し、必しも釋迦佛と關係を結ぶの必要なく、又從つて觀念の佛陀は其機根の深淺によりて所見を異にす。（『起信論』義記下末29b）而して是れ佛が衆生に應じて其勝相を現前せしむるものなれば、自力觀行中自ら他力の意あり。先きに上げたる諸觀佛經が悉く佛の加被力を迎れり。特に佛陀論の發達は遂に形而上的原理に到達し、想化發達の結果は茲に小機小根のものが容易に觀見する能はざるに至れば、益々佛陀の加被力によらざるべからざるに至るは當然の徑路とす。又彼觀佛中には必ず懺悔滅罪の伴ふあり。懺悔は由來他律的道德に伴ふ。知るべし觀佛は他力念佛とならざるべからざるを。觀佛は已に滅罪生善の功德ありとすれば稱名も亦功德なかるべからず。依て定心を以て三業相應の觀佛

をなす能はざるものは、せめて一念、口に佛名を稱ふるも佛は大慈悲者大功德聚なり、豈に之れを忽諸に附する理あらんや、其攝護をうること必せり。此に至りて定心念佛は散心念佛となる。此間の思想を明了にせるは、實に『觀無量壽經』にして大部は定心の觀佛觀土を說きたりしが、下品に至り「死人苦逼遇善知識、稱南無阿彌陀佛、除八十億劫生死之罪乃至往生」といふ。後の淨土敎は此散心念佛を發達せしめしに出づ。」

以上は念佛中の觀念念佛より稱名念佛となりし徑路を略述せしが、顧みて其材料は多く後期の禪經なり。就中『觀經』の如きは明かに『無量壽經』以後の成立にして、其思想の由來を之に求むるは妥當を缺くの嫌なきにあらざるも、『阿含經』並に馬鳴龍樹等の著書に既に觀佛あり。暫く觀佛思想は此經典の以前にありしものと推定し稱名念佛との關係を見たり。抑も印度に於ける他力思想の由來や久し。ウエーバー氏は之を以て基督敎の感化に出でたりとなすも、其根據頗る薄弱なり。又バルト氏は婆羅多中の他力思想は佛敎に發したりとなすも、此等以前に既にウパニシャッド中に此思想を表せり。又更に觀念稱名思想の起源に就きては紀元前八世紀に吠陀の正統を主張し、其敎權を執りて立ちし Jaimini（ヤイミニ）は吠陀の聖敎量を尊ぶ結果、聲 Vāci の常住 Nityaṇ を唱へ、言語に哲學的の根據を與へ、聲論哲學の基を開けるあり。又彼のプリバッダーラニヤカ、ウパニシャッドには開卷第一 Ōmkara（オームカラ）の敎義に於いて唵を萬有の本質となし、之を以て吠陀を代表せしめ、且つ最上梵我の符號として其神靈を認め、又箇人我精氣の符號として觀念せるあり。又唵の觀念者は諸願の成就者諸慾の滿足者なりといひ（Chand., I, 10-2; I, 2(3); I, 3(3).）從つて三吠陀百千の言語も Ōm（オーム）の一音に及はずとなせり。タイチリーヤ、ウパニシャッドには文字の尊崇及音聲に神祕力を認め、連聲表聲（ナンセンブイヤウナ）によりて宇宙論の說明をなせるあり。大天五事妄言中、「道由聲起」といひ、『涅槃經』哀嘆品には伊字三點不竪不橫を以て如來祕密の藏に比せり。文字聲音に神祕の力を認むるは轉じて稱名の信行を生じうべく、紀後四五世紀の頃 Pāṇini（パーニニ）ありて、先きの聲論を大成し言語哲學より入りて觀念實在論を主張し、唵 Om に無限の妙用を附せり。後期の優婆尼沙土にありては陀羅尼あり。曼拏羅あり。種子あり。頗る眞言佛敎に類し、唵南無那羅延那耶（オームナモーナラヤナヤ）等の稱名の形式を生せり。特に梵歌に於ける念神稱名の思想は多く『無量壽經』と異る所を見ず。然るに是等他力稱名思想中には多く神秘主義を混ぜり。佛敎に亦密敎あり。抑密敎經典の來由を尋ぬるに、其多くは唐末時代の飜譯なりと雖も、舊譯中にも亦少からず。四世紀に帛尸黎密多羅が『大灌頂經』『大孔雀王神呪經』等を譯出せるあり。而して其傳に見るに「善持呪術、所向皆驗、時人呼爲高座法師」とあり。其他梁僧傳中に既に密敎的呪術を行へる人は、世高以下其數少からず。加之經錄にては後漢失譯として既に『安宅神呪經』、『五龍呪毒經』、『正血氣神呪經』、『呪賊呪法經』、『七佛安宅神呪經』ありしといひ、帛尸黎密多羅以前にも支謙の『八吉祥神呪經』、『無量門微密持經』、『華積陀羅尼神呪經』、『持句神呪經』、『摩訶般若波羅密呪經』、『七佛神呪經』の如きは密敎的經典なり。東晉時代の曇無蘭の『陀鄰尼鉢經』『摩尼羅亶神呪經』等、其他神呪の名を負へる經典二十餘部を下らず。羅什亦『孔雀王神呪』『摩訶般若波羅密大明呪經』の譯あり。唐代に至る間に實に數多なり。已に阿含經中に大會經は巴梨と漢譯とに存し、密敎の性質を有するものにして佛敎に於ける密敎思想も

思想としては極めて古きものゝ如し。眸を轉んじて印度敎學を見るに六派哲學の一に數へらるゝ Yoga は佛敎以前にあり、紀元前二世紀には Patañjali ありて Yoga-sūtra を著し、八階の Yogāṅga を始め、神力の不可思議を認めて、多く密敎的思想を傳ふるあり。佛敎中にては禪 Dhyāna 定 Samādhi を主として使用せるも、Dhyāna-yoga は已に熟字にして寧ろ同意義を以て使用せらること少からず。但し Yoga は禪 Dhyāna 定 Samādhi よりも魔術的神秘の意義に富む。是れにアタルヴァ以來の咒法思想を加ふれば密敎となるべし。而して密敎は事相に拘泥するの傾向あり。禪定は瑜伽となり、從て神秘となり、事相となる、是れ他力念佛となる一楔機なり。村上博士は淨土敎の指方立相は密敎思想に來由すとなせり。是れ固より成立せる淨土敎の敎義に就て立論せられたるものなるが上に、淨土敎の列祖中、密經によれるもの比較的少く、淨土敎は所謂顯敎に屬し、（『法然全集』107, 113, 115.）所論尙再考を要すべきが如きも、觀念念佛中に瑜伽となり神秘となるべき基礎あり。即事而眞なりとすれば稱名可なり、禮拜可なり、爾餘一切の行法皆佛力の加被によりて他力の信行となるべし。由來密敎なる語は直ちにタントラ佛敎若くは唐宋以後の佛敎を聯想するも若し神秘主義の義にとれば佛敎以前にあり。稱名念佛は一方禪觀念佛と共に此神秘思想に負ふ所多きが如し。彼の法藏部は五藏中に呪藏を入れ、三味と神通とは大小經典の通說にして、『大方等大集經』『陀羅尼自在王菩薩品』及『守護國界主陀羅尼經』には菩薩四種瓔珞を說きて戒定惠三學の外に陀羅尼を加へ、原始佛敎は菩薩佛敎となりて多く神秘主義を混じ、信行も亦內秘事相を交ゆるに至れり。之を基督敎史に見るに中世哲學は敎會の傳說を錬磨するスコラ學者と自己經驗を主奉する神秘家とを生ぜり。阿彌陀佛は般若法相の佛陀にあらずして、禪定神秘の佛陀なり。佛力攝護の念佛行を生ぜし所以蓋し偶然にあらず。

以上に於て信佛歸佛は遂に遺法遺跡の崇拜となり、戒律を勵むもの、觀念に力むるもの、是れまた念佛の異れる形式にして、就中禪定觀念は觀念念佛を生じ、神秘主義と共に念佛なる信行の變化に一轉機を與へたるを觀察せり。かくして自力念佛は他力念佛を生ずるに至れり。顧みて『中阿』の「若有信樂於我、命終生善處」は茲に他力の信樂となり、往生淨土の思想となれり。其念佛を以て往生淨土の信行とせるは一面又生天思想に負ふ所あるは下「往生論」に於て述べん。

佛敎は其の始め佛徒が佛陀を師主とし覺者とし救主として其人格に信賴し、其の敎訓を守るにありしが。現身佛陀は法身の佛陀となり、敎理の發達と內部の影響とは相待ち相助けて、遂には他力念佛の信行となり。歸依の信賴 Saddhā は佛の攝護に托する信愛 Bhakti となり、茲に稱名念佛の信行となれり。恰かも數論が知解脫に始まりて信解脫となりしが如し。印度敎學は概して學習修禪に由りて知力的努力主義の解脫にあり。佛敎亦本來自歸依を標榜せり。印度敎學の正統派を以て任ぜる吠檀他は智解脫 jñāna mokṣa にして、佛敎の正系たる『般若經』『法華經』は自力得脫なりき。又彼の上座部系の大乘とも稱すべき唯識法相の敎義にありては、稱名念佛を以て別時意となし、其易行大益を以て之を方便說となせり。（天親造眞諦譯『攝論』十七、14. 同造菩提流支譯二十五、10. 玄奘譯三十五、11 無性造玄奘譯五、10 無性の『釋論』九、5 此他『大乘阿毘達磨雜集論』十二、14.『大乘莊嚴經論』六、9-10 等見るべし。）餘波は支那佛敎に及び、唐代善導の『觀經疏』を著はすに至るまで、屢々

論戰を重ねて幾多學匠の腦血を絞りぬ。「天台其他聖道門の諸師は壽觀兩經の信行を見るに、多く自力的見地に立ちて明かに淨土門の諸師と其撰を異にせり。」

(貳) 阿彌陀佛に附隨せる信行

佛陀の本生は願行の具足を要す。法藏比丘の發願立誓に次いて來るべきは兆載永劫の修行なり。今其修行段の行法を見るに、(第十章全部)、普通大乘經典の例に洩れず。多少神話的なるも其行目は多く原始佛教に異る所少し。唯だ自稱大乘經典なるが故に六度三三昧等の行目ありと雖も、其要素につきては『阿含經』中に已に萌芽せり。而して法身と淨土とは此等の修行によりて完成せらるゝものとなす。淨土といひ報身といひ原始佛教に異る所多きも、其原因たる修行の綱目は多くは原始經典にあり。唯だ大乘は時間と空間とを擴大し、從て煩惱と修行地とを細分したるのみ。又其修行の內容は諸佛同道を出てず。縱し五劫思惟と兆載永劫の修行とは法藏比丘の別願別行とするも、其所修の行は悉く自力聖道の行目にして、他力攝護の信行にあらず。抑も諸經、阿彌陀佛の本生因行を記するもの其數少からざるも、悉く自力行を出てず。(上「阿彌陀佛本生」の項下參照) 即ち法藏は自力聖道の修行によりて他力救濟の本望を達せるものと云ふべし。之を以て基督教の贖罪と比較し來れば、此間大に徑庭の存するあり。縱令法藏比丘が世自在王如來の威神力を假りたりといふも、神の子が神の威力に賴りて代償の血を流せるものとは異る。彼は神と人とを人格的關係に於て見、此れは佛と人とを法性の共通性に見たり。彼れは歷史事實を根據としたるも其救濟は偶然的なり。此は全々構想を基礎としたるも其は必然的なる因果の理法を根底とせり。彼は宗教的なりとすれば、是は道德的なり。是は法藏の意志に基き、彼は神の意志に基けり。

以上は法藏比丘の修行なるが、そは諸佛同道の六度を出てず。阿彌陀佛に對する信行中特に注目すべきは法藏比丘の本願に應ずべき他力廻向の信行、即ち衆生生因の行業是れなり。後の淨土門諸宗派にては念佛と諸行とを相對し、正雜二行を分ち、正行中更に助業と正業とを分ち、撰擇本願の生因は猶り念佛のみにありとなす。(法然『大經釋』(『全集』1-18)には善導に依り讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚歎供養悉く彌陀に專注するを五種正行となし、就中稱名を正業とし、他四行を助業となす(『選擇集』第二章同意)抑も淨土宗にては三重念佛と稱して念佛を三種に分ち、念佛(諸師所立念佛)本願念佛(善導の念佛)選擇本願念佛(源空の念佛)となし後の二念佛は共に他力念佛にして、善導は稱名念佛を以て彌陀本願となしたりしも、源空は其本願念佛は法藏比丘が二百一十億土より撰擇せる念佛なりとなし(『徹撰擇』上一)『阿彌陀經釋』には『大經』より本願、讚歎、留教の三撰擇。『觀經』より攝取、化讚、付屬の三撰擇。『小經』より證誠の一撰擇を脩付たり。而して『選擇集』の綱目は大略此に盡く、(源空門下辨阿更に諸經論より二十二の撰擇を上げたり。(『徹撰擇』上十九已下)而して是れ三經の主とする所稱名念佛を主張するにあり(『無量壽經釋』『全集』137-8)概して支那日本の淨土教は信行を重視せり。法然上人以後、淨土門諸派に於ける去行論は異說區々たり。今僅に其一端を擧くるのみ。更に進んでは同じく念佛中にありても、自力の心を雜ゆるものは自力雜行となす。)

然れども經典其者の生因を探るに、未だ必しも斯る區別の存せざるが如し。但し念佛なる行目は六念中の念佛と比して他力信行の着色を有し。此念佛が『無量壽經』『觀經』中に重要なるは論なし雖ども、それのみを主とせるものとは見るをえず。後代に至りても往生行に念佛諸行を別ち、(『大經釋』『全集』1-8, 153等) 中には諸行往生を主とせるものあるに見て明かならん。特に法然上人が專修念佛の義を主張するに偏依善導を標榜せざるをえざりしは、(『大經釋』『全集』1-7) 『無量壽經』の信行が念佛諸行并說にして諸師各異解せるが故のみ。所謂五念門の修行は悉く此中に包含せり。『往生論』の五念門は彌陀一佛に對する修行なれども、此等經典の諸行は又必しも、

かゝる意味のものゝみにはあらず。五惡段に「度世上天泥洹之道」といへる五善は、佛敎普通の道德を布演せるのみ。就中諸本共有なる三輩段の文を見るに、或は一向專念の行目を重く見たるありと雖も、亦佛敎普通の行目を擧ぐる多きものあり。『觀經』には三福世善あり、九品の行法は三輩段と同類なり。阿彌陀佛正明經典中、既に往生の因行中に諸行あり。若しそれ廣く諸經を檢するに、或は戒行、或は持經、或は造像、或は起塔、其他持咒、書寫、修禪を以て往生の因行とせり。下「極樂淨土」の終末引文を參照すべし。但し前にも既に云へるが如く阿彌陀佛に對する信行中、特に重きを置けるは是等諸行にあらずして、主たる行目は專念阿彌陀佛の思想是れなり。此行目は三輩に通じ、特に下輩に至りて諸行目を上げずして單に一向專念無量壽佛といへり。而して『梵本』最も此義意强し。

抑も『小經』の行目は僅かに執持名號のみ。『觀經』下三品の行目亦稱名のみ。大經の下輩の文亦唯一向專念なり。蓋し下三品若しくは下輩に一向專念のみなるは救濟の極限を示せるものといふべく（法然『觀無量壽經釋』に下品に念佛ある理由として「是即大經惡逆最下人、而說極善最上法、非彼念佛府藏篋笥、何能得治」『全集』189）而して此一向專念や總て三輩に通ずるなり。是に由りて諸行併說すと雖も、就中一向專念の行目を主とせるは明かなり。」

其の信心廻向に關する經文は第十八、十九等の諸願見るべし。（梵本）信心と共に所修の善根を廻向し、如來は又自己所修の善根によりて、法身を成じ淨土を構へ、此の如き信心廻向者に其所修の德を廻向するなり。但し如來の側にては特に攝取、攝護 Saṅgṛaha 或は加被、加持 Adhiṣṭana 等といふも、義は廻向に同じ。（眞宗に比して尙幾分自力的たる淨土宗にても證相廻向は他力攝護の思想に外ならず。往相回向（近回往生遠回成佛）（『歡撰擇』上17）。眞宗に於ける二種の回向は固より純他力なるは今又喋々を要せず。）。赤本願攝取の益によりて可能なれば、到底佛力の加被を離れず。

既に信心を尊ぶが故に、從つて疑念を以て特に惡德に數ふ。經に疑念の有無によりて往生以後胎藏住處と蓮華化生との差ありといひ。其の胎藏者は五百歲の間、見佛聞法の修善を缺くといひ、譬ふるに牢獄繫縛の王子を以てせり。（「梵」第四十一章「魏」「唐」「宋」「大」「漢」「吳」同）此の如く疑念を貶したる經文鮮からず。

次に他力信行中に於て特に注意すべきは宿善論なり。然るに『觀經』並に『無量壽經』にては宿善薰發の意味明かならず。但し其義意を含めるものなきに非ず。梵本第四十四章第十頌、魏譯の「則我善親友」に當る文の如き是なり。髣髴として法華經大通智勝佛の說話を想起せしむるものあり。（益一）又彼『小經』「不可以少善根、福德因緣得生彼國」の文を「唐」譯は「成就無量無邊功德、非少善根諸有情類當得往生」といひ、「英」譯にては「有情は現世に於てなしたる善行の結果として無量壽如來の國土に生ずるをえず」（英譯 136）とせり。若し現世のみの善根 Avalamaitraka（『梵阿』116 參照）にては生ずるをえずとせば、宿因論を含むが如きも義意明かならず。（樺氏『梵語學』にも同樣に譯し南條博士の『對照』三二七並に同博士の『梵文阿彌陀經』一六七には漢譯に同じ馬鳴は Bf. B. E. XIIX. 90 其脚註に Avammaitraka は Pali の Oramattako(belonging merely to the present life) の義なりと）但し梵本第四十五章（唐宋同意）の「昔の覺有情の行を行じつゝ」の如きは明かに宿因思想を胚胎せり。要するに宿因によりて往生を可能とするものにあらずと雖ども、其影は所々に見ゆるが如し。

次に稱名の行につきては、『無量壽經』中に多くは佛名を念ずといへり。三輩段の一向專念、『小經』の執持名號、第十九願の十念等皆然り（『小經』には「Avikṣipaciṭṭo 第十八願も citta なれば心なり。此故に南條博士は念字是一とするより ふ念心是」といふが文に親しと云へり。（『梵阿』173）其他念佛 Buddhānusmṛtih（『梵阿』143）意作

buddhānusmṛtiṃ（『梵網』129-30）等稱佛と明ぢせず。『般舟三昧經』（玄九89b）其他念佛の語頗る多し）。善導が「魏」譯第十八願の願文を改めて、「若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺」といひ、法然は念聲是一の義を以て稱名本願と稱せしも（『選擇集』第三章『大經釋』『全集』11）（念佛與唱佛不同、唱者口也、念者憶也。（『選擇集』序）） 而して漢譯諸本此等宗義の解釋を離れて經文を見るに念佛にして稱佛に非ず。亦稱佛といはず。（『魏』第十、三十五、三十六、四十一、四十二の願） 又本願文其他に「聞名欲生」といふ。是れ『觀經』の「但聞佛名」とすれば聞名往生の義となるべし。現に「魏」譯第四十七願の聞我名字に關し、義淵、法位、智光、靜照、眞源、澄憲等の注疏家皆願名を聞名聽名となせり。（『大綱抄』） 藥師の十二上願中、第六七八願は「聞我名號」といひ、聞名不退は釋迦五百大願中最勝の願なり。諸經聞名の語少からず。或は聞名主なりしもの歟。但し『起信論』に「專念彌陀」といふも、『十住毘婆沙論』には「念我稱名」といふ。念佛は又直ちに稱佛となる。果して然らば聞を擧げて念を顯はす、但聞に非ずとの義とも見らるべし。（『大綱抄』） 阿含經中既に稱佛あるは前既に言へるが如し。『藥師本願經』（玄奘譯） には稱佛諸難を救ひ、（係五）『法華經』（什譯） には一一稱南無佛、皆已成佛道」といひ、（松一）『彌勒上生經』（宋譯） には稱名觀像あり。（同六）。其他『往生要集』（下本197）に稱佛の語ある諸經を引用せり。特に淨土の信行にありては、『觀經』下三品の「稱南無阿彌陀佛」の語を始とし、『般舟三昧經』には當念我名といひ、（玄九）『鼓音聲陀羅尼經』には「受持名號、修念佛三昧」といひ、（地十二）『稱揚諸佛功德經』には「讚嘆名號」といひ（黃四）『廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』には聞名一念信樂の語の外に「專稱名號」の文あり（成十三）。『根本得生淨土神呪』を始め、誦呪往生は頗る多く密經に存し、又『陀羅尼集經』を始め數珠の功德を說けるあり。『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經』（上）等に不動を心に、實生を額に、不空は頂に配せるに對し、彌陀は特に喉に配せらるゝが如き、稱名に轉しうべき思想なり。十たび彼の佛名を念ずといふは亦直ちに十稱となるべし。口業讚嘆が稱名の信行となるは自然の順序にして、且つ禪觀以外の散心念佛にては亦稱佛たるべし。念稱の區別はしかく重要ならず。唯た衆生易行の原因は（『十住毘婆沙論』「以信方便、易行疾至」） 彌陀大悲の攝護に與ること（『起信論』『布勝方便攝護信心』） 是れ『無量壽經』に於ける信行の極意なり。即ち上に他力念佛思想の由來を叙述せし所以。古來念佛行を以て勝德易行となせるもの亦此意に外ならず（法然『大經釋』『全集』138）。蓋し多佛信賴は繫念の專注を缺き、動もすれば散亂を免れず。法然の所謂「雜修不至心千中無一」の語（『全集』133） ある所以又此に存す。

抑も預流一來不還は生天の階段を假りて羅漢に達す。然るに淨土往生の理由として諸經論に（例せば『阿彌陀經』『隨願往生經』『智度論』『十住毘婆沙論』『天親』『十疑論』等） 濁惡世界修行不便の故にといへるは淨土の修行の易行なるを以てなり。結果たる淨土易行を目的とせるが故に、其因行も亦易行たるべきは蓋し自然の數なり。此故に『勝思惟梵天所問經』の如く自力の系統を辿るものは淨土の易行よりも娑婆難行を稱讃せり（序品）。かくの如く佛敎元來の努力主義に易行を混じ、出家在家の往生を佛力回向の可能に認むるに至りしもの、蓋し因て來る所あり。次に在家得道の信仰と佛性論とを附して本篇の不足を補はん。

篇外　在家得道と佛性

四雙八輩は等しく佛教教團に屬するも、世俗と出家とは明かに區別を存し、覺證成就は正しく出家修道に依らさるべからず。沙門は眞實の釋子 Śākyaputra なりき。然るに菩薩佛教となるや、在家菩薩出家菩薩の名目を立て、（『優婆塞戒經』列二一三b）菩薩は多く俗相に和同し、融通無碍を其特色となし、羅漢佛教を以て有相執着を離れず、外形に拘泥して裏面を知らざるものと貶し、著しく在家得道の信仰を表はし。『維摩經』『勝鬘經』の如きは一居士一婦人が攝受折伏を以て二乘を揶揄せり。菩薩佛教（「篇篇外」參照）とは互に錯綜して教團在家得道の信仰を生せり。（「菩薩」參照）と大乘（「大乘と小乘」參照）と佛教の俗化（「篇篇外」參照）

其の始め佛教教團に婦人を混入せんとするに當り、之を阿難の懇情に歸せるは明かに躊躇の跡を傳ふるものにして、正法是によりて五百歲を減ぜりといふ。（『中阿含』『瞿曇彌經』六、37-8）是れ『勝鬘經』と反對の思想なり。大小經典多く轉女成男を說けるも、『月上女經』の月上（維摩の女）の如きは八歲の童女にして文殊、虛空藏、不空見と問答し、諸法空ならば成男の必要なしといへり。（寶八巳下）又佛の轉法輪を許せるは舍利弗等二三に過ぎず。（『雜阿』四五反五33）然るに龍樹の『大論』には五種說人を擧げ、佛賢聖の外に諸天、神仙、變化人の說法を認めたり。（『淨影大經疏』の引文に據る）『法華經』提婆品に龍女の成佛あり。『菩薩處胎經』には戒德淸淨によりて龍女の往生極樂を記せり。（『寶集』下本23の引文）『海龍王經』亦同類の思想を傳ふ。『大法鼓經』の流通は迦葉も之に堪へずとして辭せるに關らず、樂見童子の受持を記せるあり。『大集經』寶女品には寶女舍利弗の爲めに說法せるあり。蓋し方便示現の思想は佛菩薩を以て種々の形態に見得るが故に本迹二門觀は在家得道の信仰を說明するに便宜なりき。此の寶女品と共に『菩薩藏經』を受持せし竭伽陀天女の如きも亦佛菩薩の化現なり。固より『阿含經』中在家成佛の受記ありと雖も、多くは釋迦佛の本生若くは轉生果遂の意義に過ぎず。未だ垂迹化現の信仰に達せず。在家を以て出家以上となすものなし。抑も小乘經の對告衆若くは關係者中勿論在家或は外道少からずと雖も特に大乘經に於いて多し。郁迦羅 Ugra（三四地十二）勝天王 Suvikrāntavikrama（九月八）優塡王（三八地十二）離垢女 Vimaladattī（四一地十一、四五）阿闍世王女（四二地十二）善住意天子 Susthitamatī（四八地十一）刷護 Subāhu（四九地十二、五十）須賴 Surata（四三地十二）勝鬘 Śrīmālā（五九地十二）毗耶娑 Vyāsa（地十二）寶女 Ratnastrī（八十玄五）無言童子 Mūkakāmāra（八一玄六）舊迦王 Īśvararāja（八二、八三玄九）維摩 Vimalakīrti（一四四、一四五、一四六、一四七、一四九、一八一。黃七、八、）阿闍世 Ajātaśatru（一七四、一八二、二七二、宇八）老女人（二二四、二二五、二二六、黃五）逝童子月光（二二七、二二八、二八〇。宙六七）德護 Śrīgupta（二三二、宙六）勝光 Jīnaprabha（二四八、二五〇、二四九、宙六）銀色女（六二、宙六、二七一）無垢賢女（二三五、宇九）龍施女 Nāgadattā（二九七、宙七、二九八）梵女首意 Śrīmati brāhmaṇī（三四二、宙六）有德女（三四三、宙一）金色王 Kanakavarṇa（三九〇、宙五）須眞 Sucinti（三九三、宙二）法志 Dharmacārī（四一六、宙七）菴提遮（四一九、宙一）月上女 Candrottarā（四四一、黃八）長壽王（四五五、宙六）海龍王（四五六、四五七、宇九、宿八）妙色王（四五九、宙六）等は特に經題とせる人名を擧げたるのみ。（括弧內の右行は『南條目錄』の番號）此中多くは阿含經中に其名の散見せるものあり。又此等の中、佛菩薩の化現少からず。又中には在家得道に反せるものありと雖も、多くは

出家修道者に非ずして天部若くは在俗たり。而して此等の諸經は骨格を『阿含經』に取りしものも少からざれども、經意は頗る彼と相違するものあり。從つて是等諸在俗は甚しく其面影を變せり。

抑も大乘經に通途の信行は六度なり。然るに『阿含經』中に六度を具說せるものは、『增阿』序品幷に等趣四諦品等に過ぎず。但し『中阿』願經に施、戒、忍、禪、あり。同手長經に進、定、慧、（反五56）あり。同八念經（反五101-2）『長阿』衆聚經（反九63）亦然り。此の他箇々の分說を取らば六度は固より阿含經中に存す。現に巴梨『本生經』序には十波羅密あり。然れども菩薩佛敎は常に六度を以て二乘以上となし、四、六、十波羅密乃至三十波羅密（『興』『緒』本衆經』列一 10-20）を數ふ。然るに諸等諸波羅密行は必しも出家たるを要せず。彼の本生の佛陀は多く出家にあらず。（上『本生』參照）六度と在家得道の信仰とは密着不離なるものあり。如上の諸在俗は常に此の六度の行法を主とせり。是れ『阿含經』中の在俗と其面影を異にし來りし所以にして、大乘經は多く出家在家の融通を顯はせり。在家得道の信仰は同時に敎團の俗化を意味す。彼の『佛藏經』（仁經）には「沙門及白衣、所說無有異、爾時我此法、與俗法無別」（列二 16-17 律古品 11-12 と併せ見よ）といひ、龍樹は「外道和菩亂菩薩法」といひ（下『佛敎俗』參照）又彼の『法滅盡經』の如きは佛徒の俗化を傳へて餘蘊なし。本經は『出三藏記』には失譯雜經中に混じ、（緒一 17）『隋錄』には衆經僞妄中に攝す（緒一 108）と雖も、現藏中に失譯として其の異譯たる『當來變經』（西晉法護譯）と共に存し、（反十 109-7）且つ『增阿』莫畏品（反二 75）幷に『大集經』法滅品（玄四 至上）に於ける法滅の憂慮と、其の當相とは、頗る『法滅盡經』に類せるものあり。抑も滅後を正像末の三時に分ち、證、行、敎の遞減を說くは佛敎の俗化を暗示せる一面たり。詳細は下第三篇附錄に讓る。但し佛敎の俗化を來たし、在家得道の信仰を强めたるもの他面大乘敎理の開發に由るものあるを忘るべからず。法性の普遍をいはんか、草木國土悉皆成佛なり。法身の遍滿を語らんか、有情非情六大周遍なり。此に至りて豈に隔歷を談ずるを要せんや。抑も在家出家の區別の如きは實に末の末たるのみ。而して在家得道に理論的根據を與ふるものは佛性論なり。宗敎は由來神人の關係に成る。佛敎も亦佛と衆生との關係を以て中心問題となせり。以下佛性論の變遷を一瞥して佛徒信行の變化を促したる裏面の暗流を叙せん。

上座部は僧中有佛を主張して修得佛性の義を執り、佛陀は其因地に於て、伏惑行因四階修行を經て即座に一切煩惱を斷ず。即ち佛性は修得による、何等本具の佛性を認めず。所謂後天的佛性と稱すべく、佛陀を見ると低くして然かも衆生と平等ならず。之に反して大衆部は斷惑行因の說、既に有部に異るのみならず、修證以上に本具の佛性を認めたり。所謂先天的佛性と名くるを得べし。上座部は經驗的にして大衆部は理論的なり。彼は修得に見、此は性得に見たり。佛性を性得に見るは佛性の根底たる法性を重視するに發し、一段敎理の進歩にして、佛は高く見られ、然かも衆生と融通するの點あり。即ち心性淸淨を說きて、衆生は今現に客塵煩惱の爲めに覆はるゝも心性本來無垢となし、佛は此心性を開顯せるものにして、淸淨の心性本來、佛と衆生とに通ずるが故に、衆生と佛とは其の本源に於いて一致ならざるべからず。此の如く本然の佛性を認めたるは獨り大衆部のみならず。上座部系に屬し、無爲無作用を主張せる經量部に在りても、衆生に無始本

來の無漏の種子を認めたり。果して然らば心佛衆生是三無差別の萌芽は此にも存すといはざるべからず。更に大乘教に至るや、馬鳴は眞如一心法界を以つて生佛迷悟不增不滅の同一根本となせり。龍樹にありても佛性の無始先天なるを許し、表に之を破して裏に之れを含めり。彼の眞如の凝然無作用を說き、菩提と涅槃、換言せば能證と所證とを別とし、五性の各別を說き、多くの點に於いて上座部系統を傳ふる唯識哲學に在りてすら、理佛性には本來の佛性を認めたり。

抑も一切衆生成佛の可能を許さんか、修得佛性のみにして果して如何にして佛たるをうるや。修得の根底に入らんか、勞ひ性得の佛性即ち先驗(トランセンデンタル)的若くは內在的(インマネント)の佛性を認めざるをえず。彼の『法華經』授記品の繫珠喩の如き最も巧に本具の佛性を譬說せるものとなす。是れ又佛陀が衆生救濟の業用を可能ならしめたるものたり。但し佛教は因果を大宗となす。佛の佛たるは其本性に基くも、そを然らしむる條件は修行を假らざるべからず。平等即差別論は生佛不二にしてしかも二なる所以に照應せり。此の如くにして佛性の本具は大衆部以後、大乘諸家皆之を說かざるなし。

佛性論は生佛人格の根底をなし、茲に始めて衆生成佛の本義を表はす。佛教の救濟觀は實に之に基く。彼の法藏比丘が五劫の思惟と永劫の修行とによりて、衆生を攝護し佛國に往生せしむるものは、恰かも基督の贖罪に類するも、其間大なる差違の存するものあり。別に論ずるが如し。

淨土教家多く『無量壽經』『觀經』の對機を判して本爲凡夫兼爲聖人といへり。所謂凡夫往生はかくの如くにして始めて教理的根據をえたり。

顧みて佛教は同一覺道の理想を以つて一貫せり。彼の婆蹉種婆羅門の如きは夙に佛に對して、「諸欲を樂しむ在家白衣も成就しうるの法を以つて眞道なり」と曰へり。(『現法』3.3.5) 佛陀の平等主義を迦らんか遂に彼處に到達せざるを得ざるものあり。

第三篇　往生。淨土

第一章　天部

(壹)　印度に於ける輪廻觀念

往生は我國今日の佛教徒にありては彌勒の兜卒若くは諸佛の淨土に轉生を意味するも、原意は唯だ此生より彼生に往生するをいふ。故に摩奴法典輪廻章には轉生の意味に往生 jati, yati の字を用ゐたり。(XII,9) 此故に經典によりて淨土に生ずるものと、人天に生ずるものとの區別をなさず。同一語なる往生を以つてせり。(『阿彌陀經』にては Jan 或は Utpad の變化語を用ふ。然るに巴梨周陀迦小集には人界受生に Upapattiya を使用せり)『阿含』中には往生淨土の思想なきを以つて、所々に往生 Sabhāgata の語あるは善處若くは諸天に生ずるの義なり。(Sugati, Saggā) 趣 (Gatas) 字亦往くの義なり。往生淨土の思想を以つて成れる經典にても、『藥師如來本願經』(黃四 ST 唐 玄奘譯) には生天と生極樂とに俱に往生の語を用ゐたり。知るべし、往生は後の淨土教に於いて解するが如く、捨此往彼蓮華化生の意味のみにはあらざることを。

往生は既に轉生の意義なりとすれば、縱し輪廻轉生にあらずして蓮華 (Padma) 化生 (Aupāpaduka) 不退 (Avinivartaniya) 往生の義なりとするも、必ずや印度思想の轉生觀念、即ち死後の觀念と密接なる關係あるは言を俟たず。印度人が死後に對する觀念は果して如何なる變遷を以つて佛教の前驅をなせしか。

抑も輪廻 Saṁsāra 觀念の發達は印度思想の一異色にして、彼のメキシコの Trascalan 人種。ボルネオの Dayak 人種。ボリネシアの Borjeu 人種。其他 Panhathan 人種等皆轉生の觀念を有するも、是等は一束して自然人種の有せる幼稚なるものに過ぎず。到底印度のそれには比すべくもあらず。印度に於ける輪廻觀念の起源につきては、諸說紛々たりと雖も、想ふに頗る蚤代に發するものゝ如し。但し梨俱吠陀時代には僅かに其痕迹のみに過ぎず。正當に其の起源を探るに當りてはブラーマナよりせざる可らず。百步ブラーマナの頃より、輪廻の思想及輪廻は合法によるものなることを明にし、漸く其成形を見るに至れり。吠陀の後期なる阿多婆は善行者は天界に行き、惡人は地獄に墮すといふ。蓋し一般にブラーマナはアタルヴの呪法宗教を一層僧侶的となし、死後の世界に關する觀念も、アタルヴの中に既に天界の快樂を肉慾的に想像して、稍復雜に進みしを、更にブラーマナは一層之を複雜にし、彼の神的行路祖先行路を說き、死後衡器に量られて天界地獄の賞罰を受くといふが如きは全く此期の思想なり。而してゼンドアエスタ中の天界地獄の觀念も畧々此に類す。(大英百科辭典 二四 869) 優波尼沙土に至りては佛教以前なりとせらるゝチャンドーグヤ、ブリハダーラニヤカ中に已に完全に發達し、ヤジュニヤヴルキヤの教義の如きは業と應報との關係を一層明確にせり。(『東方聖書』十五 61-62 脚註並に『印度宗教史考』一五九にタイテリーヤ、シャタバタ及ブリハダーラニヤカ、ウパニシャッドの輪廻諸境界の對照表あり見るべし。降つて佛教、摩奴、波羅多等の當時に至りては此信仰最も熾んなりき。

蓋し優波尼沙土の哲學的考察は、眞實々在の梵を明むるにありしが、梵は見聞の見聞者、認識の認識者(Bri. XV.129.)にして、元と差別を越へ、個人性を離れたるものなれば、差別個人ありて始めて存し得べき道德は實在界にありては畢竟假相たるに終らん。嚴密にいへば梵の外は無益の徒勞ならんのみ。優波尼沙土の哲學に於ける空論的形而上學を改造して、實際道德上の調和を計りたるは數論なり。又絕對梵の考察よりは、寧ろ道德的實行の方面を重しとなしたるは當代摩奴法典に代表せられたる波羅門教なり。優波尼沙土の後を受けたる此等教派にありては、道德上の實際的方面を說明するを必要とし、俱に輪廻說を採用せり。此故に其輪廻說は、一層詳細なるに至れり。數論にありては、神我と自性との結合より、自性が覺我慢以下の諸諦を分出し、玆に始めて個人格の成立を遂げ、而して其微細體相即細身は麁體相と異り、父母所生の現在の肉體は死の爲めに解散するも、其の細身は獸、人、天道中にありて、他の障碍する所とならず、又變易することなく、常に神我に固着して漂遊し、母體の入るべきあれば乃ち之に入りて復生すとなす。(『校註金七十論』中 20-23) 蓋し細身は數論の靈魂なり。輪廻循環の相續は主として之による。而して自性が有する喜憂闇三德の薰習は轉生の間に於て、各々異る特質を表はし、神我自身の本性は三德の爲めに動かされざるも、自性と結合して離れざるものなるが故に、畢竟關接的影響を免れざるなり。斯の如くにして三德配合の割合は諸境界に涉りて實に無數の差別を生ず。死後に於ける果報の異りも亦三德の特異性に依りて相違あり。此故に其輪廻の境界も亦三德の次第による、所謂「向上多喜樂、根生多痴闇、中生多憂苦」是なり。(『同書』下 37.) 是によりて天道に梵王、世主、天帝、乾闥婆、阿修羅、夜叉、羅刹、沙神の八を數へ、人道唯一類、獸道五分、所謂天、人、獸、三道の說あり。(『同書』下 10.)

次に『摩拏法典』は其の現存の形をなせるは西紀前後の一二世紀ならんも(Bühler 氏)、思想としては紀元前四五世紀に既に存し、佛敎と相併びて行はれ。吠陀を證典とするが故に、從つて自然神敎的なるは是れ數論との差異點にて、數論も摩拏も共に有我主義なるは佛敎との相違點なり。摩拏法典は有神敎なるが故に他律的命令的なるは勿論なるも、賞罰は宇宙の自發的秩序にして、輪廻生死も四姓制度も、共に自然的天則となし、幾多の輪廻境界をあげたり。(法典十二章) (『印史』110 『印考』206 參照)

尼夜耶、勝論等自餘の哲學派も亦皆輪廻說あるも、數論と『摩拏法典』とは就中其代表たり。

佛敎は元と無我を以て立ち、涅槃寂靜を說きて此等有我主義に反對し、遂に優婆尼沙土の我(アートマン)を否認せり。無我は印度敎學中に於ける新義にして、佛陀の說法中最も必要の敎義とす。而して其根本には諸行無常の原理を豫想せり。我と計し靈魂と執するは、畢竟五蘊假和合、身心前後連續に起る現象に過ぎずして、一實體あるにあらずとなす。此の無我の敎義は一見すれば、自我觀念の否定にして、道德的責任の不成立を意味せるが如きも、しかも其宗敎道德の動機を輪廻觀念に置けるは數論と同じ。即ち業の因果的連續を以て、舊來の輪廻說を其敎義中に入れ、能く其根本義との調和を保ち得たり。因果と輪廻との觀念は佛敎道德の重要部をなせるとは、佛敎が後來印度を出て、他邦に傳播するに當り、如何なる敎義を以て實際的影響を及ぼせるかを

見なば、蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん。而して其輪廻の境界を説くや、五趣或は六趣とす、其中今は五趣中の天部を見ん。

(貳) 佛教の天部

巴梨『轉法輪經』に依るに三界廿六天となす。即ち四王天、忉利天、夜摩天、兜卒天、化樂天、他化自在天(以上欲界六天)　梵衆天、梵輔天、大梵天、(初禪)　少光天、無量光天、光音天、(二禪)　少淨天、無量淨天、徧淨天、(三禪)　廣果天、無想天、無雲天、無熱天、善見天、善現天、阿迦尼吒天、(四禪)(以上色界十六天)　空處天、識處天、無所有處天、非想非々想處天、(以上無色界四天)　是れなり。然るに『倶舍論』によるに(敬十102a)　六欲天と色界初三靜慮と無色の四天とは『轉法輪經』に同じきも、色界十七處中、第四靜慮は七天となさず八天とせり。即ち無雲、福生、廣果、無煩、無熱、善現、善見、色究竟の諸天是れなり。又『長阿』忉利天品には欲天に四王、忉利、餓摩、兜卒、化自在、他化自在、魔、の諸天を數へ色天に梵身、梵輔、梵衆、大梵、光、少光、無量光、光音、淨、少淨、無量淨、遍淨、嚴飾、小嚴飾、無量嚴飾、嚴飾果實、無想、無造、無熱、善見、大善見、阿迦尼吒、の二十二天を數ふ。無色四天は上述の如し。(伏九110b)　又『樓炭經』、『起世經』、『淨樂經』には更に摩醯首羅天を色天中に增加せり。(經律異相南二168a)　又其數は同じきも其名の異るものあり。(巴梨『轉法輪經』によれば色界に於て初三各三天、四禪七天、色界總て十六天となり。『倶舍』の文にては十七天即ち福生天を增加せり。然るに色界諸天に或は十八或は十六を立つる異說あり。從て天部の數を計へて二十八天或は二十六天となす。『倶舍』(敬十110)「迦濕彌羅國諸大論師、皆言色界處、俱有十六、彼謂即於梵輔天處、有高座間、各大梵天、一主所居、非有別地、如食處座、四衆圍繞」といふ。是れ二十六天なるも、巴梨『轉法輪經』と異る。又廣果天の外に無想天を立て、二十八天とするの說あり。又『寶積經』にては少しく之に異るものあり、繁を厭ひて畧す。(『外道哲學』320參照)但し經論に於て多少異る所あるも大抵は一致せり。)而して忉利天は諸經に其名を擧ぐるも所謂三十三天名を列ねたるものは少し。『正法念經』に住善法堂、住峯、住山頂、善見城、鉢私地、等三十三名を擧げたるが如きは稀に見る名數なり。(宿二35b)　然るに『東方最勝燈王陀羅尼經』には四天王六欲等の諸天を數へて三十三天となせり。(藏七351b)

以上諸天は佛教に所謂天部にして、各其階段に從て勝妙の德あるを記せり。佛教にては欲界六天の下に四州(人界)、餓鬼、畜生、地獄(五趣說により修羅を畜生と餓鬼と天部とに攝す)を說き、天部に種類を分てるが如く此等の諸趣亦種々に分類せらる。而して又後期の出にかゝる經典は概して其數を增加せるが如し。尙二三天部に關する名數の相異を擧げん。『中阿』梵天請佛經(伏五105-106)には光天、淨光天、遍淨光天の三種を數へ、『增阿』懺愧品(伏一36)には釋梵、四天王及二十八天といひ、『中阿』大因經(伏六18)『增阿』等法品(伏二62-63)『同』結禁品(伏三93b)には七識住として、人及欲天、梵、晃々、遍淨、空處、識處、無所有處を擧げ、『中阿』大因經には此他に二處として無想天と非想非々想處とを擧ぐるあり。七識住と二處とを合すれば大畧九衆生居に同じ。(『增阿』九衆生居品伏三115a)精禁品伏三127.a)　搏、觸、念、識の四食を以て諸天を分類せるあり。(『長阿』三十(伏九108))　又『長阿』遊行經(伏九22-23)　には諸神諸天の列名あり。『雜阿』第三十(伏三72以下)　にも普通以外の諸天名を記載せり。『中阿』舍梨子相應品(伏五25)　には博食天意生天を擧ぐ。又更に『大會經』(伏五65-66)　には諸天諸神の數を擧ぐる頗る雜多なり。斯の如く原始經典中已に此等諸天、諸神の名義種類等整然たるものあり。又彼の地獄の如きは『中阿』全體にて僅かに三四個處に出づるのみなれども、其所說稍整形を具へたり。勿論原始的經典といふも、其後に附加せられたる

もの多ければ、一概に之を原始的とするは聊か憚りあるも、佛教に來りて此等三界六道の觀念が一層詳細にせられたるは、先に列ねたる優婆尼沙土以下、數論、摩拏法典等に比して著しき相違あるに見て明かならん。

(參) 波羅門諸神と天部

佛教經典中に表はるゝ諸神は種々雜多にして、上は吠陀の諸神より、下は波羅門教の遙かの末葉なる毘濕拏、濕婆崇拜時代に及び、特に怛多羅 Tantra 文學に至りては雜多の諸神を包容するに至れり。殆んと二千餘年に渡る印度宗教上の諸神を悉く包含せりといふも過言にあらず。今左に天部なるものは吠陀波羅門の諸神を如何に組織せるかの大略を見ん。

先づ四王天中の毗沙門は富羅那の俱吠囉（巴梨『大會經』にはKuvera といふ）にして四王天皆九十一子ありて、因陀羅の名なりといふ。因陀羅及持國天の乾闥婆主は其名は吠陀時代にあり。毗樓傅叉の那伽主神は富羅那の龍鬼信仰中にあり。特に『大會經』にては毘富羅在馬國等の所在地を記せり。次に忉利天即ち三十三天は吠陀の三十三天（トラヤストリンシャト）に起因し、其計數の方法は元來一定せざりしも、普通三疊十一天、即ち天、空、地に各十一ありといふ。要するに吠陀時代の諸神を包括して三十三天とせしが如し。（吠陀は神界を分ちて天空地の三界とし、阿多婆の如きは三界の上に光明界を立て、又或は三界を二部に分ちて六界となし、或は九界となし、又三十三天となす。但し三十三天には之に配すべき神なく唯だ定數を擧ぐるのみ。）（高楠教授講錄による）而して其三十三天の頂上は帝釋天となせり。（吠陀にては毘怒拏なることあり又 Brh. III. 9. には波闍波提、因陀羅を上位とし、他三十一神はアーデトヤ（此中十二神あり）ルードラ（此中十一神）。ヴヴシュ（此中八神）を以てし、シャンカラの註釋には因陀羅を三十三天の主となせり（S. B. E. I. 61-2）又三十三天の順序は吠陀と一致せず。）然るに其帝釋（釋提桓因天帝）は富羅那に於ては佛教八部衆中の緊那羅 Kinnara を歌手となし、迦樓羅 Garuḍa をして龍を打たしめ、乾闥婆 Gandharva を其樂手となし、常に勢威ある首領の位置に居り。其の起因は吠陀の因陀羅（インドラ）なり。因陀羅は阿耆尼（アグニ）、蘇摩（ソーマ）、婆樓那（ヴァルナ）等と共に曾て吠陀時代に最も榮えし神の一なりき。然るに富羅那に至りては昔時、吠陀時代の如くは尊信せられざるに至れり。（ダットト氏 II 192-3）以下の三十二天は（『正法念處經』によりて）一概にいひ難きも、光明天はスールヤ Sūrya 若しくはアーディトヤ Āditya より月行天はチャンドラ Candra の類より來りしなるべし。速行天、微細行天、住輪天、威德輪天、旋行地天、歡喜園天等は吠陀諸神の性質を聯想せしむるものあり。歌音樂天、清淨天、住輪天、等亦多少の關係あるが如し。佛教の帝釋は能く佛、說法の翼讃に力め、人を勸めて歸佛せしめ、（『增阿』九衆生居品及三 15.a 勸請品及一 97.a）又三十三天の一天子に出家の願を起さしめたるが如きとあり。（『增阿』非常品及三 56.b）此他に帝釋は佛の化導を助くること多し。然るに經中、帝釋が戰鬪をなすを以て傷害の罪を戒しむる如きは（『長阿』釋提桓因品）古神話との關係を想起せしむるものあり。次に梵天はブリハスパチ Bṛhaspati ブラーマナスパチ Brahmanaspati と其起源を同じうし、吠陀の後期より婆羅門書時代に最も榮え、優婆尼沙土時代に至りて我（アートマン）と共に根本實在とせられ、抽象的中性神格より人格的男性に轉じ、富羅那（プラーナ）文學並に印度教中三位の一として、常に重要なる位置を保ち印度教學にありては今古に通じての大神なり。（『第一篇』緒論外參照）此故に梵天は佛教にありても常に帝釋以上の地位を與へられ、帝釋と同じく佛法歸佛の說話を傳ふ。（『中阿』梵摩經及七初）就中勸請（列五）と尊法（辰四 55-56 辰五 34.a）とに由りて諸天中重要なる使命を果せり。梵天帝釋の二神は種族にては刹利、波羅門兩姓最上の神にして、其時代よりせば吠陀と婆羅門教との兩期を代表せり。此故

に此二神には常に特別の地位を與へて諸神の上に配せり。例せば『增阿』八難品（及三）には天地大動の八因をあげ、劫初劫末の外は、佛の托胎、出胎、成道、入涅槃、大比丘の神變と及び諸天が其宿福行によりて、帝釋若しくは梵天王となる時なりといふ。知るべし、梵天帝釋は佛傳の事蹟と同じく世界の大事變と見做せしことを。阿修羅（時に天部に擬す）は其起原頗る古く、波斯のマフラマヅダと同語原に出て、梨俱吠陀にありては半魔神にして左程惡性の神ならざりしも、波羅門（ブラフマナ）書時代には全く魔神となり。佛教には此惡性の方を傳へ、帝釋と鬪ひ種々猛惡なる神格を取り、『長阿』『阿須倫品』及『起世經』『樓炭經』の戰鬪品となり、日蝕は阿修羅が帝釋と戰ふとき、日天其眼を射たりしかば、手を以て日天を覆へるによりて生ずといふ。耶摩も亦波斯の Yima と同源に出て、吠陀にありては理想鄉たりしも、富羅那に於ては全く昔日樂園の主たりし面影を失して、死後の裁判神となり地獄の主たるに至れり。而して佛教に在りては時々鬼界に攝し或は地獄に攝し、又別に閻羅趣ありとなすも大略富羅那の所說に類す。然るに耶摩（須耶摩、焰摩、炎ゝ）は善時天にして地獄に攝し、又は異る。但し其語源は全く同一なり。而して閻魔は魔王とせらる。元來佛教の魔は佛を脅迫し誘惑し會座を亂し入滅を請し佛教惡德の具體化なり。然るに前に引ける長阿の如は欲天の最高を魔天とせり。（耶摩は吠陀より富羅那に至りて、反對せる兩面を表はせるが故に佛教亦善時天と地獄の主との兩性質を留めたるものか、或は耶摩羅閻 Yamarāji は時に魔摩羅（成七85.b）となし、閻羅とし、（『外道哲學』23）滑伽阿蓋摩 gaṅgāgamm を伽蓋とせしが如く魔王とするに至りしか、他化自在天の魔王なることは北傳は勿論南傳も亦然り。（Childers 243.1.21 參照）然るに魔と他化自在天とは必しも一ならず。例せば佛入涅槃の時に天魔波旬が佛に死を迫りしに（及九14.b）他化自在天は他天と共に偽を說けり（及九183.c）第六天と耶摩と魔との關係に就きては他日に讓る。）佛教に所謂自在天外道所奉の神にして（『外道小乘涅槃論』）濕婆の別名なり。又無色界最高の無所有處及非想非々想處は數論の理想境にして、阿羅藍爾多羅の奉ぜし教義なることは聖求經に見て明かなり。後に至りて辨ずべし。

抑も佛教の天部は普通は『轉法輪經』、『俱舍』等の說なるも諸經論によりて其名目配合必ずしも同一ならず。『金光明經』には大梵天王、釋提桓因、大辨天神、功德天神、堅牢地神、散脂鬼神、大將軍等二十八部、鬼神大將、摩醯首羅、金剛密迹、摩尼跋陀、鬼神大將、鬼子母及五百鬼子、或無量百千鬼神とあり。『地藏經』には海神、江神、河神、樹神、山神、地神、川澤神、苗稼神、藥神、夜神、空神、天神、飯食神、草木神等あり、其他佛書中に種々の鬼、種々の魔、種々の仙あり。而して此等諸天諸神の組織整はず。又『三藏法數』には二十天を數ふ。梵天、帝釋天、毗沙門天、提頭賴吒天、毗留勒叉天、毗留博叉天、金剛密迹天、摩醯首羅天、散脂大將、大辨天、功德天、韋天將軍、堅固地神、菩提樹神、鬼子母天、摩利支天、日宮天子、月宮天子、婆竭羅、閻摩羅王、是なり。又婆樓那 Varuṇa 阿耆尼 Agni 婆由 Vāyu 蘇利耶 Sūrya 蘇摩 Soma 等も諸所に散見す。（『外道哲學』33.39 參照）而して諸神は時に諸天と稱せられ、天と神とは交雜せり。『無量門微密持經』（成九ｐ.6 女雜）には天名なれども、その異譯は神名なるが如し。

八部中の一なる那伽羅剎等は富羅那に來りて、特に德叉迦（ダクシャカ）、和修吉（ヴァスキ）、シエーシャ（シェーシャ）の名にて龍王中の大なるものとせられ、夜叉（ヤクシャ）、夜叉尼（ヤクシニー）と共に佛教中にては龍女談となり、或は鬼子母神の說話となり、餓鬼（プレータ）、畢試遮（ピシャチャ）等は亦富羅那文學と共に佛教中に表はる。元來須彌說に關して、佛教中に此の富羅那文學の輸入せられたるも

の少からず。富羅那文學は主として民間說話に基き、古傳の神格に加ふるに他地方の諸神を混じ、吠陀の三十三神は三千三百萬の多神をなすに至り、且其諸神を須彌說を中心として方處を定め、又是等諸神間に合て吠陀になかりし新屬性を附加し、且つ諸神に主從關係を附し、世界は宛然神鬼を以て充滿せしむるに至れり。佛敎中の諸天諸鬼神の其影響を蒙むれもの蓋し鮮少ならず。特に怛多羅(タントラ)佛敎に於て然り、(『印度土俗』索引第四10-23に諸神諸天の名を列ぬること詳かなり)同時に佛敎諸天部說が富羅那に影響を與へしことも勿論なりしならん。

蓋し迷盧 Meru 即ち須彌を中心として、上下に世界を想定せるは印度敎にありても同じ。特に耆那敎の世界も紡錘形をなし、須彌七州七海、十二天宮、九天五天の如き頗る佛敎の宇宙形態論に類し、閻浮、俱盧、因陀羅、梵天、善見、喜樂、阿修羅、龍、畢試遮、犍闥婆等は佛敎と其名を共通にせり(『史考』I 238 以下參照)。又非シ、ス、ブラーナ第二にも七島七海の記事あり。要するに、佛敎天部中其多くは各時代に繁榮せし諸神を攝取したること明かにして、大略左の諸點を注意し得べし。

阿修羅の魔となりしはアタルヴ以來にして、佛敎にありては天部以外とせられし事。

四王天の思想は吠陀以後に明かに一組とせられたるが如し。しかも是等諸天は他神の上位に配せられず、羅刹の主にして他の守護神たり。從て最下の位置を與へられし事。

忉利天中第一位の帝釋は因陀羅にして、因陀羅は刹利神として吠陀時代に最も榮えし神なりし事。而して因陀羅と共に、梨俱吠陀全卷の三分の二を其讃歌に費せし、阿耆尼蘇摩の如きは全く其姿を隱せし事。

夜摩は吠陀中にありては比較的後期の神にして、其始めは光明界樂園の主たりしが、後に地獄の神となりし事。

梵天の如きは婆羅門書に最も榮え、優婆沙土を經て婆羅門敎印度敎中の重要神格なること、但し婆羅門書中の主神中、梵はあるも我(アートマン)は固よりなく、又三十三天以上第三十四位の波閣波提も列外に除かれしこと。

摶食天、意生天の名稱はウパニシャッドの食身(アンナマヤーマンマーヤ)、意身(マノマーヤ)、識身(ヴィジュニャーナマーヤ)と關係あるが如し。

無色の四界中非想非々想處は數論の理想境たりし事。

是に由りて之を觀れば、佛敎の天部は古來より變化せる諸神の順序を殆んど時代的に、下位より上位に配せしが如き形迹あり。即ち次第に後期に繁榮せし諸神を漸次上位に增加せしものゝ如し。是れ獨り佛敎にありて然るにあらず。梵(ブラフマー)が勢力を得るや、波閣波提(プラジャーパチ)を始め神話的諸神は第二位以下に落ち、タイテリーヤ、ウパニシャッド第二の如きは、巧みなる譬喩を設けて、諸神、梵に及はずとの思想を明言し。哲學的なる我(アートマン)は又神學的なる梵の位置に代はれり。我國の神話にありても亦天御中主神は夙に天照大神に其位置を讓りしものの如し。蓋し新神が古神の位置を奪ふは東西古今宗敎史上の事例なり。かくの如くにして佛敎天部は後代に至るに從て當初成立の原意を失ひ、益々佛敎的となれり次章に辨ずるが如し。

然るに茲に怪しむべきは兜率(トシタ)即ち知足天なり。佛敎以前にありし天名なるか否か。八相成道の說によれば

菩薩最後身は此の天中にありと云ふ。『大論』(四12) には菩薩處兜率天に四由を擧げたり。中に於て第三由に此天は佛の出世と時相遇ふが故にと云ふ。若し之を兜率天が曾て古神話中に表はれざりし天部にして、下地上地の天部は吠陀以來の諸神なるを見れば、或は此天部の說話が以前に無くして、特に佛敎中に起りし歷史的事實を暗示せるものにはあらざるなきか。又更に『大論』第四由に中道を解するに、六欲及梵天の七天中にて中道なりといふ。第二禪の光天、第三禪の淨天乃至色究竟天を數へざるに見るも、當時既にありし諸神諸天を列して、其中間に此天部を設きたるにはあらざるか。而して三十三天の主なる帝釋は歌舞に耽り、威力を振ひ、夜摩又曾て死者の樂園の主たりし事あり。化樂天、他化自在天、是れ皆欲界天の名稱に相應す。然るに同じく欲天中にありて、兜率天獨り知足滿足の意義を以て其名稱とするは更に注意すべし。而して此天所居の菩薩は喜足定を修すといふ。(『佛地論』第五) 其他帛法祖譯『涅槃經』には、佛入滅時四禪四無色定に入れりといふを一層具體的にして、一々の天界に至り、佛は其天の衣服と語言とにより說法する時、諸天皆佛を知らず。獨り兜率天のみは曾て彌勒の說法に依りて經を知れりといふ。何れにしても諸天部中此天部は多く佛敎的なるより見れば、恐らく佛敎徒の間に作爲せられたるものなるが如し。

抑も兜率の外佛敎天部中、其來由を詳にせざるもの少からず。但し上に過せる諸天中、欲界化樂天、色界二禪の光天、三禪の淨天、其他四禪の七天、無色界の初二處の如きは、吠陀以來の諸神と哲學派の理想境とを考ふるに、畧々其關係を追蹤し得らるゝが如し。グリュンエデル氏の如きは佛敎の天部を以て、波斯のアメシャ、スペンタの思想より脫化し來れるが如く見做せるも、波斯諸神との類似を擧ぐるもの僅かに一二に過ぎず。(『佛英』97-70) 波羅門敎者那敎佛敎の諸天部を比するに類例の多くは寧ろ印度の信仰中に存するものといふべし。姉崎敎授は曰く、按ずるに此等は異時異處の信仰に成れるものならんと。暫く記して將來の研究に待つ。

(肆) 諸神の佛敎化

タントラ乘に於ける雜多の諸神は暫く措き、原始佛敎中に既に諸天部を認め、生天によりて修福を勸めし形迹あるは事實なり。固より此等諸天は所謂有の世界にして輪廻の諸境界なり。佛敎は元と數論と同じく (『校正』七十論上『毘陀五過失』參照) 之を以て究竟の境界とはせず。業盡れば驅て輪廻の苦患を免れざるものとなせり。此の故に佛敎は此等諸界を迷界となし、此上に涅槃の悟界を立つ。抑も印度敎學の大勢を見るに、優婆尼沙土は吠陀波羅門書の神中心を脫して人中心に轉じ、神人同體梵我不二を表はし、佛敎は更に人に神以上の力あるを認めしめたり。(ケヒツベン『佛敎』I. 5, 124 參照) 後に世界を十界に分ち、六凡四聖となして六趣以外に聲聞、緣覺、菩薩、佛を立つるも亦此に基因す。果して然らば涅槃寂靜の妙界に悟入するを以て其目的とせし佛敎が、何故に其敎義中に是等の諸天を攝取したりしや。玆に少しく佛敎と波羅門敎との關係を見ざるべからず。

ビール氏は佛陀が印度當代の神學に反對せし態度を以てクセノファネスが希臘の多神敎を攻擊せし事例に擬せり。但し佛陀の場合にありてはクセノファネスが斷然古神話上の諸神を否定し去りて、諸神の根底に無限一體の存在を唱道せしとは聊か趣きを異にするものあり。希臘にありては嚴然たる僧侶の階級制度なく、從

て直接之を攻擊しうべく、又彼れの之をなさゝるを得ざりしは、希臘の神話はホメロスの書によりて、堅固なる結晶體となれるを以て、單に哲學的考究のみに一任して之を溶解せんことは不可能なりき。是れ直接開戰を布告せし所以なり。然るに印度にありては事情大に之と異るありて、宗教的制裁確乎として存立し、爲めに公然吠陀の多神教を駁せんか、反て其反動によりて功果を奏すること容易ならず。又此の如き努力は無用なりしなり。何となれば印度の諸神は元來交替神教に基き比較的融合性を有し、諸神の神格化は希臘の如く充全ならず。抑も印度に於ける教學の勃興を見るに直接前思想を攻擊せずして、前思想の上に更に後の思想を建設するの風あり。印度思想の發展は概ね此の方法による。佛教は波羅門教に次いで起りし釋尊獨證の妙理を發揮せるものならんも、又前來の轍を履みしは印度宗教史家の等しく證明する所なり。即ち舊來の諸教義を包攝し、更に其上に自己の主義を建設し、漸次諸異道の迷執を脱却せしめしや明なり。更らに他面より見るに元と佛徒に四輩あり。是等は悉く一生に繫縛を盡して復た轉生せざるをうるか。果して佛陀が理想通りの修行をなすをうるか。蓋し如何なる哲人も悉く自己の理想通りに他人を教化する事は難なり。此故に佛陀は已に成道後、化他說法に趣くべきや否やに躊躇せられしに非ずや。大聲多くは俚耳に入らず。是に於てか多劫生死に宿善薰發を期するに至るは自然の順序にして、嚴密にいへば一時的なる姑息的解脱も亦佛陀教化の一方便たらずんばあらず。（『中阿』（ディウターメンツー）尺五七）現法求涅槃は佛教の理想なりと雖とも、同時に七解脱、四向三果、等生々世々の成就を說かざるなし。（『長阿』尺九29.n）是れより菩提回向の思想を生ず。下に至りて辨すべし。

『阿含』中に於ける生天の思想は此の如くにして佛教に於ける普通道德の奬勵となり、古來の信仰を佛教中に復活せしめたり。是れ固より副產物なりと雖も、此の副產物が更に佛教の精神を其中に寓せしむるに至りては佛教の聖者は時々天部に生を托し、出離解脱の階梯となし、更に生天思想を一層擴張しては往生淨土の思想を生ずるに至りしなり。而して生天には必ず因行あり。次に生天の業因を考察せん。

佛教の天部思想は、其元と婆羅門教の所說を襲用せし事、秋毫疑を容れず。試に摩奴法典第十二章中の因行と應報とを見るに、多く佛教所說に類するものあり。抑も過去は人間の足なり、思想の發展は常に其前代を地盤とす。此故に耆那教や佛教や元來印度に於ける宗教改革として出てしも、其教團生活は多く波羅門行者の習慣を承けしもの少からず。衣法、食法、居住、其他剃髮、沐浴の風習、安居布薩の行法等、悉く婆羅門行者の之が先驅をなせるあり。特に其戒行は耆那と同じく婆羅門教の戒條を踏襲せり。（『印考』「耆那教及佛教の婆羅門的傳來」の章下參照）暫く不飲酒及び沙彌十戒中、後の五戒の如きは佛教特有の戒法なるも、其他多くは波羅門教に共通にして、彼の不說過罪、不自讚毀他、不慳貪、不瞋恚等は婆羅門教の戒條中に存す。就中、殺盜婬妄の禁戒は大小乘共に根本の戒法となし、特に之を性戒（或は十戒全體を性戒となすことあり）として他の遮戒に別てり。然るに此の重要なる戒法は基く所、婆羅門教にあり。而して彼にありては之を以て生天の因行となせり。然るに佛教を見るに亦生天思想と聯結せるものあり。今繁を避けて左に阿含經中、生天の業因を記せる二三の出所を擧げん。（尺二58正法治化 尺一63.n）

八關齋（尺一16施根、尺三31.b 慈行、）（尺三28.n 尺二57 十善、四等念、）（尺一23.n 不犯戒、）（尺一95 不殺、五戒十善八關齋、）（尺一86）（尺一112-13 三善根、四無量、）（尺三48.b 慈心

(仏三59.b念三尊)　(仏三58.a 仏九81.b 持戒完具、大施出家修道)　(仏九71 仏五10.b.34. 供養、四無量心)　(仏五55.b 三歸受戒)　更に其の生天の因を見るに聞法によるあり、五戒を修するあり、十善を行ずるあり、十念を修するあり、慈心によるあり、布施によるあり、必しも一様ならざるも、多くは是れ世間の善なり。知るべし、生天は世善即ち婆羅門教に普通なる生天の行因を採用せしことを。然れども生天は元來佛教の本意にあらず、一時的姑息的教化なり。此故に『中阿』成就戒經(仏五55.b)には戒定慧の成就者は現法滅定を證し、若し證を究竟せざれば、天中に生じ、後ち滅空を知るといひ、又『增阿』六重品(仏二83.a)には薩遮尼犍子が佛の說法により四諦具足、三結滅し、三十三天に生ずといふも、生天後は彌勒の成佛に會ひて得道すといふ。蓋し佛教の教理上當さに理として然らざるを得ず。佛教徒の理想は此三界生死の超脫にあり。此故に難陀は天壽の有限を悲しみ(仏二83.b)三十三天の一天子は未來出家の誓願をなし(仏二83.b)一比丘輪王を志求して佛の教誨を蒙り(仏二83.b)頂生王の勢威を以てして尙得疾、人趣に下生せり。(仏一31 仏九35.a)此の如く佛教本來の教義に基き嚴密に云へば、生死流轉に拘はるものは、其輪王たり、梵王たるを問はず、希望すべきものにあらず、寧ろ厭離すべきなり。此故に『中阿』林品優陀羅經(仏六35)には無色界の極處たる非想非々處をも壽盡復生を免れずとなせり。佛の說法中當代の有神論並に有我說を否認したる最も簡にして明なるは『中阿』因品想經(仏六99.a)なり。其他『增阿』苦樂品(仏二83.b)增上品(仏二155.b)見るべし。

唯夫れ凡俗如何てか佛陀說法の理想のみを實行するを得んや。僧團中にすら佛制を守る能はざるものあり、況んや世上屑々の輩に於てをや。佛の對機說法や必ず姑息的救治の方便道なかるべからず。後世の五乘は未だなしとするも人天教即ち道德教なかる可らず。但し是れ其目的にあらず。此故に生天を說くや之を以て最終理想に達する楷梯となさゞるなし。

要之生天思想中には少くとも三意あり、一は比較的善處に生ぜしめんとする事。二は得道の楷梯たらしむること。三は世間道德の奬勵とせし事是れなり。世間道德の奬勵を含み、比較的善處に生ぜしめ、因りて以て得道の一楷梯たらしめしは、確かに佛陀教化の一面をなせるものとす。唯だそれ諸天諸神は古傳神話の材料に成り。其神格の崇拜は供犧の蠻風を伴ひ、加之婆羅門教の教權主義に着色せられ、他律的道義は自己の責任を感ずること少く、從て腐敗に陷るも神に媚びて其罪を免れんとし。是等諸神に附着せる有神教的形式主義と自利主義とは到底佛陀を滿足する能はざりしなり。

蓋し生天は輪廻の圈內にあり。從て不安定なり。若し此不安定を轉じて、輪廻以外に置き、佛教の涅槃に妙用を認めて之と結合せんには、此に淨土の思想を生ずるに至ること一見容易なるが如きも、羅馬は一日にして成るにあらず。其之を想化し彼を調和し、往生淨土の思想を生ずるには、更に幾層の階段を經て、民間信仰の熔爐に鍊られ、宗教神學の鐵臺に鑄られざる可からず。

以上は主として佛教天部は波羅門教に由來せしを述べたり。以下諸天諸神が一旦佛教教義中に包容せられし後、如何なる變化を來せしかを見ん。諸神は佛教に入りて其固有の性質及位置は甚だしく其趣旨を異にせり。(『佛美』9参照)其諸天の佛教化中特に著しき一例は帝釋天なり。帝釋は屢々出てて佛陀の教化を助く、現存美

術上にては出家入滅等重要なる場所には帝釋は執金剛として常に佛邊に侍せざるなし。此の如くして、梵天も帝釋も其上下の諸天も皆佛化を助くるの任命を帶びしめられ、佛は初轉法輪に已に是等諸天に人天の導師たることを宣言し。入涅槃時に是等諸天が來りて其葬儀を賑はせり。獨り諸天のみならず。毘留博叉王の眷屬たる龍王（ナーガ）の如きは佛鉢を献じ、目眞隣陀（ムチャリンダ）は如來をして雨難を免れしめ、アバラーラ蛇神は入滅前に聞法得道し、（『佛教』[illegible]）八部は常に經典に美術に佛教保護者の位置を取れり。從て古神話に於ける無常安穩の世界も頗る不安定の位置に墮り、和鳴諧調、天上莊嚴の一部たる可き鳥類までが、諸行無常の響きを傳へ、彼等諸天を戒しむるものあるに至る。（『正法念經』[illegible]）『增阿』等法品（[illegible]）の如きは苦行を否定し、止意攝心を以て梵天の生因となせり。蓋し諸天の佛教化を示して餘蘊なきものは『正法念經』生天の因なり。鬘持、象迹等の諸天に各數種を分ち、三歸、布施、持戒、稱佛、信心、慈悲、供養、讀誦、起立塔像、飲食沙門、を以て其の生因となし。或は橋梁を架し、清泉を鑿ち、施藥看病等の世善を擧げ。四王天には不殺。三十三天には不殺不盜。夜摩には不殺不盜不邪見等、漸次に十善の項目を增配せるが如き見るべし。

此の如く淨信慈悲三歸供養等が特に重視せられ、生天享樂の因と見らるゝに至りては、諸天は全く佛教化せられたるなり。從て惡道に墮するものも亦佛教的修善に反對のものとなる。之を摩拏法典に見るに諸天は固より最尊とせられ其生因は婆羅門僧侶的なりき。然るに今や諸天は最高の地位を與へられざるのみならず。往々厭離の念を生ぜしめられ、而して其行因は多くは佛教僧侶的となれり。但し佛教の行目中就中世善多し。生天の戒の種類を上くるうち悉く在家の戒にして、出家の戒ならざる如きは其適例なり。是れ生因は元と波羅門教に規定したる行因の痕迹なること秋毫疑を容れず。（『長阿』三聚經（[illegible]）参照）かくの如くにして因陀羅は金剛手菩薩となり閻摩は地藏の化身とせらるゝに至れり。但し天部は如何に佛教化するも、元來波羅門教的著色あるが故に、遂に之を取りて佛教の理想境とするを得ざりしなり。彼の『大集經』虛空藏菩薩品（[illegible]）に佛教々義に合し、如を離れず。如來許容の念天として、欲天にては兜率（一生補處菩薩所居）、色天にては淨居（不還）、無色天にては天中天となせるが如き見るべし。想ふに天部の佛教化と相前後して佛土の思想は起りしならん。佛土は章を改めて之を考察すべく、唯だ茲には天部の佛教化と共に、生因の變化と佛教的生天とを生ぜし過程を叙せん。即ち念佛生天と兜率上生と是れなり。蓋し往生淨土は他力念佛を以て其生因となす。他力往生の原形なる他力生天の思想はそも佛教々義の何れにありや。

第貳章　念佛生天

(壹)　念佛生天

先きに信行論に於いて、念佛と六念との關係を述べしが、今亦六念と生天思想との關係を考察すべし。『別譯雜阿』第九（辰五[illegible]）に須達が六念を修して無熱天に生ずといひ、同第八（辰五[illegible]）には釋摩男に對し、涅槃を求めんと欲せば六念を修すべしといふ。而して同經前段を見るに念佛念法念僧には各々「趣向涅槃」の文

あり。念戒念施念天には此文なし、但し『別譯雜阿』他所の文中、前五念に皆必趣涅槃の文あり（註一）。元來戒施は世出世に通ず。此故に施戒を以て涅槃の因となすは勿論なるも、同時に生天の因となせり。然らば六念中の念天は勿論生天の行因にして、施戒亦生天思想と連結あり。而して「施論戒論生天之論」は南北經典共に殆んど常套語と云ふも可なり。此故に彌勒並に毘婆尸が成道の時も、衆に對しては「施論戒論生天之論」を說くといふ。但し其說法の對者を見るに多くは長者波羅門等にして、出家沙門は極めて少きが如し。『增阿』聽法品（巻二三 680a）には波斯匿王優塡王に對し、同高幢品（巻二一 656a）には善覺長者の子那優羅に對し、等覺品（巻三 639a）には釋氏の五百女を其對機とせり。然るに六念は歸依三寶と施論戒論生天論なること又更に疑ふべからず。三歸は又佛敎より發したるものなるは言を要せず。唯だ念三寶以外の戒施天は佛敎以前に既にありし思想にして、『別譯雜阿』八（巻五 393b）には遮手釋と摩訶男とが、佛が四不壞信（三寶と戒）を說きたるや將た三不壞信（佛法僧）を說きたるやに就いて爭論せり。（『中阿』侵婆樂經（巻六 45）にも佛法衆戒を念ずれば証果を得といひ、又四不壞信と六念とは『長阿』衆集經（巻九 45-48）を參照すべし。）惟ふに『增阿』聲聞品に四大廣演の義を擧げて契經、律、阿毘曇、戒といふ。（巻一 33）最後の戒は六念中の戒なるが如し。『中阿』哺利多品持齊經には施を除きて五念となし、『增阿』八難品（巻三 639a）には四諦以外に、施、戒、天を說くは五諦にあらずやとの問答あり。是によりて六念中の後三は佛敎傍系の證となすべし。是れ先に生天の行因は多く世善なりといへるに合す。是に由りて之を觀れば、此等佛敎以外の行因が佛敎特有の三歸と結合し、しかも生天の因とせられ、同時に涅槃の道程たるに至れり。然るに佛は最勝のものなれば、又直にち念佛の功德餘の五念を要せずして生天をうるものとならざるべからず。果然『長阿』園尼沙經（巻九 39a）『增阿』善聚品（巻二一 17）同力品（巻二一 58）には念佛生天の義を表はし、『那先比丘經』には更に進んで他力念佛生天の義あり。且つ其女は龍樹の『十住毗婆沙論』易行品中の難易二道を想起せしむるものあり。曰く、

王又問那先、鄉曾沙門耳、人在世間、作惡至百歲、臨欲死時、念佛、死後者皆生天上、我不信是語、復言塞一生死即入泥洹中、我不信是也。那先問王、如人持小石置水上、石浮耶沒耶。王言其石沒。那先言、如今持百枚大石置船上、其船寧沒不。王言不沒。那先言船中百枚大石、因船故不得沒。人雖有本惡、一時念佛、用是不入泥洹中、便生天上、其小石沒者、如人作惡、不知佛經、死後便入泥洹。王言善哉善哉。

（『巴梨讀本』(OT)、念佛生天の文、巴梨漢譯同意、但し漢譯少しく布衍せり。且つ又此譬喩は淨土敎に於いて、常に他力往生を解する譬喩として用ゐらる。『易行品』求路衆船の譬、『景論』安樂淨土義』(T)等、又『往生要集』下末(82)には此の那先比丘經の文を引用せり。）

已に他力念佛生天の思想ありとすれば、天部に代ゆるに淨土を以てせば他力往生の思想を發展し得べし。

（貳）兜率上生

同じく生天なるも中に於て佛敎敎義に適應するもの、換言すれば比較的善處に生ぜしめて、姑息的救治の最上乘なるものは、兜率上生の思想なり。彌勒思想は實に原始佛敎に一轉機を與へぬ。但し彌勒信仰の漸く盛況を呈するに至りしは、蓋し佛滅を距る遙かに後代に屬す。

兜率天は先に云へるが如く、佛敎天部中來歷不明にして、夙に佛敎的天界なりき。從て兜率上生は他の生天思想と少しく異るものあり。蓋し釋尊は入滅し、高弟相次いで涅槃に入り、轉た夕陽落寞の感に打るゝの時、補處の彌勒は應て下天し次いで成佛すとの信仰は、又直ちに値佛聞法結緣の信仰に轉すべきは蓋し當然なり。由來兜率上生思想には餘の淨土往生思想と異り、求樂の志望は比較的少なし。兜率上生と往生淨土と

を比するに、兜率上生は多く原始佛教的なり。

抑も兜率上生は支那に在りては道安を以て嚆矢となすも、印度に於る起原や明かならず。先づ阿含中にありては彌勒に關説するもの少からず。然れども其殆んど全部は未來成佛時の記事のみ。固より其成佛時には兜率降生の模型を離れざるも、(仏三 33.b) 衆生が上生開法を希望するの記事は殆んどなきが如し。但し既に其供養あり。(『增阿』『等趣』四 仏一 8.b) 然らば兜率上生の思想も夙に既に存すべきが如し。但し小乘經典中、漢譯『生經』の如きは明に上生思想を表はし。(宿五 1.b) 帛法祖譯の涅槃經の如きは彌勒の説法と上生思想とを發はせり。(仏十 1.b) 法顯傳の記事によれば錫嵩に於いて當時、彌勒成佛經を秘々口傳せしを傳ふ。(敦六 9.a) 蓋し『阿含經』にては釋迦佛中心なるが故に、現身佛陀を距る比較的近し。此故に兜率上生の思想のなきは自然の數と謂ふべし。

繇つて思ふに從來阿育と同人と信ぜらるゝ天愛善見王の刻文は口を極めて慈悲と達磨との德を稱讃し、生天といひ、(岩面刻支 第六等) 來世の幸福といひ、(桂面刻文の第六第八等) 多く一般信仰の教義を説きて、稍世俗的に傾けるも、中に彌勒の名なし。但し刻文其物が當代佛教の全部を盡せるものにあらず (阿育王に關する傳説と刻文とは必しも一致せず『史考』[1]6 『小史』[1]6 參照)。彼の『脅婆須密所集論』序によれば、佛在世犍提國人、婆須密此の論を集成して後ち兜率に至り。彌勒に繼ぎて師主如來となる (師子月佛本生經參照)。彌妬路刀利は光焰如來、僧伽羅刹は柔仁佛となる云々の記事あり。是れ兜率上生者の始めなるが如きも、婆須密には已に數多の同名異人あり、此傳説に關しては其他幾多の傍難あるが如し。

要するに是等は已に未來佛彌勒と定まりし後、教界中の偉人を捉へ來りて、此の如き聖者は必ず未來佛たるべしとの信仰より兜率上生の思想と關連せしめ、次いて補處の菩薩となし、彌勒に繼ぐものとせしもの、如く、固より以て上生思想の起原となすをえず。要するに兜率上生の起原は不明なるも、彌勒に附帶せる思想は原始佛教と相距る遠からず。又原始佛教を傳ふる經典中に記載せられ。又更に原始佛教を發達せしむると少かりし錫嵩等南方佛教徒が其名を記せり。以上の諸事例を併せ考ふるに、彌勒思想の成立が明かに他の觀音文殊等の菩薩及び彌陀藥師等の諸佛以前のものなること秋毫疑を容れず。

惟ふに先づ彌勒の思想を生じ、更に兜率上生の思想となりしものならん。恐らく佛滅三百年の頃より遺物遺跡の崇拜に伴なひ、作善生天の思想と結び、次第に此種の信仰を皷吹し。『法顯傳』(敦六 [1]7) には陀歷國の彌勒像は夙に某羅漢が上天目睹の姿を移せりといひ、玄奘の紀行に上生思想を傳へたるは今又改めて喝々を要せず。西紀千八百八十年カンニングハム氏が佛陀伽耶より發掘せし漢文の斷片中に、上生祈願を記せるが如き、(『英譯西域記』I. 134 J. R. A. S. III. 532を引用せり) 又八世紀頃、南天烏茶國王より唐朝に宛てし書簡中、『華嚴經』書寫の功德によりて龍華會上の値佛を願求せるが如き (四十華嚴の終り 天六 [1]18) 道安以下支那に於ける彌勒の信者少からざりしに徵するに、紀元後三四世紀頃より無著宗 (名義集には印度佛教の中觀瑜伽を龍樹宗無著宗と云へり) と共に漸々其盛況を致せしものならん。

極樂往生と兜率上生とを比較せるものに、懷感『群疑論』中の十二勝劣。慈恩の十異 (『往生要集』上末 [1]5に引文あり)。迦才『淨土論』(下 [1]4) の勝劣十異難易七別。憬興『連義述文讃』(下 [1]5) の七對。其他天台『十疑論』の第七疑等、何れ

も兜率は劣等にして、且其行法を難行とせざるものなし。前田博士は兜率上生は上座部系にして淨土往生は大衆部系なりと云へり（『大史』226）。彌勒と阿彌陀佛との信仰を比較するに未在既成の區別あり。信仰亦自力他力の差異あり。恰かも波斯教と基督教との對立に類せり。由來兜率上生は餘の佛土往生に比して原始佛教的着色を離れざるものあり。或は諸種の大乘經典續出に對し、比較的佛教舊派の徒が是に拮抗せんとして、かゝる信仰を生ぜるものとも見らるべし。一言に彌勒の信仰と稱するも、其『阿含經』に於けるものと、無着宗に於けるものとを比するに、前後頗る其面影を異にし來れるものあり。諸種の『上生經』を比するに構想の變化や蓋し掩ふべからず。現に四十九院は我國の傳說なりと云ふ。（『無量壽』十一の八）果して然らば兜率上生思想の判明を致せるは往生淨土思想の後ならんか。

兎に角其思想成立の年代に就いては不明なるも、兜率上生思想は生天と往生淨土との兩岸に通ずる橋梁たるものあれば玆に之を辨ぜり。

第三章　涅槃と天

生天は元と方便策に過ぎず。一時的姑息的なる救濟は迂遠なり。兜率上生亦此不滿を充たすものにあらず。蓋、龍華三會は前途頗る遼遠なればなり。此の如くにして、三世諸佛は轉じて、十方佛となり。遂に諸佛の今現在成佛を信ずるに至れり。所謂十方諸佛土の信仰是れなり。往生の形式は此の如くにして始めて成立を告ぐ。されど此觀念に到達する徑路や、しかく容易ならざるものあり。若し天部に代ふるに兜率上生の思想を生ぜしが如く、佛教の理想境をして天部の如き形式となし、是によりて佛教教理と相調和するものなきか。惟ふに現身佛を以て法身佛となし、報身佛となしたる想化力は、永く生天を以て滿足すべきにあらず。淨土の思想は那邊よりか導き出されざるべからず。淨土はそも如何なる思想より發せしか。後世の佛徒が佛土を解せるを見るに、佛の入滅は涅槃の體得にありと見ざるものなきと共に、淨土を以て涅槃の具體化と說かざるもの殆んとなし。淨國土、護國土とは成佛して涅槃を體現し、由て以て佛土を構設するを意味し、「極樂界無爲涅槃界」とは同時に諸佛淨土に通ずるの語なり。涅槃と佛土とは密着不離の關係を有す。果して然らば『阿含經』に明かに「復不受後有」といへる涅槃が、如何にして淨土を發現するをうるか。玆に少しく涅槃の何物たるかを論せざるべからず。

由來涅槃の語は多くは譯せられず。中には涅槃無餘を主張するものあり。涅槃なる語原と佛教に於ける用語の意義とは自ら異る如く。又原始佛教と大乘佛教との間にも相違あり。佛教教理の發達變化は實に此涅槃の觀念を異にするより發せるものにして、其內容や極めて不定なり。シュラギントワイト氏は涅槃の實體や明かに規定すべきなしといひ（『西藏佛教』99）、リスデヒッヅ氏は曾て涅槃の語の譯し難きを述べ、消滅神聖の諸語皆適當ならず。かゝる含蓄多き用語を譯するは頗る危險なりとなし、遂に佛教徒の至高善Summum bonumと稱するの勝れるに如かずといひ、轉してマックスミュラー、チルダース、ビルスーフ等の諸氏が異說を上

けて、終りに涅槃の意義に關する諍論は極めて多くして、數頁の能く盡すべきにあらずといふ。（『佛教』111）

（Great Rel. of World 參照）（涅槃は靈魂の寂滅に非ず）。

暫く佛教古來の傳說に依るも、舊譯家は滅度と譯し、新譯家は圓寂と傳ふ。其他の譯語極めて多し（村上傳士）（『佛教原理論』132-34 參照）。而して其義譯は多くは巴梨經典の涅槃の形容語句に相當するもの少からず。想ふに涅槃の說明は消極的なれどもその內容や積極的なるものありしならん。吾人は數多の佛傳を執りて之を觀るに、次第に佛陀の人格によりて、涅槃を積極的のものとなすに至れるものあるを認めざるをえざるものあり。或一派の學者が佛教の涅槃を目して虛無論の如く見做し。死後亦空無に歸するが如く見たるもの未だ正鵠の見解となすをえず。（『現法』151-158 參照）固より佛陀の滅後百年、上座大衆二部の分派を見、而して兩派は佛身論に就きて見解を異にせり。暫く有部の教義に從へば、涅槃の有餘無餘を區別するに五蘊の有無を以てし。就中無餘涅槃を以て最上の理想とし、身心都滅、畢竟空寂の意義に解せり。されど其有部の教義も、元と斷常の二見を避くるにあれば、必しも之を虛無論と稱するをえず。蓋し佛が轉法輪の始めより中道主義を主張せられたるに見るも、此有無二見を離るゝは同時に佛教根本義ならざるべからず。『現身佛と法身佛』世尊死後有耶無耶の條下に列ねらたる十有餘經を參照するに、二邊四句を離れて中道を表はすに外ならず。要するに色身は五蘊假和合なるが故に常住にあらず。有我色身の如來は固より無なれども色身以外に何等の存在なしといふも誤りなりといふにあり。是豈般若の涅槃觀佛身觀の先蹤をなすものにあらずや。般若佛教は不可言の空を詮はさんか爲めに六百卷の多言を費やせしも、要は執着の偏見を破して、彼岸の實在を顯示するに外ならず。涅槃は過境的實在にして執着的には空無なりとは阿含諸經に已に業に道破する所なり。巴梨漢譯共に涅槃を形容するに安穩不死等の語を以てせり。寂滅爲樂は平靜安穩無爲大樂の意味ならざるべからず。唯たそれ佛は行の伴はざる見（ディッティ）を避けたると內證口にすべからざるとによりて多く否定的說相に依れるのみなるが如し。且つや後來法身佛を生じ、無量性德を具有すとせらるゝは、勿論佛陀追慕の切情と觀念哲學の想化とによるべしとするも、單に是にのみ其原因を歸せんとするは、所謂火なくして烟を生ぜるが如きのみ。支流を集め來りて遂に江河となる、しかも支流を集むるに至る所以の源流なかるべからず。試に吾人を驅りて當代の思想界中の人たらしめよ。思潮の豐富彼れが如く、新氣運の勃々たる彼れが如く、吠檀多のアヌヴァバ數論のカイヴァルヤに比して、灰身滅智、冷枯の終りを告ぐるを以て理想となしたる教義が、果たして當代を風靡するの勢力となりうるや。無餘といひ有餘といひ其他涅槃に種類を分ち、時には身體の有無によりて二涅槃を解せるも、同時に此世の般涅槃を語り。又死後の般涅槃を問答せるあり。未だ必しも內容の規定を見ず。又或は無餘涅槃を以て無上涅槃究竟涅槃といひ、又稱するに大般涅槃界の語を以てし、諸漏滅盡以上に更に涅槃の體得たる俱解脫を說ける、（七解脫及七識等）又天樹葉萎み華開くを以て四禪成就の阿羅漢果に比し、（『中阿含』『拘經』及五5）又涅槃を梵と關係せしめ涅槃即ち梵天なりといへるあり。（『典尊經』『三明經』辰四38 及五108）。由是觀之、積極的に何等か或物を考定せる事知るべし（ウパニシャッドの理想と佛教涅槃との關係及び佛教涅槃の理想は積極的に一定の最上界を目的とせるものにて佛徒か彼岸に幽邊の實在を信ぜし事等『現法』151-155『上印』138 等を參照すべし）。勿論佛陀自證の眞相、

其主觀の內面は明確に規定す可きなし。處々に涅槃の境界を記せるは內觀秘奧を傳ふるものにして、從つて二三の記事によりて一概に虛無論と見做すべきには非ず。涅槃の內容は不可測不可量、自ら人によりて異らざるをえず。蓋內觀思惟の奧底は文字言詮の能く顯はすべきにあらず。此故に婆羅門は阿那律の禪定を探る能はざりしといひ（『增阿』火滅品、及一29）、舍利弗所入の三昧、梵天目連其名字を知らずといへり（『增阿』六重品）（『同』十不善品、及三、39.a）。

佛陀の教義、之を一面より見れば直截簡明なりと雖も、後代佛教が非常なる發展を遂くべき體系は已に此に萌芽せるに見るも、蓋し佛陀內證の源泉は思ふに勝りて深長なるものあるが如し。涅槃空無に非ずとせば是に入りし佛陀は空無虛寂に終るべきにあらず。『長阿』の遊行經には入滅の如來に久住の可能を認め（及九、29.b）、『雜阿』三十九には佛身刀箭の傷害を受けずといひ、（辰四、31.b）佛陀の入涅槃を敘するや。四禪を經て滅想定に入り、下りて復た初禪に入り、初禪より四禪に入りて般涅槃すといふ。南北『涅槃經』俱に然り（S. B. E. XI-114）（法顯傳及十38.a）。是れ入滅の如來を諸天以上となせるなり。而して是れ獨り佛陀の入涅槃に於いて然るのみならず。舍利弗目連にありても亦同じ（及一26-28）。又佛と阿伽羅訶那との問答を見るに、四天王以上大梵に至るまて各所依あり。而して大梵所依の忍辱溫良は涅槃によるといひ（『中阿』阿迦羅訶那經及六32.a）、又先の『遊行經』と同源に出てたりと見らるべき『佛般泥洹經』（『出法祖錄』及十15.a）には一層之を具象化し、佛は威神力あるが故に明化無量、自ら化身をなし、其土の衣服を着、其の語言を用ゐ、(四)三界を遍觀するに涅槃最樂なりと。是れ佛が諸天となりて三界を廻り、その入涅槃は天上諸樂以上の最大安樂なるを意味せるなり。涅槃は大梵以上にして涅槃を天部に比況して其最上とせり。但し如上の文の如きは四禪四無色の諸禪觀を終へて、覺想心想なき境地に達せるものなれば、之を以て有界を去りて空無に歸したりと見るも、强ち不可能にあらざるも、若し此佛入滅最後の狀を寫せる一節が、巴梨涅槃經（S. B. E. XI. 114）の如き文意を以て原形なりとするも、而して原意は恐らく佛が入涅槃時の心狀態を寫せるものならんも、此經意を布演せる漢譯小乘『涅槃經』が漸次之を有象化せるに見れば、縱令原意は消極的とするも、其之を解するものは積極的に見たること明かにして、大乘『涅槃經』に至りては固よりいふを待たず。但し涅槃に方處を定むる如きは原始佛教に見ざる思想なり（シュラギレトワイト『四』『佛教』100 脚注參照）。

抑も涅槃は三界生死の輪轉以上に超脫せる無爲涅槃なれども、大樂安穩所とすれば、何物か或者を認めざるべからず。佛智の悟道に體得せし佛陀が平安なる五十餘年の說法を終へ、爲すべき事をなし終り、今や大般涅槃に入る。大明の西山に沒するや必ず殘暉を留む、歸依の熱情を表はす皐蹇波羅門の如きあり（『現法』115 參照）、入滅の悲嘆は到る所に世界の一大事件として甚大なる痛嘆を洩らせるあり。佛教美術中最も屢々繰り返さるるものは佛入滅の光景にして（『佛美』184）數多の入滅圖は大體に於いて一致し、（『全上』）有情非情を集めて世界の悲痛を表明せり。遺第は佛の涅槃を以て一陳の疾風曠野を過きて其影を留めざるが如く、露滴の穩かなる海に融け去りたるが如く、將又無限の空洞中に雲消霧散せしものとは想像せざりしならん。而して如上の涅槃と天部との關係を見るに、諸天の最上となせるが故に、若し滅の文字を以て之を表はさず。他の積極的の名稱を用ゐなば此に天部以上の或存在を意味するに至るべし。八十入滅の佛陀が如何にして法身常住の思

想に轉せしかは第一篇既に之を叙せり。茲には佛と天との關係を見ん。

若し涅槃を大樂安穩の境界とし、積極的に或る何物かを認めんとせば、彼等佛徒に在ては諸天の莊嚴を聯想するを以て寧ろ捷徑とせしならん。佛を以て泥中の蓮華、人中の師主（『莊嚴經』宙四45a）若くは大象（『中阿』『記象經』）と稱讚せるに見れば、佛を以て諸天以上となすは亦自然の數なり。果せる哉、佛を以て天中天と呼ぶは通用の語たり。蓋し轉法輪に諸天を驚動し（『四分律』三十二（列五8b）世高譯『轉法輪經』（辰六16b）同義淨譯（辰六16b））、入涅槃に諸天の悲嘆を記せるは南北畧々同意にして、（『長阿』遊行經。法顯法顯失譯の三本『涅槃經』並に南傳皆同意なり。）是れ佛陀一代の始終に於いて、諸天をして其聖證の使命を果さしめたるなり。（上「諸天の佛教」の項下參照）從つて佛の入滅を解するに、人天化緣の完成に見たるあり。（『遺教經』（辰十一14b））是れ驅て佛陀が諸天克服の義意を含めり。『佛般涅槃經』には須跋の語として「佛爲三界天中之天、神聖無量、至尊難變、開化導引、四十九年、仙聖梵釋、靡不稽首」といひ、（仏十一18b）『增阿』放牛品には外道は五通のみ佛徒は漏盡通を加えて六通ありといふ。（仏三41b）是れ佛は天中天なるが故に佛徒は外道以上なるを示せるなり。『增阿』聲聞品には卑座（輪王）天座（帝釋）梵座（梵王）佛座（四諦）を列ね、配するに須陀洹等を以てし、初三を欲色無色の三界となし、佛座は四神足を具して、諸天以上となせり。（仏一85）又同八難品には佛は知足、不亂、戒定慧等の八法及輪廻なきを以て八部衆に勝るといひ、（仏三7a）此他佛を諸天以上となせるは『增阿』火滅品（仏一29）同三寶品（仏一47）同馬王品（仏三25b）『長阿』衆集經（仏九41b）同梵動經（仏九76b）等皆然り。地獄と天と涅槃との對立は處々にあり。（『長阿』『三聚經』『增阿』六重品）『文殊師利問經』『雜問品』には二十四處として聲聞等を大梵以上となし、（列一23b）

『密嚴經』には佛は諸天を超過し、密嚴によりて住すといふ。『增阿』等趣四諦品には佛に事ふるものは金翅鳥も害する能はずといひ、（仏一81）『生經』中譬喩經第六には天像の頭も稱佛の徒は之を取り去るを得といふ。（和五65）佛は實に諸天以上の天なり。此故に『增阿』苦樂品には佛國境界の不可思議を述べて「如來身者爲大身、如來身不可造作、非諸天所及」（仏二5b）といひ、同じく『增阿』に「如來身者、清淨無穢、受諸天氣、如來身者、是天身」といへり。（仏二3b）抑も佛が獅子座に安置せらるるは天地の主が是に乘るとの印度古代の信仰に基きり。（スタイン「于闐」268）『太子瑞應本起經』には佛の威神は至尊至重にして、若し邊地に在住せば世界は傾動せんといへり。（辰十一97『異出菩薩本起經』辰十一15b同文）

果せるかな佛菩薩を天の一種とせるあり。

- 三種天
  - 世間天　諸天、國王、人中に居るも天福を享受す。
  - 生天　欲、色、無色の天部。
  - 淨天　聲聞緣覺煩惱を斷し、神通あるが故に。（『涅槃經』（仏一、65に據る）

- 四種天
  - 世間天（假號天）
    - 生天
    - 淨天
    - 同前
  - 義天　十住菩薩能く諸法を解するが故に。
  - 第一義天　佛。（淨影『大經疏』（『般若』151aに據る）。『涅槃經』（仏一78bに據る）及び『大論』（往一30aに據る）參照）

三種天
- 名天　天王天子是也。
- 生天　釋梵諸天是也。
- 淨天　佛辟支佛阿羅漢是也淨天中尊者是佛（『智論』）

又西藏に於ける始元佛（アーディブッド）の淨土は色究竟天となし。『木槿經』（不空譯）の如きは稍後期の出なるも、三賢名を稱する廿萬遍は耶摩に生じ、百萬遍は涅槃に趣向すといふ（『要集』下本29）が如き、涅槃と天との關係知るべし。抑も通力に天眼天耳を數へ、佛を天中天と稱するは極めて古し。佛菩薩を以て淨天義天中の一となすが如き固より偶然ならず。かくの如くにして、佛は天部に關聯し、天部以上を意味せると明かなり。

かく論じ來りて其思想變遷を考へ來れば涅槃を以て天の最上となし、之を形容し之を想像して、佛土を生じ、佛は涅槃を躰得して、佛土の主となり、佛土亦涅槃より表はれたりとなすことも一見容易なりしが如しと雖も、元來諸天を否定し盡さずして、しかも大に否認したりし原始佛教の教義にありては。しかく容易に涅槃界を以て具體的なる報土化土となすの構想を許さざるものあり。佛を稱して天中天とせしと、之を以て淨天とせしとは、其思想の內容に於て甚だしき逕庭の存するものあり。

轉じて佛土を見るに元と生天求樂と異るものあり。諸佛淨土に一貫したる往生思想の根本中心は、決して求樂を以て唯一の目標とはせず。一には見佛聞法のためにして、次には修行に就て濁惡世界の難修を避け、淸淨世界の易修を望めるなり。其諸樂を享受するが如きは抑も末なり。見佛聞法と修行證果とは如何なる往生の思想にも共通にして、多くの諸佛は釋迦佛を離れざるが如く、佛土は畢竟釋迦佛出現の世界に類似し、唯だ是れに種々の構想を加えたるのみ。佛の轉法輪は果してリス、テビッヅ氏（S.B.E. XI-140）のいへるが如く、正法國土の建設にありしや否やは不明なりとするも、國に二王なく天に二日なきが如く佛は此世に於ける最勝尊なりとして、世間解世間眼と尊び、天人師佛世尊と仰ぎ、法王醫王と稱せり。是等皆此世に於ける無上士調御丈夫の敬稱ならざるなし。然れども尙佛は此土出現の佛にして、（『增阿』15.a 同馬血天子品 15.b）魔界佛界を以て彼此の兩岸となせるあるも、（『增阿』上品 13 同馬血天子品 14.b）未だ他方佛土の構想を許さず。また世界が佛陀の因行によりて成れるものとは想到せざりき。法の佛は佛の法より顯はれ來りしが如く、即ち佛の世界は世界の佛なる思想より來る。古來大乘教徒が稱して一四天下若くは三千世界唯一佛か否かは、大小二乘鑑定の試金石なるが如くいひなせるは未だ必しも然らず。但し三千世界唯一佛は Loke eka Buddha upajati（『增阿』57.a 『長阿』64.b）（『中阿』四十七）十方諸佛世界の先驅をなせるは事實なり。蓋、佛教世界論の擴大は遂に無量恆沙の佛刹を想定するに至れり。此世界に現出したる釋尊は今亦冗說するの要なし。佛徒が佛滅後先づ想到せし過去及び未來佛出現の國土は如何。

第四章　佛土

(壹) 小乘經典に表はれたる佛土

過去佛の國土は大本經其他に各佛出現土の王城、父母、子、人壽、種姓、道樹、說法、弟子、等を擧げ、就

中、毘婆尸佛出現の國土に就ては、稍詳細なる叙述あり。又南傳本生序說中には夥多の過去佛土を列擧し、特にマンガラ佛土の如きは前生の誓願に由りて勝妙の土たるを記せり。彌勒出現の國土に就ては更に幾多の構想を加へて、阿含の諸處に散見せり。但し其模型は畢竟釋迦佛出現の土を出てず。經論異文の引照は今繁を避けて略す。彌勒出現の國土を以て釋迦佛出現の國土に比するに、地勢氣候の國土世間を始め、衆生と佛陀とが恰かも轉輪聖王の治世に際會して清淨善美頗る構想的となりしも、之を以つて極樂に比するに、其莊嚴引例（彌勒土は北州。極樂は多く第六天或は阿迦尼吒天に比せり）尙大なる相違あり。蓋し彌勒の出現は諸佛番々の出世に過ぎずして、唯だ其出世が釋迦佛の如く濁世に出てざるを異とするのみ。但し彌勒の好世淨土は例を北州に取りしが、北州は五欲に耽りて八難の一に數へらるゝも、彌勒出現の土は皆佛に歸依せり。

抑も佛敎世界構成の說明は、業感緣起、賴耶緣起、眞如緣起等の諸說ありと雖とも、業感緣起は賴耶眞如兩緣起の根元にして、且つ賴耶眞如の兩緣起、亦此の業感緣起を豫想せざるものなし。蓋し業感緣起は世界實相の說明にして、實行本位の原始佛敎は思索を主せる世界生成の說明を要とせざりき。後代支那に於ける實相敎系の天台佛敎は理論は高尙幽遠となりしも尙業感緣起を採用せり。蓋、實行の策勵には世苦の實相を知るにあれば、抽象的理論は必要とせざりしなり。今南北兩傳に於ける佛敎業感世界論を見るに大略其軌を一にす。且つや原始經典中に其說話の散見するに徵するに其構想蚤代に屬し、『倶舍』『婆娑』に至りて是を整頓組成せしもの丶如し。

而して此の彌勒出現の國土は『倶舍』（攷十30.b）に云へる人壽八萬歲の時代と同類の思想なり。彌勒の好世淨土は其背景として倶舍世間品（攷十三巳下）の四劫說を豫想せるが如く、倶舍にも亦「契經說云々」と曰へり。要するに彌勒出現の國土も此世界を離れず。畢竟世界の佛たるを免れず。但し其の轉輪王は政治と法治とを兼ねて佛に歸依し、佛は世界の佛たるも、釋尊に比して多少、佛の世界てふ思想に近し。但し八万歲以上は快樂多くして人、聞法を厭ふ。（增阿八難品參照）是の故に佛は八万歲より百歲に至る中間に於て出現するものなれば、彌勒は此世界に出現する諸佛中にては最も善美なる世界に成佛するものと謂ふべし。

『阿含經』當意にては三世諸佛の思想あるも、十方諸佛の思想なし。阿含經中他方佛土の思想は唯だ彼の奇光如來の說話のみ。是れ經部其他に唱ふる現在多方佛土ありとの思想に相應せり。但し其土の人民形體極大と稱するも、要するに釋迦佛出世の土と相距る遠からず。目連を一小蟲となせるは、彌勒鷄頭城成佛の說話中に存せる迦葉と同一の構想を出てず。且つや奇光如來は其土出現の佛にして尙未だ佛陀の世界としての思想を缺けり。但し此に注意すべきは、目連が神通によりて彼の佛土に至りえたる事是れなり。神通、瑜伽、禪定、三昧が佛敎思想上に有する趣旨は前篇に讓りて玆には槩說せざるべし。唯だ彼の奇光如來の說話が神通示現を以て其根本思想となし、神通上に他佛土を見たるの形式は、原始佛敎が他方淨土を生ずるに至る堤防開裂の一蟻穴たるを示すものとす。蓋し奇光如來經はその前後に獅子奮迅三昧等、諸種の三昧を列せるもの頗る大乘思想に近さを以て知るべし。ベンダル氏は內秘佛敎は外系佛敎なりといひ、リスデビッヅ氏亦

秘密主義は非佛敎的なりといへり。元來瑜伽には神秘主義と汎神論とを伴ひ、遙かに但多羅（タントラ）文學と相呼應し、印度敎はバタンヂャリによりて之を攝取し、佛敎は無著の頃に全く瑜伽阿闍梨耶（ヨーガーチャーリヤ）佛敎と化せり、然るに神秘主義の影響は獨り大乘敎のみならず。小乘敎も亦其感染を受けしは緬甸錫嵩の佛敎に見て明かなり。又彼の聖者得通は元と佛在世の信仰にして、現存經典と美術との徵證によるに其起原頗る早し。但し彼の所謂密乘佛敎となりては、一層之を誇張し、往々是によりて佛敎中に異流を混じ、朱紫簡別に苦しむもの少からず。所謂奇光如來の說話が果たして原始他方佛說なるや否や疑ふべしとするも（「起原說」の項下參照）『阿含經』の思想が他方佛土を生ずるに至りし源泉を說明するものとして、頗る興味あるを覺ゆるなり。されど未だ淨土思想と相距る遠し。蓋し古神話及び佛敎天部の思想は下に辨ずべきか如く、佛土構成の主要なる材料なりしに相違なく、淨土の好相を說くや、輪王國土若くは天部に類例を求めたりしが如き最も睹易き證左なり。但し材料の蒐集のみによりて未だ諸佛淨土の構想を許さず。世界の佛を轉じて佛の世界たらしめんには、勿論此間に於て神秘主義と觀念哲學との說明によりて、更に敎理的根據を得ざるべからず。

（貳）淨土

諸佛の淨土は即ち佛徒の理想國なり。其中には哲學と藝術とか宗敎と相抱合せり。其想化は縱令當代思想の色彩を免れざるも、若し經典作者の意志によらば、三世了達（沢三 15b）の神通者が迷宮の奧底、神秘の寶藏を開いて、万人に示せる超絕界の光景なり。抑も佛（ブッド）刹（クシェートラ）或は佛（ブッド）界（ダーツ）に種々あり。二土、三土、四土、五土乃至佛身の種類に從つて其佛土も亦自ら相違あり。（『三藏法數』卷一 43, 46, 72, 99, 104）但し此等の分類は決して固定的にあらず。人によりて所見を異にし、且つ其分類の成りしは固より後代なるも、佛身佛土思想の變化は、諸經典に於て說意を異にし、從つて斯かる分類を出だすべき意義あるに由る。但し此等分類中就中普通なるは三身三土なり。而して其最も原始的なるは應身佛（化身を含まざる）即現身佛所居の國土なり。抑も佛土の分類者は應土を以て最下とし、報土、法身土を以て是に勝るものとなすも、經典作者の意志は必しもしからず。或一佛につきて其の佛土を述べんとするや、滿腔の熱情をこめて理想の境界此に在りとの思想を以て書せざるもの稀なり。是によりて過去七佛の國土、一層構想的なる彌勒出現の國土は、皆是れ分類上よりは應土とせらるゝも、當代若しくは該經の筆者は多くは佛土なるものは、斯くの如く解釋せしなり。現身佛陀を思想の中樞となせるものは、佛土を觀じて歷史的なる此娑婆世界に於て之を認めざるをえざりしなり。是れより一層藝術を假り、神話を交へ、莊嚴報土となせしは更に一段の構想を加へしものにて、法身土の如きは全く理體の換名に過ぎず。要するに是等の分類は敎義上の解釋を出てず。

惟ふに佛土は佛身論に伴ふ。現身佛陀出現の世界すら佛傳の記載にては多く構想的となれり。況んや史實を離れたる過未佛出現の世界に於てをや。現に『增阿』護心品（沢一 16b）には、一般に如來の出現によりて衆生增壽の文あり。斯の如くにして構想は時間の隔壁を借りて現身佛陀以外に佛陀の存在を認め、同じく三世諸佛中にありても、彌勒世界は決して現在釋迦佛土の如きにはあらず。豎に佛陀の出現を考ふると共に、一方佛敎世

界論の擴大は幾多の三千界を考定するに至り。此世界には釋迦佛のみなるも、他界に他佛あるべきを想像するに至り。茲に三世十方諸佛の思想を生じ、世界に出現すべき佛陀は佛陀所現の世界となり。其の始め現法證得の自力佛教は墓を越えて其救濟を說くに至れり。若し應身土中、釋迦佛出現の國土を以て歷史的佛土と稱し、構想的なる應身土は之に次げるものと見、一增想化して報土を生じ、他面之に平行して涅槃の理體に土名を附し、幾分具象的に把住せるものを法身土とせば、佛土思想變遷の大略を示すものと見るを得べし。

次に淨土構成の材料に就き、天部と淨土との關係を述べん。暫く文證を阿含經中に取りて（例せは長阿及九10 5以下中阿及五107）已下並に四州經等）之を無量壽經大小兩經に比するに、其行樹欄楯鳥類（[梵]小經第三章第四章地十二、72,b）池溝園林（[梵]第十六章地八 8,a）講堂階道（第十八章地八21,b）風吹散華（第二十章第二十三章）還到本國（地八18）待立左右（[梵]第三十四章地八23,a）邊地胎生（第四十一章地八26,b）飛行諸國（第三十章地八25,b）其他四氣和順、不寒不熱、無衆惱患（魏譯不寒不熱常和常適）河中寶船、無數天女（第十九章）飲食自然の寶器（第十九章地八27,b）自然化生（第二十七章地八29,a）等は皆天部中に是に適應する經文あり。獨り阿彌陀佛の樂有世界のみならず、諸佛淨土に就ても亦然り。特に『正法念經』觀天品の如き、其の豐富なる構想は諸佛の淨土に異らず。勿論此等の經典特に『長阿』の最後品は後世の附加なるが如きも、是等悉くは必しも後期の思想のみにあらず。抑も吠陀時代の耶摩、富羅那時代の毘瑟紐の世界、其他諸神界の構想は多く是れに類するものあり。天部が婆羅門の諸神を移し來りし如く、其構想亦多く諸神界に類するものあり。マハーバーラタ中の毘瑟紐の天界なるヴイクンタの叙述の如き見るべし。是に由て知る、淨土の莊嚴其の構想の材料を北洲（松本博士淨土論參照）若しくは天部の思想、遡りては神話より取りたることを。蓋し豐富なる印度文學にありては淨土構成の材料中、其物質的の方面に於ては敢て原材に窮するが如きことなし。而して若し淨土思想を以て阿育王後紀元前後迄の間に成立せるものとすれば、婆羅門の神話、富羅那文學の神界は皆悉く其材料たるをうべし。抑も印度並に錫嵩に行はれし樓觀欄楯塔池の構造を見るに天界、淨土の莊嚴に類せり。材料は此の如く具備せるが故に佛教經典に於ける現在若くは將成の淨土は一々此に數ひ難く、『法華經』受記品の如きは富樓那等の諸弟子の淨土をも想像せり。（及一27,b）然れども此等有形美の材料のみによりて淨土は構成せらるゝものにあらず。淨土思想の根本は實に佛教教義を以て中心核實とせり。抑も阿含中には淨土思想なし。先つ淨土に其匹を求めんか、天部北州輪王の思想なるべし。然るに此等と淨土とを比較するに根本的相違あり。彼に在りては享くる所の快樂に厭忌を生せしめんが爲めにして、此にありては快樂を享受してしかも之に染着せざらしむるも、未だ淨土を厭離せしひるを聞かず。彼の大善見王經に於ける輪王國土及ひ頂生王の說話（及五63,a）の如き其莊嚴は五欲の具たるに過ぎず。享樂と行道とは兩立せず。無常遷流少欲知足の敎訓ならざるなし。享樂の中、佛法を愛樂するの義なし。故に其形式は類するも內面の意味に於て甚しく相違あり。其他天部の記事にありても是と同意なり。前きに述ぶるが如し。暫く『長阿』『第四分世起經』、恐らく其等の布演ならんと推せらるゝ『正法念處經』の如きも、前者は三災品に於いて、後者は身念處品に於いて、前來所述の勝妙天界は一時に苦界と化し、若くは破壞し去るの思想を示せるは、譬へば宮殿樓閣壯大なるパノラマが一時に暗中に沒し去るが如し。即

ち知る、勝妙の樂土は半ば前世の善業に酬いたる好果なるも、足下に既に轉生の苦ありて又直ちに怖畏すべきものなることを。彼の天部が出家を發願するが如き全く此れに基ゐす。（『中阿』梵志品 及五85-93）然るに淨土にありては其快樂を享受するも、しかも足下三惡に墮するの恐れなし。是れ兩者の間に存する根本的の差異なり。果して然らば天部思想を如何に變形せば能く此の如くなるべきか。

抑も生天と云ひ、墮獄といふ。是れ業によりての轉生なり。即ち生あれば必ず死あるは業感論の結論なり。然るに淨土は生ありて再び死なきなり。業感論は如何に變ぜられしか。抑も十二緣起に從へば、現在の、識、名、色、六處、觸、受、即身心を生ぜるは過去の無明と行とに因り。未來の生、老、病、死、の果は身心上の罪業、即現在の愛、取、有による。須らく無明と行と愛と取と有との生ぜざるべき身心に變ぜざるべからず。加之、根と識とは境によりて變ず。此故に對境亦染着を生ずるものにては不可なり。此に於てか其身は三十二相黃金色となし、六通具足男女の區別なく、食はずして飽き、嗅かずして香ふ。一言にして言はゞ欲情に驅られざるにあり。而して外境を述ぶるや、羅網も行樹も諸鳥も園林も皆念佛念法念僧の音をなし、七菩提分八聖道の響きならざるなし。先きに諸鳥が諸行無常の響きをなして諸天を戒勗せしめたるものは、淨土の衆生にありては之を樂聞す（以上『無量壽經』による）。知るべし、淨土は諸天の莊嚴に佛教的意義を附せしものなることを。顧みて原始佛教の佛土は佛と輪王との對立を免れず。然るに『增阿』高幢品、『中阿』七寶經には輪王の七寶に對して、佛の七覺を擧げ、『長阿』轉輪王修行經には長壽、妙貌、安穩、快樂、財寶豐饒に對して戒品、四禪、四等、四諦を擧げ、『中阿』轉輪經亦同意にして、佛にありては輪王の色相莊嚴を代表するに教法を以てせり。想ふに佛徒の理想よりすれば、輪王は佛に劣る（『增阿』高幢品 及一586）。此故に淨土には輪王なし。從て色相莊嚴と教法との對立を破却し、唯一佛土によりて兩者の融合を企てしもの、如し。但し此等思想の裏面には佛教の世俗化あるを忘るべからず。篇末「佛教の異道化」見るべし。而して佛陀の神話化は百福莊嚴の身相となりしが、其解釋の一は佛教の因果論なりき。

因果論は即ち業感論なり。若夫れ更に業力の源頭に遡りて之を心所造に歸せんか。一歩にして唯心論、觀念論たるをうべし。業感は普通輪廻と其聯想を絶つ能はざるも、其理論は佛陀にも適用せらる（『中阿』天經 及五 100-101 參照）。『增阿』力品には二千五百の寶蓋莊嚴を以て夙因の所致となし。佛の成道に本生の智德積集を語り、三祇百劫の修行を述ぶるが如きは、大小經典共通の思想にして、修因の普通ならざるものあるが故に受くる所の果報亦三界の第一とせらる。若し業感といふは慣用上不適當なりとすれば則ち因果論と言ふべく、實に佛身佛土の圓滿妙莊嚴は此因果論に基けり（『智度論』參照 往一、58a）。恐るべき業力は同時に賴るべきものとなれり。業力不思議なり。諸天の天界に生るも業力なれば、諸天其物も業力なり、乃至宇宙も業力の所發ならざるなく、森々羅々たる萬象、營々蠢々たる動物、天地一として業力の變動ならざるものあるとなし。業力は自然法、道德法總ての法則にして、元來、業力を破りて其外に脫出せし涅槃の教義も、遂に業力の法則に從て、佛身佛土を生せざるをゝざりき。是れ一見奇なるが如きも、若し佛身佛土の常存を認めんには、佛教の教義上當に取らざるべからざ

りし徑路なりき。但し佛教にありては佛は世間より生し、佛世間を作るとはいはず。（『文殊師利問經』列一98及、造物主論の破列一99。）多くは淨土を攝取し、淨め、或は成就すといふ、（『對照』138、諸經參照）古來佛教家の用語も淨佛國土成就衆生といふ。成就衆生はそも自他力佛教に通ず。其の他力救濟の淨土は、佛身論にては法身佛の信仰と共に、其願力回向の廣大を認め、衆生應化の佛身成立の後にあり。

佛身は涅槃の躰得、淨土はその具象化なりといふも、多くの淨土は此間の思想に明晰を缺くものあり。（下『極樂淨土』參照）蓋し因緣の成果たる淨土が輪廻超脱なりとはそも根本的に矛盾を含めり。故に『觀音授記經』の如きは彌陀に入滅ありといへり。若し論理の推歩を進むれば、佛土は遂に破壞の期なかるべからず。然れども經典は哲學書にあらずして、傳道書なるが故に常に論理思想を超越せり。但し唯心論、觀念論、現象即實在論は佛教哲學の骨子にして、就中國土の淨穢を衆生機見の相違に歸するもの最も多し。（『維摩經』『佛國品』黃七15已下、『寶積經』『修慈分』天十一99。）（『成唯識論』四、『智相應』黑往十等）賴耶緣起、眞如緣起は此間の思想に新名目を附せしのみ。三土四土十方土乃至無數の佛土は是によりて其存在の根據をえたり。淨土思想につきては尙論すべきもの少からず。諸佛淨土の比較、淨土界內界外（『大論』三十八16『論註』上10『安樂集』上15『辨疑論』一、88等參照）、淨土の方所等是れなり。但し佛土思想變遷の大要は、略ぼ以上に辨じたれば茲には畧す。佛土構成の旨趣と其の觀念論因果論上の說明とは維摩經佛國品見るべし。但し是れ教理的說明に過ぎずして、同品にては梵王の語を假りて、自在天宮の如しといひ、諸天寶器の引例に於て示すが如く、天部思想の換骨脫體たるを示し、而して佛土は遂に釋迦出現土を根底とせるが故に此土の穢惡に對する說明を添附せり。其他諸佛淨土を說ける經典は多く此一項を刪除せず。

古來淨土敎家の佛身若くは淨土實在の證明をなすや。中には西洋哲學に於ける、本體論的、目的論的、或は道德論的證明に類するものなきに非ざるも、多くは因果論と觀念論との證明を外にしては、聖敎量と高僧の實驗とを出づるものなし（例せば王日休『淨土文』『愛』、5以下『要集』上末8『極樂證據章』下等參照）。蓋し因果論と觀念論とは實に佛敎敎學の骨子にして、『無量壽經』の如きも淨土構成の一因を行業果報不可思議に歸せり（地八8以下）。蓋し莊嚴佛土に本願所成を語るが如き、實に這般の思想より脫化し來れるものとす。

第五章　極樂淨土

淨土の思想は天部より起り。是れを佛敎の敎義に調和せるものなることは前既に云へり。無量壽經原譯諸本中其の證文と見做しうべきもの僅に一二に止らず。（『梵』第十九章如他化自在天『唐』『宋』『全之』『漢』『吳』『魏』は猶如第六天）（『梵』第四十章『唐』『全上』）（第二十章等）或は化他自在天に或は第六天に又或は色無色一切諸天に對比せり。特に彌勒の語を假りて、他化自在の諸天と極樂の諸人と差別なしといひ、就中梵本第二十三章（諸漢譯閑）には香粉、華、寶、幢、幡、器、女、皆「天の」なる形容語を附せり。抑も胎生者便秘ありといふは人界を去ること遠らず。蓋し天部は人界の材料に基き極樂は畢竟天界のそれを出てず、樹木鳥類樓閣池構等皆然り。彼の屢々諸經に反覆せらるゝ曼陀羅華（マーンダーラヴァ）は因陀羅宮殿五寶樹の一なり（『梵』『阿』109）。彼の土衆生も人（マヌシャ）たるを免れず。淨土も時に天を以て稱せらるゝとあり。（小經唐譯遊天

住の文『梵阿』一〇〇参照）『梵本』第十二章十九光佛中の最後は超勝護世釋羅梵羅摩淨居大自在一切天光といふ。遂に天部思想より全々離るゝをえず。然れども淨土は佛徒の理想鄉たり。佛教は天部も輪廻の中にありとして之を貶黜せるなり。故に無量壽經にても淨土を以て諸天部以上となし、佛の語を假りて衆生西方を分別して天界に及ぼすとなすは智慧微淺の故なりとし（第四章）。更に慈氏の語を假りて「此等衆生虛妄分別、不求佛刹、何免輪廻」といふ。淨土若し輪廻以外に超然たらば何物か天部思想に異る點なかる可らず。法藏の發心によれば極樂は諸國土中の最上なるものを求めたり（第四章第八頌）。諸佛土の最上國土を撰擇せるなり（第五章）。其決心の强さや若し「此の如き種々廣大なる天賦を有する國を有せずんば我は喜んで地獄にゆかん」といふ（第九章第二頌）。然れども「かくの如き幸福の世界を成じ無比の幸福の發に達したる後、念と慧と行とに離れて欲愛の欲樂に耽らば我は世師とならず」といふ（第九章第四頌）。茲に彌陀の慈光を認めうべく、次に淨土構成の理由を述ぶるや、佛教教義の眞髓を表はし來る。曰く「覺者法主となりて生類を生死より解脫せしめん」といひ、又「一切有情の救主たる覺者たらんが爲めなり」といふ（第四章第四頌第五頌）。諸天は自己の快樂のために天界に至り、佛は他の快樂の爲めに淨土を構ふるなり。其動機に於て已に諸天と異る。而して其快樂なるものを撿するに『小經』にては「但受諸樂、故名極樂」といひ。『大經』にては樂無限の故に極樂といふ（第十八章及第二十四章）。然るに其快樂は國性的にあらずして精神的なり。前に天部との相違に於て述べたるが如く、百味飯食は食はざるに自ら飽足し、諸鳥は佛の化作 Nimita にして、其鳥は法音を宣流せしめんとして變化せる所なりといひ（『小經』第六七章）。獨り諸鳥が法音を喧するのみならず。非情の山河樹林、皆五根五力七菩提分八聖道分の響きをなし。或は無常寂靜無我の聲をなす。（第十八、十九章『小經』第六七章）特に八功德水の音に佛教教義を含めたること詳細なり。梵本第十九章見るべし。「魏」「唐」「宋」亦同意なり。彼の『十疑論』（第六疑）に彼土の衆生如何にして不退をうるやに就き、水鳥樹林の說法を以てせるが如き、淨土は單に受樂のみの天部と異ること知るべし。此の故に彼土の衆生無着無欲、進退世染を離れ、自性寂滅なるを說いて頗る詳密なるものあり。從つて其快樂や禪定の快味を以てせり（第三十七受樂無染願及得深禪定の文）『唐譯』には比丘の滅盡定をえたるが如しといふ。既に極樂の快樂を以て禪定の快味に比す。惟ふに四禪中正念にして、安樂 Sukha に住するの階級あり（『中阿』八五五b）。小乘論部にては第三靜慮樂受相應、又名けて極樂地と曰ふ。彼此全く無關係にはあらざるべし。希臘羅馬の Insulae Fortunatae 園、ヒペルボリオスの樂土、若くは之をコーランの天國が酒と美人と金銀財寶の物質的感性的なるに比し（『東方聖書』九 180, 216, 120）又之をプラトーの理想鄉が氣候溫和、色彩佳麗の藝術的なるに較し、又去つて支那に於ける列子の華胥國、乃至基督教の天國等に況するに、道德的に宗教的に將た又藝術趣味に於いて、其間自ら差異あるを認めうべし。但し西方淨土の思想は南方佛教になく、獨り北方佛教の特色なるは北方人の感性的なるに基因すとの說あり（Nirvana of the northern Buddhists (R. A. S.)。一考すべし。

次に極樂と涅槃との關係に及ばざるべからず。淨土は涅槃界を具象的に顯はしたるものなりとは多くの註釋家比々皆然り（村上博士『原理』四二頁下參照）。西人の北方佛教に指を染むるもの亦涅槃と極樂との聯結あるを見たり。經

には「國如泥洹而無等雙」といひ（漢）其他全經の說意多く極樂を以て涅槃安穩處と見たり。但し上文「魏譯」の國如泥洹に相當する梵文にては「道場は有爲界の最上ならん、涅槃界の樂は無等ならん。而も我は之を無益として說くべし」（第四章第八頁）といふ。涅槃無益の語は譯本になき文意なるも、淨土の成立を見ば勢ひ斯くいはざる可らず。梵本第十一章には阿彌陀佛を以て過去佛なりや現在佛なりやとの問答あり。（「魏」「唐」「宋」同、「漢」「宋」文略）是れ佛身有爲の思想を含めり。淨土を以て涅槃其物と同一視するに、尙躊躇の形跡ありしは、涅槃の次位となすの文に見て明かなり。（「漢」地八3.b「呉」地八30.a）（「魏」地八21.b）これまた淨土は天部思想に關聯ありとして、先に涅槃と天部との關係を論じたる所以なり。蓋し原始佛敎に於て涅槃界に次げるものは天部にして、大乘佛敎に於て涅槃界に次げるものは淨土なりと見るをうべければなり。抑も造作と因緣とを以て成れるものは、必ず有爲生滅の免る可らざるは諸行無常の根本法印なり。現に淨土の快樂を叙するに當り、彼等は合奏をなしたりき（Kuruṇḍi sma）とて過去時稱を用ゐたり。又聲聞無數の願成就文（「魏」譯）には初會の語あり。是れ說法に始終を認めたるなり。又『平等覺經』『觀音授記經』等に彌陀入滅觀音補處を認めたり（地八10.b）。淨土豈に此有爲壞滅を免れんや。彌陀の因願に基く果成なるが故に必ず四相の變化を脫するをえず。後の淨土敎家殆んど淨土を以て涅槃と同一視し、時に魏譯の「無衰無變建立常然」の語によりて無爲の淨土となすも、經典作者の原意見る能はざるが如し。（「魏」地八20.a「所修佛國、恢廓廣大、超勝殊妙、建立常念、無衰無變」「漢」「地八9.b」「自然之無爲」。然るに「梵本」及他譯にさる文なし」對照」108已下參照）次に往生を見るに未だ必しも然らざるが如し。

生を見るに蓮華中に化生すといふは彼の天部の化生と同じく、其疑あるものは胎生の厄に逢ふ（第四章）。而し

て此說法の時に他方世界の無數の衆生往生をえたりといふ（第三十章）。衆生往生し終れば三十二大人相を具足し、靜慮神通に熟達し、力と根と忍を具足し、無邊の功德を有す（第三十五章、第三十八章に、彼土菩薩の德を擧げたり）。かくの如きの功德を具し終るや、是等諸有情は次いて、妙音如來となり、他の世界に生ずといふ（第四十五章）。蓋し慧心の所謂「往生極樂爲花報、證大菩提爲果報」の文は經典の原意に基くものと謂ふべし（『要集』上末33）。往生と成佛との同異は後の淨土門に於て議論あるも、『無量壽經』にては此邊の義意明ならず。蓋し此經典は阿彌陀佛の功績の威大なるを稱讃するにあれば、衆生が往生して成佛に至る徑路を說くを要せず。又一佛が既に成佛したる徑路あれば衆生亦此同一道を踏むべきが故に茲に之を言ふの要なかりしなり。更に往生せる諸菩薩を見るに三十二相、六通自在、衣食宮殿、所須凡て嚴淨なりと云ふ。佛陀は神話化せられ、次に菩薩も亦神話化せられ、佛陀と共に同一相を具するに至る。佛と菩薩とは固より區別を存するも、本願文の內容を見るに少くとも具象的の方面に於ては、一度向上せられたる佛陀の諸德相は、遂に又彼の土に生ずる衆生にも許さるるに至れり。

以上は『無量壽經』を中心となし、其の主要なる思想を見たりしが、更に極樂の全體より見れば菩提樹ありといひ（第二十一、二十四頁）六通といひ（第五、第十、第四十六頁）加之觀音勢至の二菩薩あり。阿彌陀佛は常に彼土にありて說法すといふ。漢呉譯の『大經』『觀音授記經』幷に『普賢菩薩經』中の阿彌陀佛土は其構想應身土を距ること遠からず。『增阿』莫畏品（沙二）には須陀洹を成ずるを不退轉と名つく必す道果を得といふ。然るに『觀經』中品往生者には

往生華開後須陀洹をゑ又阿羅漢を成ずといふ。不退轉往生の原意亦知るべきに非ずや。是に由りて之を觀れば形式上にては上に表示せる過去佛出現の國土に異らず。抑も亦釋迦出現の國土を以て其模型に取ゲしや明かなり。唯だ世界の佛は佛の世界となりしが故に、輪王若くは國王なく、宛然佛陀は其世界の君主の如き位置にあり。要するに模型は釋迦佛出現の土に基き、之に神話的構想を施し、貫くに佛教教理を以てし、天部以上の存在として、涅槃の大安樂を具象化せるのみ。

翻つて惟ふに諸佛各淨土あり、先つ『般若經』（洪一 [illegible]等）『涅槃經』（法顯譯益九 5, 13, 36, 南本益七 9, 19, 29, 八 18 北本益五 8, 6, 18 六、18, 佛國淨品）等には釋迦佛出現の此土を以て其莊嚴殆んと淨土と同構想を用ひ、多くは例を阿彌陀佛の極樂淨土に取れり。其他『文殊師利嚴淨經』中の文殊の淨土。『阿閦佛國經』の阿閦佛土。『藥師本願經』の藥師の淨土。『華嚴經』には蓮花藏世界あり（天七 15-17 九 15, 16）『大乘密嚴經』には密嚴土あり。其他諸佛諸菩薩の淨土をとりて之を極樂に比するに、唯だ女人二乘の有無等四五の異點を存するのみ。而かも其異點も常に確定せず。例せば『如來智印經』には極樂に二乘なしといひ、三經諸譯『文殊師利佛土嚴淨經』『同性經』『往生論』等には女人二乘あるが如し。但し諸佛淨土大略同一模型に成り、輪廓は釋迦佛土にとりて之を想化せるのみ。而して諸佛等しく淨土を有するも、時に阿彌陀佛の淨土は其莊嚴の完全を以て殆んど他佛の標準たり。『梵本大經』第七章に八十一百俱胝尼由他の諸土よりも尙八十一倍殊勝成滿の國土と稱し、『平等覺經』に無量清淨佛國は諸土中の雄國、諸土中の珍寶、乃至極長、衆傑、廣大自然の無爲、最快甚樂（地八 9a）と讃するが如き、阿彌陀佛正明經典は旦らく措き、今他經に就きて略して之を表示すべし。『般若經』、『涅槃經』、『理論經』中の阿彌陀佛（イ）の全部。（ロの一二三。ホの一二三參照）『菩薩瓔珞經』、『維摩經』、『大集經』等に於いて阿彌陀佛の淨土を比況とせるは上に既に擧げたれば　茲には餘他の經典のみを列擧すべし。譯者其他に就きては附錄「表」を參照すべし。（阿彌陀佛に對する値行に參照せんが爲めに併せて諸行をも列ぬ）

『寶積經』『發勝志樂會	東西方勝妙莊嚴土如西方極樂	（地 六 3.b）	
同　阿閦世王子會	阿閦世王成佛時如西方無量壽國	（地 六 24-25）	
『太子和休經』	文殊作佛如阿彌陀佛	（地十二 2.b）	
『文殊師利佛土嚴淨經』	文殊淨土嚴淨如極樂	（地十 8.b 11b.）	
『文殊授記會』	同　上	（地二 94.a-95.b）	
『大方等大集經』	香味於北方華香世成佛時如阿彌陀佛土	（玄二 10.b）	
『菩薩瓔珞經』	西方衆智自在王佛土等如阿彌陀佛國	（玄八 (2)）	
『菩薩念佛三昧經』『不空見本事品』	聞普快樂如西方安樂世界	（玄八 (2)）	
『同　觀三昧相品』	自然尊慈念大牟尼一念摩頂猶如阿彌陀佛	（玄八 60.a）	
『同　同　』			
『寶星陀羅尼』（波羅頗密多譯）	同　上	（成 六 64.b）	
『大灌頂神咒經』		（茨 四　）	
『藥師如來本願功德經』	七寶所成如極樂	（徐 五 55）	
『七佛本願功德經』	同　上	（宙 三 3.a）	
『悲華經』	蓮華世界猶如西方極樂	（宙 三 53.b）	
『悲芬陀利』	同　上		

『大乘同性經』	當說過世界微塵數現在阿彌陀如來佛刹	(宇 二 4.b)
『陀羅尼大乘經』	同　上	(宇 二 14.b)
『大乘密嚴經』	密嚴土如極樂淨土	(寶 八 33.a)
『不空羂索神變真言』		(四十二 10.a)
『孔雀經經』		(寶 十 57.a)

以上に列擧せるものは阿彌陀佛の極樂に比況せるもののみ。更に除佛淨土と共に類例とせらるるもの尙四五あり。是によりて知る、阿彌陀佛並に極樂は紀元後三世紀（年譯代）以前より既に各時代の經典製作者が理想の淨土となせしことを。以上は單に極樂を比例に取りし諸文をのみ擧げたるも、是れに讚嘆淨土の經文を列せんか、實に多數なるものあり。古來因識の諸師が「諸經所說多在彌陀」の語ある蓋し經ひざるなり。（『往生論』の『註』二）次ぎに經典の讚嘆として往生安樂國見阿彌陀佛を以てせる諸經文を列擧すべし。但し『法華經』と『華嚴經』とは前に既に述べたれば（(八)上の「經典中の阿彌陀佛」の(一)(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)。(二)の(四)(七)参照）茲には其れ以外の經名を列ぶべし。

『般舟三昧經』	若行若住憶此法門願當往彼極樂國	(宝 九 24.a, 32a)
『如來智印經』	同　上	(宝 一 34.a)
『大寶積經』	學此法門見阿彌陀佛	(地 一 32.a)
『阿惟越致遮經』	讚說此經至安樂國	(寶 三 68)
他宗譯二經（淨土宗譯及智顗譯）	同　上	(寶三44,b,67.a)
『大子刹護經』	聞說此經信受奉持願生阿彌陀佛國	(地十二 1.b)
	又聞護持諸佛法陀羅尼諸菩薩願生安樂國	(宝 十 39.b)
『思惟菩薩法』	願佛往生	(寶 六 32)
『不空羂索心咒王經』	受持此咒生阿彌陀佛極樂世界	(密十三 7,10)
『不空羂索神變真言』	修大悲觀音生彼國由受念持生彼國	(四十一 39,85.b)
『寶積經』	由修觀又由觀世音十種心往生	(地五 45,52.a)
『一切法功德莊嚴王經』	聞此經典發願往彼生彼國	(密 八 73)
『帝王菩薩陀羅尼經』	聞神咒生極樂	(四 十 12.b)
『毘陀羅尼經』	聞此咒一百遍生彼國	(密 八 77)
『大悲分正法經』	聽受修行此法生彼國	(宝 九 78.b)
『一切佛陀羅尼經』	持此咒生彼國	(四十二 71.73)
『十一面觀音神咒經』	持此咒生國	(密十一 21.a)
『十一面神咒心經』	同　上	(密 五 21.b)
『佛頂尊勝陀羅尼經』	聞此陀羅尼生極樂	(密 五 62.a)
『諸佛菩薩加護陀羅尼廣大成就經』	聞其名號	(密 八 43.a)
『菩薩受戒經』	發菩提心	(別 二 105)
『菩薩內戒經』	修三昧	(別 一 96)
『十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經』	淨　信	(四 十 50.b)
『金剛壽命陀羅尼經』	觀佛像	(四 十 26-7)
『大乘莊嚴寶王經』	彼佛經念觀音名	
『大方等陀羅尼經』	由陀羅尼力	
『陀羅尼集經』	作印誦經持咒念佛	(四 四 37.b)

『佛頂最勝陀羅尼經』　師　咒　（成五 60.a）
『千手千眼觀音廣大圓滿無礙……陀羅尼』　供養專稱名號專念彌陀佛　同名一心信樂持師　（同（成十 32, 34.b）
『稱揚諸佛功德經』　師此陀羅尼生極樂　（貴四 64.a）
『佛頂最勝陀羅尼經』（雜譯）　持此明王生彼國　（成 五 58.b）
『隨求陀羅尼經』（不空譯）　持此明王出彼國　（閩 九 77）
『一髻尊陀羅尼經』　同　上　（閩十二 71.a）
『無垢淨光大陀羅尼經』　由供養造像觀想等生彼土　（徐 五 41.b）
『阿唎多陀羅尼經』　聞此經見阿閦阿彌陀　（閩 十 37.b）
『寶網經』　由堪忍生彼國　（貴 四 84.a）
『諸法本無經』　持　咒　（宇 二 30）
『如來方便善巧咒經』　以此善根見阿彌陀　（成 八 37）
『藥師瑠璃光七佛本願經』　由供養生彼國　（徐 五 55）
『月上女經』　聞名生彼土　（貴 八 27.b）
『大法鼓陀羅尼經』　持　明　（宙 九 67.a）
『證揚稱讚多羅菩薩一百八名經』　佛住極樂說財寶災禍吉祥安樂　（成十三 62.a）
『大吉祥天女十二名號經』　持眞言往生　（閩十四 38.a）
『不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光眞言經』　以少福慧方便　（閩 七 72.a）
『無量壽如來修觀行供養儀軌』　所願成就彌陀現土　（閩 五 43）
『觀世音菩薩秘密神咒經』　（成 十 37.a）
『妙吉祥平等秘密最上觀門大教王經』　（成四69.b,72.a）

茲に彼國、彼土、生彼、等といふは悉く極樂を指し、此他往生の得益を明せるもの少からず。以上の場合に在りては諸經所讃多在彌陀は反つて彌陀所讃多在諸經といひ得べく、西晉法護以下唐宋の譯經に至るまで、多くの經典は其の經の利益功德を擧ぐるに常に見阿彌陀佛、若くは往生極樂を以てせり。（『說林』三13『出生菩提心經』附註參照）特に『菩薩內戒經』の如きは願生極樂を菩薩三願の一とせり。『起信論』には修行信心分中に、『究竟一乘寶性論』には論偈結末廻向段に出づ。而して諸經論常に此類頗る多し。惟ふに阿彌陀佛は諸佛中殊に勝れて其信仰の盛んなりしこと、及び其淨土は諸佛刹中、特に多數教徒が所求の標的たりしを知るべし。

篇外　佛教の俗化

南北同傳の沙彌十戒の文によれば、踏舞歌吟の遊觀を禁じ、瓔珞香料の裝飾を制し、一に止意節念に專らにして、道は戲樂に求むべからざりしが、（『中阿』『天品經』及五 100.a）淨土の菩薩が享くる快樂の諸具を見るに、食ふに甘露あり、嗅ぐに妙香あり、聞くに妙樂あり、飾るに華鬘、塗油、香料、妙服、傘蓋、幢幡あり。加之宮殿、樓觀、美盡し善盡し、常に七千の天女に由りて其身邊に圍繞恭敬せられて遊戲逍遙すといふ。（『無量壽經』『梵』第十九章）蓋し佛教の俗化や、其由來久し、大小二乘の佛教分裂と在家得道の信仰とは同時に佛教の俗化と絕緣にあらず。前二者は上に既に辨じたれば此に少しく佛教の俗化を記す可し。『增阿』八難品には佛自ら二十五年外道中にありて學すといひ、（及三 4）『阿含經』中に三（四）部舊典と稱せるは吠陀經なるが如く、（及九 76a, 76b, 78, 81n, 91b.）又諸

種の外道説を併説するもの少なからず。（『增阿』結禁品及三30, 31『長阿』散陀那經及九39, 40同梵動經及九32, 73, 同種德經及九76. 梵網六十二見經及十66等）『增阿』結禁品（及三25, 26）には佛教外道と説法戒教一類無異となして一より十までの法數を列ね、四諦十念も此中に列擧せるあり。佛陀斷惑の六行觀は婆羅門の行法によれりと傳ふ。佛弟子中には當代異道の回心せるもの多く、佛陀の教義も亦全く新説にあらず。（エーベル『印度文學史』139, 138, 290. の過松木博士『宗教と哲學』『佛陀說法』等參照）其他戒條制規も亦多く婆羅門教傳來のもの少なからず。（『印考』第四部第二章參照）小乘二十部中外道との親緣を示すもの蓋し一二に止まらず。就中化他部の如きは佛經の闕處を莊嚴するに韋陀論等を以てし、（『大史』33『部執異論』を引けり）九十六種の外道中一派は佛教と異らず、故に常に九十五種と稱するは古來の通説なり。佛教教團漸く隆盛を致すや、外道 Tuthiyā は利養の爲めに佛教中に籍を移せるあり。（『長阿』遊行經及九15b四種沙門中後二及び『普見毘婆婆』寒八ff.7.『譯本』113）アイラ Aira 王は外道より來りて佛教に入り、（『印考』636.）次に阿育王は自ら諸神に寵せらるるピヤダスと稱し、其諸宗派に對する寛容の精神は敕文（第五第十一等）に見て明かなり。而して其傳導師中には希臘人曇無德あり。傳導師派遣の結果、波斯と交渉を開きては火教と接觸し、（『小史』201. 參照）佛教は阿育王代より漸く俗化の度を進めぬ。彼敕文に表はれたる佛教は達磨に從ひ、慈善を行じ、生天の果報に大なる價値を認めたるに過ぎず。生天思想の如きは蓋し當代一般信者の理想なりしが如し。迦膩色迦王代に至るや『婆娑論』を始め其以後の有部の著書中、往々外道に類似の説をなせるは、佛學者中夙に之を道破せるあり。（『大史』111.『112. 參照）馬鳴の『莊嚴論』『佛所行讚』の材料の如き外道書と併行の説を傳ふるもの鮮からず。特に龍樹提婆無着の諸大論師の著書の中には異道の説を傳ふるもの甚だ多し。『般若燈論』（巻一124）『大論』（往二82）『十住毘婆娑論』（巻八73）『中論』（巻一57.）『十二門論』（來十123）『中論』（巻一23）『外道小乘涅槃論』（巻五58-59.）『瑜伽論』（六の八）『顯揚論』（九の八）『十六異論』等見る可し。大自在天論師、那羅延論師、女人眷屬論師、伊賒那論師等、汎神説あり、有神論あり、『經律異相』外道仙人部には外道を賤しめながら其交渉を漏せる諸經を引用せるあり。（雨四39以下）今一々盡すべきにあらず。抑も阿育王以後傳導地の擴大と共に中亞に於て諸種の信仰を混し、（エーベル『印度文明史』40）紀元三世紀の初葉に彼の摩尼が波斯基督兩教を佛説中に混して別に一派を存せるが如き、以て當代内外混化の跡を傳ふるものとす。蓋し現存美術上よりの徵證によるに佛教の俗化は更に疑ふべからず。（アジャンタ精舍の紀元前後のものと五世紀になりし第十二號精舍並にバルフト、サンチ等の比較『印考』637, 638, 641, 650. 參照）阿育迦膩色迦兩王が佛教以外の異道をも寛容し、育王の子ヂャローカ亦溼婆崇拜者にして同時に佛寺を建立し、（『印考』487.）迦膩色迦の祖父たるハヂシカは佛教と共に火教を信ぜり。（『印考』488）降つて超日戒日諸王も亦此風を襲へり。（Gutt. II, 127, 131）獨り中北印度のみならず、南印北印亦内外昵近の事實を傳ふ。（『印考』500以下）尼波羅地方の佛教は殊に夙に外道に親近し、（『印考』506以下）由來大乘教と印度教とは彼此の交渉少なからず。（『印考』620以下）餘風は遠く錫蘭に及べり。（『印考』657, 673）迦膩色迦以後の佛教の俗化に關しては『印考』第六部第四章第五章見る可し。

哲く『西域記』に見るも、白衣外道は頗る佛教に類似し、其天師は如來に擬し、律行亦僧法に同ぜるあり。（致七13b）其他北方尼波羅（致七30b）幷に同書十二漕矩吒（ヂャーダ）國の條下等參照すべし。加之、馬鳴、龍樹、摩呾里制吒、提婆を始め印度諸論師多く外道より佛教に轉宗し、支那高僧傳によるに西來の三藏亦外道より入佛せるもの頗る

多し。（參阿蘭若、維摩詰、佛陀耶舍、求那跋陀羅、等の傳參照）僧徹は數論は長じ、（致二、128）闍陀論は西域地方にも傳播し、（致二、）大乘と波羅門と類似の思想を傳ふるあり。（致二、128）羅什の妻帶の如きは蓋し俗化の頂點に達せるものとす。若しそれ思想の內面を辿りて佛敎と外道との類似を求めんか、天地開闢、世界建立、即ち須彌四州三界六道の如き、四大極微の如き、身心の說明たる生理心理の如き、因果論、輪廻論の如き、三身說、涅槃論の如き、頗る相類似せるものあり。此故に諸論師の著述中には往々外道說を以て小乘以上の深義として、之を破斥せるものあり。（例せば『佛性論』卷二、3の如き）起信論の對治邪執の如き當代敎學の頗る眞如緣起論に近かりしを知るべし。（『起信論義記』下末、83以下）『楞伽阿跋多羅經』『佛語心品』には如來藏と外道の我、及佛敎涅槃と外道のそれとの別を記せるが如き亦然り。（黃六、9、巳下）小乘敎徒は大乘敎徒を目するに外道を以てせるあり。或は大乘調達作となすあり。（『大史』、338）『大日經』には賴耶外道識外道の名稱ありといふ。（『大史』、338）又『大慈恩寺三藏法師傳』には戒日王の時、小乘敎徒が空華外道（大乘）と迦波羅外道（涅槃派の一流）と特ならずと見たるあり。（『馬鳴菩薩傳』、108）大乘即菩薩佛敎と外道とは頗る親近せるものあり。淨影『大經疏』（『全書』五、6）に經の對告衆中聲聞を先きにし菩薩を後にするに就き、四由を以て說明せり、曰く菩薩は化他の爲めには佛制に從はず、威儀形相亦異るあり。且つ其數に於いて多數にして隨緣攝化の爲めには時に漏を示す。菩薩を先にせんか人多く驚怪するが故にと。又彼の『十住毘婆娑論』五種難相の第一に曰く、外道の相善菩薩の法を亂ると。又『涅槃經』名字功德品に曰く、方等（大乘）經は猶ほ甘露の如し、消すれば藥、消せざれば毒となると。維什の母は什を戒めて曰く方等は深廣なれども汝の身に益なし（致二、）と。蓋し大乘敎の融通主義は往々にして「空亂塡の菩薩」（般若經）たらずんば「破れ圓頓」の行者たるの傾向を免れず。見るべし、菩薩佛敎が俗化の跡を示して餘蘊なきを。若し『法華經』（致一、）「外現聲聞法內秘菩薩行」の文と、『文殊問經』『囑累品』（列二、17, 18）「沙門及白衣、所說無有異、爾時我此法、與俗法無差別」の文と、『大論』（往、92b以下）四種悉檀の義と、『西域記』に錄せる世友尊者が大乘の修行者なりとの傳と、前田博士によれば化地部が外道說を取りしといふは恐らく大乘經ならんといふに併せ考ふるに、無着世親より淸辨時代に於ける俗化は固より、（『上印』、268以下、『印考』、627以下）原始佛敎より大乘敎の變化に際し佛敎の異道化は蓋し掩ふべからず。同時に外道の佛敎化あるは勿論。佛敎の特色は又自ら綿々として絕えざるものありき。繁を厭ひて畧す。（『大史』、326巳、不參照）抑も大乘佛敎の興起と共に、波羅門敎も亦新氣運に向ひ、富羅那文學と共に民間信仰の勃興を見るに至れり。蓋し俗化は當代印度敎學一般の風潮なりき（『上印』第四部第一章參照）リス、デビッヅ氏が滅後の佛敎敎團に關して、阿輸迦王の保護は有名無實の信者を增加し、內外の區別を混じ、延いて俗界の迷信、社會の弊習を喚起し來れりといへるもの（Great Rel. of the World, 1901, 佛敎の項下參照）移して當代佛敎の大勢を叙せるの語と見るを得べし。

第四篇　罪惡

第一章　苦界（苦集二諦）

印度教學の他に異るもの一にして足らずと雖も、就中其世界觀人世觀が、多くは多苦觀厭世觀なること特に其異色と謂ふべし。順世外道の如きは例外の一變調に過ぎず。之を先にしては吠檀多の迷妄論あり。之を後にして佛教の苦界觀あり。蓋し輪廻の觀念は獨り印度に限らざるも、就中其組織の整頓せる、其包括の廣大なる、世界唯一にして、佛教の宗教的動機は亦實に輪廻轉生の考察に基けり。今印度の教學を以て西洋哲學に比するに、先づ希臘哲學は自然主義にして、其至高善を現實の生活に求めたり。理想を現實に求むるものは此人生に於て圓滿完全の境地に到達しうべしとなす。プラトーンの人生觀は厭世の傾向を生ぜしが、其背景にはピサゴラス以來の宿生說輪廻說を胚胎し、ピサゴラスの輪廻說は印度思想に負ふ所多しと傳へらる。次いて中世紀に入りて哲學倫理は基督教の從僕となるや。漸く厭世の傾向を表はしたるも、世界は至善なる神が創作せるものとの信仰は、印度に於けるが如き迷妄觀を生ずるに至らざりき。彼のアンセルムス及トーマスは中世紀に於ける樂天說の代表者にして、近代の文藝復興は再び元との希臘主義に變じ。デカルト、マルブランシユ、ライプニッツ、皆樂觀論者にして、ヘーゲル、シュライエルマッヘルは、共に悲觀論者に非ず。然るにショーペンハウエルは汎意論に基きて萬有を盲目的意志の發現となし、極端なる厭世哲學を組織せり。而して彼の思想や、彼の自白するが如く吠檀多の教義に基けり。之を要するに樂觀論者は印度教學中の異例にして、悲觀論者は西洋思想の例外と概稱するをうべし。此故に印度宗教中の精華たる佛教も亦其人生觀は多苦觀なりき。佛陀所說の四諦の教義中、其前半苦集二諦は人世世界の實相を說けるものにして、滅は其理想、道は理想に達する手段なり。抑も諦（サトヤ）は冷水煖火變ずることあるも、未た曾て變ずることなき、（遺教經長十、二十一）實相眞諦の義なり。而して苦諦は世相を說き、集諦は世相に因て來る根本を指す。罪惡論は此苦集二諦の觀察をなすにあり。

佛教は思想開發の結果、小大を分ち、又等しく大乘中に於ても權實性相を分つに至り。多く形而上的理論に走せ、其當初單純なりし術語も次第に其意義を布衍し、從つて四諦の如きも種々の意義に解せらるるに至れり。天臺に所謂四教の四諦の如き是れなり。（藏通別圓は阿含、般若、華嚴、法華、の諸經を代表す）されど實行的には苦集は遂に苦集なり。無生無作の四諦の如き唯だ止觀の力によりて此苦集の關門を打破せんとするにあるのみ。理論は高尙となり詳密となるも、四諦は畢竟四諦にして唯だ意義の附し方を異にせるのみ。淨土教に在りても、彼の極樂の水鳥樹林に四諦の法音を觀ずるは勿論。其厭離穢土は苦集二諦、欣求淨土は滅道二諦の變態と見るをうべし。苦集二諦の觀察は主として現實の說明なるも、理想は現實によりて判明に彩色せらる。特に他力往生の教義には罪惡を感ずること一層適切なるものありて存す。若し原始佛教が後の大乘家のいふが如く、有相差

別の教義なりとすれば、『無量壽經』の教義も亦確かに有相差別にして、其濁惡世界を觀ずるや、極樂勝妙の莊嚴を無相と見ざりしが如く、一現實の罪惡を無相とは看過せざりき。彼の『無量壽經』『觀經』の如きは、一面深痛なる罪惡觀の豫想に成立したるものとす。先づ順序として原始的經論中の苦集二諦の說明を見ん。

諸行無常は三法印の一にして、經典の到る所に反覆せられ、佛陀が四門遊觀に解脫の道を希求するに至りしも畢竟此無常觀に基く。無常は變化にして世界の進化も無常により、一身の立身も無常による、極端にいへば涅槃に至るも亦無常によらざるべからず。何となれば生滅より涅槃に至るは變化にして、即ち無常により て無常以上に出づるにあり。從つて嫌惡すべきにあらざるが如きも、しかも解脫の教義にありては、此の世に望みを絶つものなれば、此無常は決して樂天的には解せられざりき。世界は已に無常なるが故に、此世に生存するは恰かも定相なき影を追ふに異ならず。先づ人に四苦あり。世に四相あり。世界は生住異滅の變轉あるが如く、人には生老病死の四を免るべからず。生あるや必ず老あり病あり、從て死あり、世界は火宅の如し、人は頭燃の如し、何れの處にか安穩淸冷の地あらんや。更に此の如き四苦に支配せらるる此身を觀ずるに、不淨充滿又極めて薄弱なり。然るに衆生之を知らずして、此の生活に着し、樂しむべきを樂まず。樂むべからざるに樂しみ。從つて恐怖を生じ愁憂を起す。其心身の不淨にして無常。不可樂にして畢竟無主なる所謂四倒の迷情を敍述すること至れり盡せり（『中阿』『念身經』及五1-13『中阿』『苦經』及六82等）。人生の苦相を說くに生老病死の四苦の外に又他の四苦あり。愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛の諸苦是れなり。四苦八苦の迷界已に悲しむべきが上に、世間恐るべきもの數多し。水火の難あり、王賊刀杖の難あり、伽鎖刑罰の難あり、加之、鬼神羅刹の難あり。『觀音經』『護國經』の七災難の如きは、皆原始的經論にあり。而してかゝる恐怖は單に現世のみならず。未來三世に渡りて、長夜の生死は吾人を馳り、無限の苦痛を受けしむ。苦の本際を知らざりしが爲めに、長夜生死の輪轉あり。（及一62）其間馬となり象となり、或は耳を截られ足を斷たれ、流す所の血は恒河四大海水の水よりも多く、父母兄弟姉妹宗親智識を喪ひて流す所の血涙亦此の如く、其母の乳を飲みし事も亦復此の如し（『雜阿』三十三辰三5）。大地一切の草木を切りて、籌となすとも、輪轉生死の父母の數を盡すをえず。過去既に然り、而して未來亦此の如し。大石山ありて百年一拂、石山遂に盡くるも劫猶竟へず（及三62）。人界と天界とは尙少樂少閑ありと雖ども、死の關門は必ず通過せざるべからず、死は到る所に繩を張りて吾人を待ち、水中に潛むも空中に入るも山奥に隱るも死は必ず彼等を捕ふ（『法句經』『藏』六94-5『雜阿』三辰五18.a）。其死するや肉身は九相を現じ、更に前生の業によりて、五趣或は六趣の生を受く、（及六44）就中地獄餓鬼畜生に至りては、其苦いふべからず。即ち地獄に入りては、「拷掠無數受苦酸酷、愁憂苦惱不可稱說」餓鬼畜生亦復此の如く、受厄窮困不可稱說なりといふ（『增阿』『四十八』及三62『四泥梨經』等）。

惡道に關しては增阿（及三、1-2, 及三、52.a 及三16)5中阿（及五71-3及五73及七61-2）十八泥梨經（世高譯）四泥梨經（東晉曇無蘭譯）大樓炭經（辰一68）正法念經（卷二、1）立世阿毘曇論（秋一、1）俱舍論（牧十10. 21-5）經律異相（雨四88-95）等を見るに其初めは一定の形式なきものが漸次に整頓せらるゝを見る。依て思ふに惡道の思想も反面より淨土思想の成起を受けたるものならん。現に諸天思想と對說せらるゝあり（及三37.b）特に諸佛の本願に無三惡趣を主とせるが如き見るべし。

又彼の八難は經によりて少異ありと雖も、此世の惡緣多きを觀たるにあり。此の如くにして生も苦なり、死も苦なり。獨り安穩處は死の又死なる涅槃あるのみ。人生畢竟苦充の世界のみ。

次に然らば此禍惡の世界は如何にして生じたるか。是れ正しく種々惡德を作るによる。而して其惡德の種類は經典によりて異る、今二三を表示すれば。

身邪、盜、疑、（『增阿』高盛品）。欲瞋痴慳、（全不品）。欲、恚、痴、利養、（全摩訶品）、（『中阿』因品念所經）。諛諂、姦邪、惡口、嫉妬、無反覆、（『增阿』邪聚品）。一强顏、二耐辱、三貪心、四慳著、五健忘、六邪思、七隱匿、八無返復、九念不捨離、（『增阿』生居品）。殺生、盜他物、婬佚、妄語、兩舌、麤言、鬪亂、彼此嫉妬、恚怒、邪見、（『增阿』不善品十）。捨戒、不淨、殺生、盜、殘食、妄語、群黨、惡口、孤疑恐懼、（同、牧牛品）。斷俗、殺、盜、婬、妄、貪、恚、嫉惱、（『中阿』利多品）

此に擧げたるものは固より一端に過ぎず。而して是等は一定の分類法に從つて別ちたるものにあらず。其人其時に應じて、適切なる惡德の種類を數へたるもの多し。而して比較的分類の整頓せるものは、五障（欲貪、瞋恚、睡眠、調戲、疑惑（辰三55））、五上分結（色愛、無色愛、掉、慢、無明）、五下分結（貪、瞋、身見、戒取、疑）、七結（貪欲、瞋恚、見、疑、有愛、無明、慢）等あるも、就中大數を上げたるものは二十一結（瞋、恚、害、睡眠、調戲、疑、怒、忌、惱、嫉、慳、無愧、無恥、如、悔、慢、妬、悔、上慢、貪（『增阿』利養品及一23a））其他百八煩惱等なり。

要するに此等惡德は吾人を驅りて流轉せしめ、又修道を妨ぐるものにして、痛に譬へ繩に比し毒と稱し、專心其繫縛を脫せんとせり。原始佛敎にありては如何にして、事實上之を超脫するをうるかが主要の問題にして、彼の人性の善惡を判ずる如きは主とする所にあらず。蓋し道行を主とするものにありては、固より當然の事とす。

抑も宗敎に於ける罪惡は、痛切なる實感に基くもの多し、罪惡を事實と認めざらんには、轉迷開悟も亦事實とならず。從つて宗敎の存在を必要とせず。此故に苟くも宗敎が活力ある場合には常に其罪惡觀は深刻にして又强烈なるものあり、而して原始佛敎は正しく是れなり。善惡の標準を論じ、性の善惡を辨ずるが如きは、論部以下、所謂鍊磨思辯の義に外ならず。佛敎罪惡論に於て、特に注意すべきは其の分類の極めて複雜なる事是れなり。是れ一は佛敎が數論と同じく分類的傾向に出てしは勿論なりと雖も、又他面如何に深刻に罪惡を感じたるかを見るをうべし。而して又罪惡觀の活き活きたるものあるは論藏にあらずして、實に經藏にあり。但し其整頓組織は論藏を待たざるべからず。次に論部に於ける罪惡の分類を見るに、『集異門足論』（三分法によれるも五、四分法によれるもの六、五分法四、七分法一等。）『舍利弗阿毘曇論』『發智論』（結類、秋五二以下）等に惡德の分類あり。特に『舍利弗阿毘曇』最も精細なり。其非門分煩惱品（秋三一87）には、一の數を以て箇々に擧げたる集、即ち煩惱は實に二百七十餘種に達す。中には重複せるもの少からざれども、亦以て惡德を數ふるの多きを知るべきなり。而して次に三分法によれるもの四十二種。四分法によれるもの十六種。五分法によれるもの二十種。六分法によれるもの十一種。七分法によれるもの十三種。八分法によれるもの四種。九分法によれるもの四種。十分法によれるもの八種。十一分法によれるもの一種。二十分法によれるもの二種。二十一分法によれるもの一種。三十分法によれるもの一種。三十六分法によれるもの一種。四十分法によれるもの一種。六十二分法によれ

るもの一種を擧げたり。

此等諸惡の分合によりて更に八十隨眠となし、見惑八十八使思惑八十一品を數ふ。『正法念經』の如きは「一人一日の中に八億四千の念あり、念々の爲す所皆是三塗の業なり」といふ。乃至八萬四千の塵勞といふ。八億四千、八萬四千の如きは分類と稱するを得ず。寧ろ罪惡の如何に多きかを示せしに過ぎず。但し以上に列ねたるものは『正法念經』を除きて、他は皆有部の教義を傳へしものならん。『發智論』は勿論『集異門足論』等各卷の後題に一切有部の字を記せるに見て明かなり。

有部の教義に從へば宇宙萬有を分類するに五位七十五法を以てせり。此中大煩惱地法に無明、放逸、怠、不信、悋、悼あり。大不善地法に無慚無愧あり。小煩惱地法に忿、覆、慳、嫉、惱、害、恨、諂、誑、惱あり。五位は概說すれば物(色)心(心心所)二元と是より生ずる關係、(不相應)及是等を超越せるもの(無爲)とにより て、組織分類を施こせるにあり。有部は有象的に萬物を考察し、法體の各箇に其恒有を認むるが故に、心所法中の惡德亦其の體、恒有なりとなす。而して善法の分類少き割合に惡德の分類多きは特に注意すべし。

唯識に至りて百法とせしも、惡德の分類は多く有部と異るなし。抑も佛教經論に於ける教理の發展は佛身の向上を來たし。佛位は凡夫が容易に上るをえざるに至る。最初佛陀は五比丘と共に一阿羅漢にして、『阿含經』の經意によれば佛の證したる五分法身と、舍利弗の證したる五分法身とは共に同一の成道にあり。其間甚だしき間隔はなかりき。然るに大乘に至るや階位を細分し、(『本業瓔珞經』)從て其各階位に於て斷ずべき、若くは伏すべき惑にも種々の區別をなし、同一の貪にても、種々に其所屬によりて內容に淺深を生ぜり。是に於てか見思の惑は一層細分せられ、又無明は更に根本的に見做さるゝに至れり。無明につきては章を改めて論ぜん。されど吾人は其の形而上的無明を外にするも煩悶と懊惱とは日常生活の怨敵なり。罪惡の實感は必ずしも吾人に直接交涉なき無明に推及せずとも、原始佛教の意味其儘にて足れり。否形而上的に根本無明を考察し、其三細の過程、阿黎耶識との關係の如きは、微細なる思考力に待つもの多くして、時に或は眞如と無明と兩者相關の原理は、反つて兩者の區別を沒するものあり。要するに普通罪業の觀念を深からしむるは、固よりかゝる形而上的思辯に由ることなきにあらざるべきも、必ずしも之を要とせずして可なり。事實有るが如き此苦惡充滿の世界を見るを以て足れり。此故に理論を主とせず、實行的信仰を主とせる『無量壽經』にありては、五惡五痛五燒にて足る。五惡段は此意味に於て厭離穢土の好教訓にして、此經典の反面をなし、抑も亦極樂勝妙の功德を明了にする素地なり。

無量壽經には貪等三毒と殺盜婬妄及飲酒の五惡と、五惡によりての現當兩世の治罰たる五痛と五燒とを敍し、頗る剴切の文字を使用して、巧みに苦因苦相を明かし、此間に一經の目的たる往生淨土を勸めたり。

若し夫れ畏仰と信賴とを宗教の二要素とせば、『無量壽經』は苦界と其反面とを巧に點綴せるものと謂ふべし。若し此の五惡段の一節が原本にありしならんには、リスデビッヅ氏をして「愼けなる經典」てふ評語をなさしめざりしならん。但し無量壽經の三毒五惡は原始經典中到る所にあり。彼の『中阿』苦陰經の如きは三毒

を叙し、（特に苦陰經下及六ぢ）殆んど文句も亦此の經に類似し、しかも此經典よりも委し。其他『培阿』證三寶品（ハ三）等見るべし。但し阿含諸經と無量壽經五惡段とを比するに、罪惡の內容は異ならざるも、其所求と所歸とは大に相違あり。五惡段は「漢」「吳」「魏」三本にありて他本になし。各本共通にして同時に當經に於ける、修道の惑と見るべきは疑と痴とにあり。但しこは「信行論」に述べたれば茲には略す。

支那といはず日本といはず。他力淨土の教義には深痛なる罪惡の實感、若くは現世の不滿に基くもの多し。善導の『六時禮讃』には晝夜六時の禮讃に阿彌陀佛並に極樂勝妙の相を上げて一禮讃毎に無常の偈を加へ、源信の『往生要集』には、先づ三界生死の厭ふべきを擧げて、次に極樂の勝相を說けり。「念死念佛」といひ、「厭離穢土欣求淨土」といひ、淨土門諸教派の著述を見るに、常に無常と罪惡との實感を記して、往生成佛と對比せざるなし。既に『觀經』に於ける韋提希の請問は更なり。下品の文に至りては特に然り。『阿彌陀經』亦前半極樂の莊嚴功德を說き、後半諸佛の證誠を說くも、終りに佛（釋迦）が五濁惡世に於て、甚難希有の法を說くといひて、此處にも濁惡世の對比を略せざりき。由是觀之、此經典中に五惡段あるは、罪惡の實感が此經を要求するに至りし所以と見るべきか。由來敬虔主義の宗教は罪惡の形而上的意義の有無に關せず。寧ろ現實の罪惡其物に堪ふる能はざるに出づるもの多し。

第二章　無明

罪惡觀は佛陀論の反面をなす。既に佛陀を以て、『起信論』の教理を假りて、其理論的根據を說明せらるべき『無量壽經』の佛陀觀にありては、其の裏面に含める罪惡觀も、亦從つて一層深からざる可らず。以上に述べしは罪惡の實感が、往生淨土の思想を生ずるに至るべき所以を說明せるに過ず。然るに宗教上の罪惡は普通のそれと異り、元と理想的要求に背くによりて起る。故に理想の高きに從つて、罪惡觀は益深からざるべからず。基督教の原罪は吾人に對する實感にあらざるも、此原罪の假定は絕對他力の信仰を生ぜり。此故に佛教の形而上的罪惡觀を一脈するは强ち徒勞にあらず。以下基督教との對比をとりて、佛教罪惡觀の始終する所以を見ん。

基督教の神學に在りては、二個の根底を異にせる罪惡觀あり。アウグステーヌスは曰く罪は深く人性の根底に存し、吾人の云爲行動に何等の價値を認むべきなし、自力的努力は畢竟して罪業を消滅せしむる所以の道にあらず。從つて救濟は唯純粹に他力に待たざるべからずと。之に反してペラギウスは、吾人は罪業に充たさるゝも、しかもそは吾人をして幾何の善事をもなす能はざらしむるほど深からず。若しそれ吾人自力の精進に神惠の救助をうるとき、茲に救濟は成立するものとなす。更に此兩極端を調和せんとして、自力精進と神の恩寵とを以て、共に救濟に欠くべからざる要件となし。或る程度迄は意志の自由に由て、自力の功德を要すとなせる半ペラギウス派あり。（以上の對立は淨土教家の諸師所立の念佛と眞宗の念佛との兩極端に於ける淨土宗との關係の如し）而してアウグスティーヌスの說は、中世紀を通じて他力救濟說の基礎をなし、ペラギウス派は遂に基教神學に於て異端とせられたり。抑も

基教の神學に於ては、神は正義の維持者たると共に愛の淵源なり。裁判官にして同時に慈父なり。此故に神は一方に於て正義の維持者たると共に、人の罪を赦し又之を救ふ道を設けざるべからず。代償は無價値なる人間に下したる特別の恩寵なり。

佛教の罪惡に對する感じが、其根本に於て、基督教と異なるものあり。抑も佛教の道德は自律的にして、基教は他律的なり。佛教に於ては今此の現在の我は我自らの作爲せるもの、而も我あるは業の連續に外ならずして、靈魂の實有即ち我體の存することなし。但し無我は佛教の根本義なりと雖も、是によりて道德上の責任を無とするものにあらず。蓋し業感論は無我の教義中に自律的の道德を說き、輪廻の責任は一に自己にありとなす。抑も印度に於ける報償の觀念は、百步ブラーマナの頃に表はれ、因果應報の觀念は佛教に至りて一層緻密となれり。婆羅門教の他律教に代はりし努力的宗教は實に之を以て其の出發點となせり。業感の觀念は常に自律的着色を伴ひ、其教學は如何に變化するも尙原始の意義を失はざるものあり。是と同時に深奧なる罪惡觀は佛教が他の印度教學に對する一特色にして、後代印度教徒の如きは佛教の影響をうけて、罪惡の觀念を高めたりといふ。深奧なる罪惡觀とは無明論即ち是れ。而して基督教の原罪は稍ゝ佛教の無明若くは宿業に相當するが如きも、彼はアダム、エブを藉りて歷史的假定に立ち、此は道德的若くは形而上的罪惡の設定なり。そも原始佛教の無明は如何にして、後に所謂本支の無明を生ずるに至りしか。

『增阿』莫畏品（巻三 24.b）には無明を以て諸苦患の本源となし、同放牛品（巻三 44.b）には四諦を知らざるを無明となし、『長阿』大緣方便經（巻九 50）及『中阿』相應品涅槃經（巻五 31.b）には十二因緣甚深の義を說けども、未だ無明の深義に及ばず。蓋し『轉法輪經』の十二因緣に道行の網目を附せしのみ。無明の始源を探ぐるも未だ形而上的に走せず。此五欲に迷ふが故に無明ありとの循環論のみ。但し其無明は正智正見明解脫に對せり。『本際經』（巻五 59）『盡知經』（巻五 60）『大拘絺那經』（巻五 33.b）等亦同じ。大拘絺那經は舍利弗と拘絺那との問答に成り。舍利弗は佛弟子中智惠を以て稱せられ（『增阿』巻一 9.b.10.）釋尊も特に轉法輪を許し、（辰四 63）舍利弗入涅槃の記事は全く佛傳に同じ、（巻一 70.b.7）現に『法蘊足論』『舍利弗阿毘曇論』の著者と傳へられ、舍利弗の問答は多く論議の風に渡るものあり。然れども其無明觀は吾人が道行上の障害の本たるのみ。未だ形而上的意義を有せざるものゝ如し。彼の『法蘊足論』緣起品に無明につき稍詳細の叙述あるも、（秋四 45.b）行識六處未生以前の無明（實感に表はれざる）と此身心既に成りて諸欲業を作る無明、（實感に表はるる）即ち無知との區別明かならず。從つて無明も道行上の無知以上に出てざるは當然なり。『發智論』の結蘊の如きは、結繫を分類して其所屬を論ずる詳密なるも、其教義已に有部の離繫擇滅の涅槃を理想とするものなるが故に、無明は要するに吾人の擇力所得の滅をうるを妨ぐる以上には出てざるなり。

十二因緣は約して煩惱、業、苦の三となすをうべし（『立世阿毘曇論』收一 103）而して苦の原因は惑業にあり。解脫は此等を滅するに在り。無明は惑業の本源なるが故に、之を除かんとするにあり。而して『婆沙』『俱舍』等の無明論も亦形而上的の意義なし（『婆沙論』收 153. 73.『俱舍論』收九 110. 收十 19）

抑も佛教以前の優波尼沙土にありては、自己の眞體を宇宙の根底に認め、吾人は須らく現象差別の形影Chāyā に迷はず。唯一無差別の梵と合躰すべきを說き、其自己と梵との致一を求めて梵の理想を實現するは明 Vidyā にありとなし。其現象差別界の生起は、神話的に又分出論的に、梵自ら生殖し多數ならんとしたる意欲現象に起因すとなす。即ち分化は梵の私慾に出てたりとなすと共に、梵の眞性の自己なるを知らざるは無知無明に發すとなし、萬物生起を唯心論的に說明せり。商羯羅（シャンカラ）は更に現象が無明に發する世界生成の過程を明めんとして、全く無宇宙論の頂點に達せり。元來佛教の無明は先きに既に述べしが如く、宇宙論的思辯に非らずして、道行鍛錬を主とせる宗教的直觀なり。前きに擧げたる『拘絺那經』、『盡智經』、『本際經』が常に八聖道を以て此十二因緣中に混說せるが如き其の適例にして、後ちに無明が本支に分れ、菩薩幾十の階位に於て之を斷盡すとなし、然かも直接の人生には寧ろ沒交涉なるが如きものにあらず。蓋し實行主義は理論の高調を要せざりしならん。此故に有部にありては箇人格を生ずる以前にある無明と個人成立後の無明煩惱とに明確なる區別を立てず。要するに自我の根底は六識以上に遡らざりしなり。（唯識に在りては第七識相應の根本四染污（痴、見、慢、愛）中、我痴を偏して不共恒行の無明といふ是れ明かに已人格以前と以後との無明を區別せり（論六13.b））但し原始佛教の無明は單に實行的の意義なりといふも、元來印度教學に在りては道德法と自然法とを峻別せざるが故に、道德的無明は又同時に世界的無明たるべし。無明は十二緣起の源頭にあり。由來佛教は世界世苦の成立を以て心意に歸せんとする唯心的世界觀に成れり。是故に無明は心の無知なれども、唯心論は常に主觀內面の機能と客觀外面の生成とを同一にする傾きあれば、無明の宇宙論的說明も其原形は已に此に起因するものと見らるべく、歷史的に之を定むる能はざるも、『起信論』『唯識論』にいふ無明の觀念は馬鳴、無著、世親以前に既に業に發したる思想と推定せらるべし。而して眞如緣起は恐らく此の十二緣起の無明論に發したるものならん。固より數論の二十五諦說にも起因しうべく。又前の優波尼沙土の思想よりも來由しうべきも、特に十二因緣に宇宙論的緣起の解釋をなせりと見るを至當とす。但し其詳細は他日を期せん。（常盤學士『馬鳴論』等參照）

固より十二因緣は其範圍を人生に限れり。起信の三細六麁は之を宇宙に擴充せり。然れども無明の始源を以て五蓋にありとの循環的說明に於て、無明は已に根元の意味あるが故に、若し此無明を無始に持行き、生起開展の說明を附せんか、玆に『起信論』の無明たるべし。然るに同論の無明は抑も曖昧なり。「依眞如故、有無明」（『義記』下本12）といふは無明は眞如より生ずる如きも、又『起信論』全體の說意によれば無明は眞如の內とも外とも說かず。唯眞如の上に生ずる迷妄の現象となす。（風水波の譬）前田博士曰く、「表面は無明を理想とするをえざるが故に無明を眞如以外となせるも、裏面は無明の體は眞如なりとの義なり」と（『大史』165）。又曰く「忽然念起名爲無明」とは、無明は無明を因として起る。畢竟無明は無始のものなるの意を出てず。即ち佛教の根本義といふべき因果相續無始無終の大宗を逆せざるものにして、無明の生起を根本的に解せざりしもの」と（『大史』148、『義記』上10、用大の註と併せて參照すべし）然らば則ち原始佛教の意を去ること遠からずといふべし（『印考』235 無明の無始に關して巴梨文あり）。但し起信の生滅門は宇宙論的說明なるが故に無明は一層無始の意を強め（『義記』中22）、其初相（『義記』に曰く根本無明）は地盡の菩

薩、竟究覺に達する以前に始めて之を知りて、心性を見るといふ（同上中）。此の如くにして根本無明は其相微細、十地の菩薩所斷の惑にして、凡夫二乘の及ぶ所にあらず。

抑も佛教に於ける形而上的罪惡觀に二面あり。一は觀念上の事實と他は思辯的考察と是れなり。其禪定觀念の上に表はるゝ根本枝末の無明は觀念者の實觀に基く、されど十地以上若しくは最後一品の無明の如きは殆んど實際上に於ける實驗者なし。蓋し教義上無明を細分し各階位所證の法を定むれば、教法は同時に觀法上に表はれ來るが故に、微細の罪惡も觀法者には主觀的に事實となるも、一般多數のものには、唯だかゝる根底深き罪惡ありとの想像を與ふるに過ぎず。次に思辯的考察に基くものにありては、元と佛教の理想はゾバニシャッドの梵に系統を引き常に一元的なり。抑も宗教は由來善德を首位に認めざるなく、古來惡神の勝利を說くはオーディンの神話にすぎず。然るに罪惡は事實なり。理想によりて現在の事實を說明し來らんか、勢ひ罪惡の存在を輕からしめざるべからず。然れども理想を向上せしむる爲には、罪惡にも深き根底を與へざるべからず。輕からしめんが爲に實は深くせり。而して一元論は常に罪惡の說明に窮するは、古今東西の哲學に免るべからざる難關にして、『起信論』等の無明論は、若し哲學的に見なば、此難關を解決せんために起りしものといふべく、根本無明は起信哲學必然の歸結といふべし。

滿がつて思ふに、『無明論』の發達は佛陀と衆生との關係を遠隔にせり。されど同じく一心眞如の表顯に過ぎざれば根本に共通點あり。此に宗教の深義の潛めるものあり。こは上「佛性論」に述べたり（信行論篇外參照）。

由來道德と宗教とは餘まりに高遠に失すれば、殆んど其存在の理由を失ふ。カントも其實踐批判には神の存在を認めざるを得ざりき。『起信論』が宗教たらんがためには修行信心分は除くべからざる主要の頁なり。衆生に佛と共通の點あり、如何にしてそを開顯するをうるや。原始佛教の宿業の意味を布演し、無始の無明を說くに至りては、自力の修行は果して能く功を奏するをうるや。如何にしても衆生以上の力を假らざるべからず。佛力によりて宿業を除かざる可らず。恰かもよし、佛は無量功德を具して應機普益の妙用あり。凡夫亦佛に共通なる佛性あり。此間に感應道交（此語は天台の暗なるも意味は『起信』にあり）なかるべからず。起信の薰習の義即是なり。所謂、體薰習は衆生が佛を感ずべき自心の內面的眞如薰習にして、用薰習は佛が衆生に應ずる、即ち衆生よりせば外部よりの薰習なり。內外の薰習相具して救濟の本義は茲に完うせらるゝなり。抑も回向の思想は自律道德の埒外にあり。從つて原始佛教中には明かならず。財施平等施を勸むる中に、多少其萠芽を認むべきありと雖、彼の『增阿』馬血天子品（巻三）に「持此齊法功德、攝取一切衆生之善、以此功德惠施彼人、使成無上正眞之道」の文の如きは極めて稀れに見らるゝのみ。然るに大乘に至ては、菩提回向は重要なる意義を有し、就中『甚深大廻向經』（祐錄云失譯）の如きは「少修善本獲大果報」を甚深法性の回向に歸し、「所有功德悉與一切衆生、共回向無上菩提」といへり（宙八 31.b）。『月燈三昧經』（那連提耶舍）第一品には財施法施四種の回向を說き、其他『起信論』（下末 23）等大乘諸經論多く、此思想を胚胎せざるなし。此に於てか火は千年の薪を燒き、船は万貫の荷を載せ、十圓の繩も刀あれば兒能く之を斷つ、如來攝護の本願は實に衆生の信行を增大せしむるを得

べし。

之を以て基督教の神學に比するに、或は同じく或は異るものあり。神は吾人に自由意志を賦與し、（正統派は寧ろ神性に自由を認め人生に定道論を取る傾きあり）撰擇其宜しきをうれば神恵に與るをうべく、即ち神に近きものとなるをうべきも、神と人とは全く相違せり。勿論聖靈降賦の觀念は神と共通點を有するも、そは神が與へしものにして、吾人が作爲したるものにあらず。又人類の生存は神の創作に基くは固より一元的なるも、神と人との對立に絶對的差異を認むる以上は、人類は虚妄たらずんば神と人とは二元的對立とならざるべからず。蓋し信神教（Theism）は人に於ける神性の本具 die göttliche Immanenz in Menschen を認容するをえず（「起信論」參照下本と對照すべし）。概言するに猶太教、基督教の神は超絶的にして（神人隔絶教）印度諸教學の神は内在的なり（神人同格教）。此故に万有は皆神性を帶び、流出還滅の思想に成るもの多く、佛教亦是と其系統を保てり。佛教の救濟論は生佛共通の佛性を架橋となし、内外相助けて、此に救濟の本義を見る。生佛の對立は元來固定的のものにあらず。衆生とは悟らざる佛、佛とは迷はざる衆生に外ならず。基督教の神と人との關係は神は絶對の權力者、全智者、全能者にして、神を人として言ひ表はすことをえず。畢竟佛教に於ける佛は衆生が或る因行を修して感得したる結果にすぎず。佛陀となりしものは衆生自らなり。「彌陀者衆生之彌陀、衆生者彌陀之衆生」（「蓮宗寶鑑」序）。衆生の業力は佛も如何ともする能はず。基督教の神が正義の法官たるが如き性質は曾て佛に見るを得ず。衆生業力の作用は其の儘にして、しかも業力輪廻に乘じて、之を其渦外に脱出せしめんとするにあり。要之、原始佛教の自律主義は慈悲救主の教義にも隠見し、後世の淨土門となりても亦其特色を失はず。而して又汎神思想の影響として佛教の慈悲は神命に出づるにあらず。元と無常無我の教理に立てるが故に、思想感情多く冷性に近く、寧ろ生苦を憐むの情に出て、從つて有情の生命に眞價あるを認むる傾向微弱なるが如し。

以上篇を追ひ章を重ねて、阿彌陀佛信仰の由來を討ね、本願の佛陀と勝妙の淨土と易修の信行とか、佛敎罪惡觀と共に、如何に始終せるかの、佛徒思想變遷の大略を叙せり。『梵文小阿彌陀經』に曰く、「善家の男子或は善家の女子は彼覺者國に向つて念願を發すべし」と。kulaputreṇa vā kuladuhitrā vā tatra Buddhakṣetro citta-praṇidhānaṃ kartavyam『文殊師利發願經』には文殊願の滿足と普賢行の嚴淨とを（天二三b）、『觀世音菩薩秘密神咒經』には一切諸願の成滿を（或十三a）、俱に往生極樂に歸せり。蓋し佛に五刼思惟の本願あれば、衆生亦之に應ずる誓願あり。「我なくば彌陀の本願よもあらじ」。之を要するに佛陀の本願は畢竟衆生の要求に出づ。

由來研究は未完を意味す。阿彌陀佛の信仰は、上下二千歳の史實と東洋幾萬人の思想とに關せり。信仰區域の擴大と年序經過の悠久とは、到底一朝一夕の研鑽に委し去るべきに非ず。本論の如きは僅かに其源頭の一端を揣摩せしに過ぎず。今又論鋒に筆頭を揭けて、叙述に狗肉を陳するの妄を敢てせざるべし。讀者請ふ諒焉。

附錄

一　阿彌陀佛と一類にせらるゝ諸佛

阿彌陀佛は經によりて其配合の諸佛を異にし、暫く『維摩經』に就きても支謙、羅什、玄奘の三譯中、諸佛數量に增減あり。（黃七三8.b 黃七三a 黃七五8.b）『法華經』十六王子の如きは數量同じきも名稱に少異あり。護譯什譯等見るべし。（益一二3.b 益一二3. 益二一78. 參照）『文殊師利法寶藏陀羅尼經』には七佛中に阿彌陀佛あれども、『大方廣菩薩文殊師利根本儀軌經』中の七佛とは全く相違せり。同じく阿彌陀佛を交へ、等しく十方十佛なりと雖も、『菩薩藏經』（列二一b）と『離垢悲菩薩所問禮佛法經』（黃五三b）とは相類せず。密敎經典にては普通に四佛五佛の配合なれども、『大金色孔雀王咒經』の四方四佛とは又同じからず。（成八一a）此他『金光明經』の諸譯本。『十住毘婆娑論』等、多佛と俱にせらるゝあり。又『賢劫經』『千佛名經』等には千佛と共に阿彌陀佛あり。廣く阿彌陀佛と俱に併列せらるゝ諸佛を見るに、阿彌陀佛佛明經典二百數十部中五十餘經あり。其出所と表示とは卷末「表」を參照すべし。但し此中特に注意すべきは阿閦と阿彌陀。密經の五（四）佛等是れなり。

彼の五佛は西藏及密經諸經典を外にしては『華嚴經』及び『金光明經』等に類似の配合あり。但し時として毗盧舍那を除き不動、寶生、彌陀、不空成就の四佛たるとあり。

抑も印度にありては吠陀以來諸神を四方各所に配當するあり。（ブリハダーラニヤカ、ウパニシャド・三の九等）西方グノス派も亦かゝる配當をなせるあり。尼波羅西藏の五智佛は又禪定佛（ドヤーナブッダ）として各々其人（マーヌシブッダ）佛あり。阿彌陀佛の人佛は釋迦佛にして其菩薩は觀音なり。此等五佛に關し、リス、デビッヅ氏は曰く、原始佛教は神界以上に十六梵界を說き、四禪を以て下十一界に配せり。大乘教に特殊なる五禪定佛は此中最上の世界に配せしものならんと。又其の年代に關しては『巴梨經典』『普曜經』『法華經』になきのみならず。五世紀七世紀に印度に旅行せし法顯玄奘の記述になく、恐らく第七世紀以後の成立ならんと。（Buddhism 204—6）ワッデル氏も亦略々同樣の成立年代を推測せり。而して又ホヂソン氏は此五佛は五大の表示なりといへり。五大表示の說は密教の通說なるも、（成三）（『佛陀論』73.n 413）四佛五佛配合の成立年代に關しては、リス、デビッヅ、ワッデル兩氏の說未だ必らずも然らず。支那にありて密經譯の初期に列ぬべきは帛尸梨密多羅にして、『隨願往生十方淨土經』（『大藏』の第十一卷）には四方上下の佛名と土名とを擧ぐる中、（成六 61）後にいふ四方四佛なし。又曇無讖譯『大集經』『高幢分』にも四方佛あれども（玄二 23.n, 37.b）普通と異る。其四方四佛として阿閦、阿彌陀、寶生、微妙聲（不空成就）の名の始めて出てたるは、覺賢譯の『觀佛三昧經』曇無讖譯の『金光明經』なり。蓋し東晉以前の譯經に就きて有譯失譯合せて譯者五人全部二十七部中、阿彌陀佛に關說せる部分には曾て此の種の四佛或は五佛の配合を見ず。但し覺賢曇無讖譯に存するを以て此四佛の配合は少くとも四世紀以前たるは秋毫疑を容れず。（又『梁僧傳』によれば迦葉摩騰は天竺にて『金光明經』を講ぜりといふ。然るに現存同經には四方四佛を明かす但し此傳說は他に何等の發說なきが故に取らず。）但し今所謂四佛五佛は覺賢曇無讖の譯經に始まるも、其の多くは唐宋時代の譯經即ち密經典に於いて表はる。蓋し第七八世紀に於ける印度佛教は金剛乘（ヴァジラヤーナ）、怛多羅乘（タントラヤーナ）、或は密乘（グヒヤヤーナ）の佛教として非シュヌ派シヴ派及女神派と交渉を重ね、玆に神秘呪法の眞言佛教となり。『般若經』『法華經』『無量壽經』等の大乘經典に念呪儀軌を作り、全佛教を殆んど密教化せり。不空傳によるに曾て支那に渡來せる經典五百餘部を印度より將來せりといふ。以て如何に密經の續出せしかを知るをうべし。影響は延いて錫嵩に及び（『上印』273）西藏に入り、支那佛教亦殆んど密教に壓倒せられ、一時南地佛教の中心たりし天台宗も此時代の道邃よりは密教を包攝し、其流れを汲める最澄は四宗合一の日本天台を始む。實に當代は南北共に神秘修法の宗教なりき。五禪定佛は此時代より漸く定形となりしは事實なり。

阿彌陀佛は西藏に在りては光壽二佛を別となす。然るに密教中臺八葉院の五佛は金剛界三十七尊中の五佛と其の名稱同じからず。若し金胎兩部を分ち無量壽と阿彌陀とを別とせば、西藏に於ける光壽二佛の思想と共通點あるが如しと雖も、密教にては二佛を分離する思想なし。『無量壽經』『觀經』『小經』にありても光壽二佛を同體と見做せり。『無量壽經起信論』には古來修觀者阿彌陀佛を念じて、無量壽佛を觀ずるものなしといふは別佛の思想を胚胎せるが如きも、依憑を明記せず。兎に角『論註』『觀經疏』『安樂集』等に斯る說を見ず。阿彌陀佛を光壽によりて二分せるは後代にして、西藏の傳說を主とすれば少くも七八世紀の後にあるが如し。但し一佛思想が元とにて二名を生せしか、二佛思想が合して一佛の異名たりしか、今その前後を區別すべきなし。

次ぎに阿彌陀佛が是等四佛の思想に先立ち且つ常に列べ稱せらるゝは阿閦佛なり。四（五）佛配合の以外に

於いて阿彌陀佛と阿閦佛と一雙とせるもの十餘文あり。抑も東晉以前の諸經にして彌陀が阿閦以外の佛と一雙とせらるゝ諸佛中其多くは釋迦と燃燈と彌勒となり。此等の諸佛は阿彌陀佛以前に成立せしものたるは彼の南方經典中に其名の存するによりても證するをうべく、本生所値の佛は過去佛として偶作と見らるべく、又一時假設したる佛陀に過ぎず。後期の信仰に重要なる位置を占め、多大なる影響を與へたる佛陀にして、且つ比較的早く成立せしは阿閦佛なるが如し。（上「阿彌陀佛と本生譚」の項下參照）東晉以前の譯經に於いて阿彌陀佛と俱に比較的多佛を列擧せるは『賢護經』『法華經』『維摩經』等にして其諸佛中明かなる佛陀は彌陀と阿閦と釋迦とのみ。阿閦は阿彌陀佛に伴なひ始終一貫して併擧せらるゝ佛陀なり。由つて惟ふに、阿閦佛は最も古く成立したる一佛なるが如し。ワッデル氏の如きは阿彌陀佛に最古の位置を與へんとするの筆致なるも、阿閦と阿彌陀との成立前後の如きは蓋し未決の問題なり。但し先きに起原說中に述べたる阿彌陀阿閦は俱に過去尸棄佛に關聯せる說話に起因すと見做すを以て多少正鵠に近しと認容すれば、古くより阿彌陀佛と阿閦とが關係ある所以をも領するを得べし。

以上は主として阿彌陀佛關係經典よりの類推に過ぎず。但し『出三藏記』の所傳に從ひ二世紀中葉より四世紀中葉に至る譯出經典に見るに、此の間に繁榮せし諸佛菩薩は阿彌陀、阿閦、彌勒、觀音、文殊、普賢、虛空藏等にして、阿彌陀佛の關係經典最も多く、而して『阿閦佛國經』の譯出は又最も古し、是に由て蓋然的に阿閦佛は現今北方佛敎中の現在諸佛中最古成立の一佛と見做しうべきが如し。（『梁僧傳』第一、『三寶記』第四等に據れば竺法蘭は『十住斷結經』を譯せしと傳ふ。是れ現存の佛念譯と同經なりとすれば阿閦も彌陀も此中に說かれたるか故に紀元第一世紀の譯經中に表はるゝ前、既に印度に於いて信仰せられたる如きもこは摩騰の『金光明經』の傳說と共に再考に附す）其成立の年代の如きは得て確定すべからざるも、紀元二世紀の前半に既に其の一佛中心の經典すらも存在し、思想轉化の徑路と且つ比較的多くの古經に共許の現在佛たるより類推するに、阿彌陀佛と共に恐らく紀元前の成立ならん。

阿閦は阿閦鞞或は阿閦婆といひ不動無怒何れの譯語も可なり。（Macdonell, 78）阿折羅亦然り。（仝上98）『易土集』には『涅槃經疏』を引きて阿閦者『道行』云無怒、『放光』云妙樂、『淨名』云不動といへり。此中妙樂は其國土名なるが如し。

二　阿彌陀佛に附隨せる菩薩

凡そ佛陀あれば必ず是に附隨する侍者あり。釋迦には迦葉、阿難若くは文殊、普賢其脇士なり。五禪定佛には各それに相當する菩薩あり。阿彌陀佛に附隨する菩薩は『大經』『觀經』共に無量の菩薩ありといふ。然れども其名は觀音と勢至とのみなり。『大經』諸本中「梵」「魏」「唐」「宋」共に此二菩薩は此土よりの往生者なりといひ、多く阿彌陀佛の侍者たり。（同十一54, 82. 地十二 23 同十21等）抑も此二菩薩と阿彌陀佛との配合は何時頃より起りしか。此の二菩薩は『大經』の支謙譯に於いて、婁迦讖或は帛延譯中に已に脊屬の一雙となしたるが故に、譯經上にては紀元第二世紀半に於いて、印度若くは西域地方に此三尊の信仰ありしを證しうべし。蓋し阿彌陀佛は經典によりて其土の菩薩も多少の相違あり。『華嚴經』の如きは彌勒も文殊も普賢も極樂にありて而かも勢至の名を上げず。（四〇8）彌陀と觀音とは常に離れざるも、勢至は往々にして表はれざるあり。特に密敎經典に

在りて然り。（成十37、門十一7、70、十112、門十一82、85、97、門九68、門五88、門十三16、門十31、50、成十二11、41）就中觀音冠中の彌陀最も多し。抑、佛教中觀音に關する經典少なからず。而して現に西藏支那日本に於いて觀音は彌陀より獨立に崇拜せられ、往々にして現世祈願を伴ふ。而して觀音の起原に關する考說少からず、ビール氏は觀音を以て錫蘭 Adam 岬に安置せらるる Sumana と同一となし、普門（サマンタムクハ）、普陀洛（ポータラク）等の名稱より推して、觀音は恐らくアルマカー（Al-makah）に起因し、セピアン人によりて最初錫蘭に輸入せられ、次いて支那南方の海岸に傳はり、又西藏に入れるものならんと云へり。（『支那佛教』119-124）觀音信仰は實に南印沿岸に關係あり。現に錫蘭より觀音像の發見せられしあり。『大乘莊嚴寶王經』には觀音師子國を出て波羅捺に來るといひ、（成十）其他の事情を併せ考ふるに印度河口錫蘭等に關係あるが如きも、ビール氏の考說未だ遽かに信ずべからず。又エドキンス氏（『支那佛教』382）は觀音信仰の印度に入りしは紀元前後の事なりといふも、是れ亦一說たるに過ぎず。又メンヂーズ氏は（『宗教史』180）波斯の水神アナヒタ Anahita に起原すと稱するも、何等の考證を揭げず。其他アイテル氏（『梵漢字典』）は南印の古き地方神にして其神格は毘瑟拏幷に濕婆に類すといひて明かに起原を述べず。「グリュンエデル氏（『佛教』270）は觀音は毘瑟拏 Padmanābha に關し、勢至は目連の轉化なりといへり。高楠博士は觀音信仰の淵源は本生譚に起原せしものゝ如く、印度教の梵、毘瑟拏、濕婆、突迦に類同あり。Avalokita は巴梨語の Apalokita と同義なれば印度河希臘殖民時代の海神 Apolo を Apalokita と同視せるに非るかを推せられ、（『帝文』）大村西崖氏亦根本觀音は烏摩（Umā）若くは吉祥（Sri）より導かれ、六觀音等は突迦より導かれたるものならんと云へり。

（『宗界』）觀音信仰の起原は同時に阿彌陀佛に親緣あるも未だ定說を得ず。特に其名義すらも一定せず。暫く『大經』『觀經』漢譯諸本中、盧樓夷、觀世音、觀自在、大自在、觀音の音義譯あり。觀音經によれば觀音の名適するが如く、梵名によれば觀自在ならざるべからず。此他に光世音、世間自在王等の語あり。名義起原今劇かに決すべからざるが如し。

以下少く觀音と彌陀との關係を見ん。『授記經』に已に彌陀入滅觀音補處の信仰を表し。『無量壽經』にも「漢」「吳」「梵」三本に此の記事あり。觀音は彌陀の候補たる地位にありて、兩者互に其信仰を補助せる事疑なし。觀音は彌陀の候補者なりと雖も、時には觀音が彌陀と同躰なること とあり。『金剛頂經瑜迦觀自在王如來修行法』には觀音は彌陀との合成身となし、（門五）『大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅密多理趣釋』には「得自性淸淨法性如來者、是觀自在王如來、異名則、此佛名無量壽、若於淨佛國土、現成佛身、住雜染五濁世界、則爲觀自在菩薩」の文あり。（門八）此故に淨嚴は『陀羅尼集經』觀音甘露印呪の末に附記して曰く「彌陀觀世音、元是一胸襟」と（門四）。又觀音が反つて彌陀以上の地位を占むる事あり、印度交替神教の風をうけたる佛教は容易に一佛に對する信仰を他と交替す。『不空羂索神變眞言』には觀音を世間王如來となし、又世間自在王如來といふ（門十一）。然らば大經の世自在王 Lokeśvararāja と同語なり。『決定總持經』四（セ）（ソ）には阿彌陀佛本生所逢の佛陀を光世音或は觀世自在となせり（上「阿彌陀佛と本生譚」の項下參照）。恐らく世自在王は觀音の轉化なるが如し。要するに觀音と彌陀とは古くより密接なるも其結合の起因は明かならず。但し紀元前後より

在りて然り。（成十37 問十一7,70. 十112. 問十一82,85,97. 問九68 問五88 問十三16 問十31,50 成十二11,41.）就中觀音冠中の彌陀最も多し。抑、佛教中觀音に關する經典少なからず。而して現に西藏支那日本に於いて觀音は彌陀より獨立に崇拜せられ、往々にして現世祈禱を伴ふ。而して觀音の起原に關する考說少からず、ビール氏は觀音を以て錫蘭 Adam 岬に安置せらるる Sumana と同一となし、普門（サマンタムックハ）、普陀洛（ポーダラク）等の名稱より推して、觀音は恐らくアルマカー（Al-makah）に起因し、セビアン人によりて最初錫蘭に輸入せられ、次いで支那南方の海岸に傳はり、又西藏に入れるものならんと云へり。（『支那佛教』119-124）　觀音信仰は實に南印沿岸に關係あり。現に錫蘭より觀音像の發見せられしあり。『大乘莊嚴寶王經』には觀音師子國を出て波羅捺に來るといひ、（成十）其他の事情を併せ考ふるに印度河口錫蘭等に關係あるが如きも、ビール氏の考說未だ遽かに信ずべからず。又エドキンス氏（『支那佛教』382）は觀音信仰の印度に入りしは紀元前後の事なりといふも、是れ亦一說たるに過ぎず。又メンヂーズ氏は（『宗教史』152）波斯の水神アナヒタ Anahita に起原すと稱するも、何等の考證を揭げず。其他アイテル氏（『梵漢字典』）は南印の古き地方神にして其神格は毘瑟拏幷に濕婆に類すといひて明かに起原を述べず。「グリュンエデル氏（『佛美』270）は觀音は毘瑟拏 Padmanābha に關し、勢至は目連の轉化なりといへり。高楠博士は觀音信仰の淵源は本生譚に起原せしものゝ如く、印度教の梵、毘瑟拏、濕婆、突迦に類同あり。Avalokita は巴梨語の Apalokita と同義なれば印度河希臘殖民時代の海神 Apolo を Apalokita と同視せるに非るかを推せられ、（『帝文』）大村西崖氏亦根本觀音は烏摩（Umā）若くは吉祥（Śrī）より導かれ、六觀音等は突迦より導かれたるものならんと云へり。

（『宗界』教）　觀音信仰の起原は同時に阿彌陀佛に親緣あるも未だ定說を得ず。特に其名義すらも一定せず。暫く『大經』『觀經』漢譯諸本中、盧樓夷、觀世音、觀自在、大自在、觀音の音義譯あり。觀音經によれば觀音の名適するが如く、梵名によれば觀自在ならざるべからず。此他に光世音、世間自在王等の語あり。名義起原今劇かに決すべからざるが如し。

以下少く觀音と彌陀との關係を見ん。『授記經』に已に彌陀入滅觀音補處の信仰を表し。『無量壽經』にも「漢」「呉」「梵」三本に此の記事あり。觀音は彌陀の候補たる地位にありて、兩者互に其信仰を補助せる事疑なし。觀音は彌陀の候補者なりと雖も、時には觀音が彌陀と同躰なることとあり。『金剛頂經瑜迦觀自在王如來修行法』には觀音は彌陀との合成身となし、（問五 13.n）『大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅密多理趣釋』には「得自性淸淨法性如來者、是觀自在王如來、異名則、此佛名無量壽、若於淨佛國土、現成佛身、住雜染五濁世界、則爲觀自在菩薩」の文あり。（問八 8.n）此故に淨嚴は『陀羅尼集經』觀音甘露印呪の末に附記して曰く「彌陀觀世音、元是一胸襟」と（問四 54.5）。又觀音が反つて彌陀以上の地位を占むる事あり、印度交替神敎の風をうけたる佛敎は容易に一佛に對する信仰を他と交替す。『不空羂索神變眞言』には觀音を世間王如來となし、又世間自在王如來といふ（問十一 70.n）。然らば大經の世自在王 Lokeśvararāja と同語なり。『決定總持經』四（セ）（ソ）には阿彌陀佛本生所逢の佛陀を光世音或は觀世自在となせり（上「阿彌陀佛と本生譚」の項下參照）。恐らく世自在王は觀音の轉化なるが如し。要するに觀音と彌陀とは古くより密接なるも其結合の起因は明かならず。但し紀元前後より

此結合ありしものと見るをうべく、後期に及んでは此の兩者の信仰が互に相助け、富那羅の着色をうけ、次いて益々印度敎的となりしは、各時代の譯經の變化に見て明かなり。

「次に觀音勢至以外に阿彌陀佛に附隨する菩薩に種々あり。後世には二十五菩薩として、觀音、勢至の外に藥王、藥上、普賢、法自在、師子吼、陀羅尼、虛空藏、德藏、寶藏、金光藏、金剛藏、光明王、山海慧、華嚴王、衆寶王、月光王、日照王、三昧王、定自在王、大自在王、白象王、大威德王、無邊身王等を數ふ。而して其基く所は『十往生經』にありて、先づ導綽（貞觀二年寂六百二十八年）は其著『安樂集』に之を引き（『安樂鈔』下の135.b）次いて善導（開耀元年寂六百八十一年）は『往生禮讃』（44.b）に其經文を上げて念佛の利益を示し、我國源信（寛仁元年寂千〇十七年）は『往生要集』（下本144.b）に其菩薩を列敍せり。此等の中、普賢は『華嚴經』に主要なる菩薩にして、藥王、藥上は『法華』に出で、藥師と關係あり。虛空藏は『寶積經』に別に此菩薩に關する一會の經あり。其他の諸菩薩も亦諸經に散見せり。由て惟にふ、此等の菩薩は諸經中より集め來りしものゝ如し、日本にありては源信の來迎圖幷に和讃を始め平安朝以後此信仰起り、今も一部の信仰として殘れり。大和中宮寺の天壽國曼陀羅は恐らくは日本最古の淨土の圖ならんも、兜率往生思想か極樂往生の思想か明かならずといふ。聖武の朝、橘夫人が造らしめたる（七百二十四年）三尊像には三尊像の外に、屏障に天人らしきもの五人あり。上方に他方佛らしきもの四人あるも二十五菩薩なし。吾國にありては二十五菩薩は惠心に始まりしものの如し。抑も二十五菩薩の根元なる『十往生經』は譯人の名なく『開元釋敎錄』には之を僞妄亂眞錄中に收めたり。（結五66.b）此經は全く僞經なるが如し。但し魏隋以前に帛尸梨密多羅が（三百〇七年……三百十二年）譯したる『灌頂經』第十二卷には、阿彌陀佛に關して文殊、觀音、勢至、無盡意、寶檀華、藥王、藥上、彌勒の八大菩薩來迎の記事あり（成六65.a）又不空譯『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經』には佛（釋迦）安樂世界に住し觀音、勢至、除盡障、地藏、普光、虛空藏、金剛手、除怖畏、持淸淨、吉祥持、福相持、日月三世、文殊師利等上首たりといふ。又『大方廣曼殊室利經』（四十二60.b）にも八菩薩あり。『大乘莊嚴寶王經』には十二光佛の來迎あり。（成十195.b）『首楞嚴經』には十二光佛を各々別佛となせり。兎に角かゝる信仰は印度に已に發したるものなる事明かにして、偶〻諸經菩薩の名數を異にするは等しく十六羅漢なりと雖ども（藏八）と『小阿彌陀經』と異り、同じく賢護等十六正士なれども、『勝思梵天所問經』、『大論』、『無量壽經』等亦全く一致せざるが如きのみ。『十往生經』（續藏第一輯第四卷192）は僞經なれども二十五菩薩の萌芽たる八菩薩等は印度傳來の思想なり。

三　支那初期の佛敎と阿彌陀佛

支那に佛敎の入りしは後漢の明帝永平十年（六七）なるも、當時、西域地方との交通を考ふるに、既に其以前より時々傳へられしは明かなり。（境野氏『支那佛敎史綱』『上始』淺野氏『東洋歷史講義』）然れども支那佛敎史の發端と認むべきは永平十年より八十年後の世高、婁迦讖の時を以てせざるべからず。而して無量壽經は世高、婁迦讖（一四七—一八六）の時より、羅什（四〇二—四一二）覺賢（三九八—四一二）の時代に至る間に、既に十代の譯を重ねたりと傳ふ。

果して十種の異譯ありしや、否やは疑問なるも、現存の古譯三本、即『無量清淨平等覺經』、『無量壽經』及『阿彌陀經』は此間に飜譯せられたるものなる事明かなり。此經が斯くの如く古代に譯せられ、而も支那佛教の初期に如何なる關係を有せしか。先づ古來稱して無量壽經の譯者とする婁迦讖、世高、僧鎧、帛延、支謙、法護、覺賢、寶雲、曇鸞、求那跋陀羅の傳（梁僧傳玫二1-4,10,11,16,17.三藏記結一79,81,82,85.）を見るに一人も阿彌陀佛の信者なく、獨り此經の譯者のみならず、『觀無量壽經』は畺良耶舍（四二四—四四二）により、『小阿彌陀經』は羅什其他により譯せられたるも、畺良耶舍（玫二17 結一81）羅什（玫二7）共に淨土の信仰者にあらず。加之、後漢代、失譯經に『阿彌陀佛偈』あり。此他阿彌陀佛に關說せる所謂、傍明淨土の經典にして、此種阿彌陀佛若しくは極樂を傍說せるものは東晉時代に及んで既に參拾餘部あり。然るに『出三藏記』集傳『梁高僧傳』其他當代の文獻に徵するに、惠遠の時に至るまでは比較的阿彌陀佛は流行せざりしもの丶如し。『梁僧傳』は漢明帝永平十年より梁天監十八年、凡そ四百五十三年間の記傳にして、收むる所、正傳と傍出とを合せて四百五十餘人、之を譯經、義解、神異、習禪、明律、遺身、誦經、興福、經師、唱導の十例に配せるも、淨土の信行者と見るべきもの甚だ少し。而して其少數者も多くは後期にあり。蓋し當代佛教の特色は、經典を譯誦し、寺觀を造營し、禪數を習ひ、戒律を守るの外、未だ宗派の成立を見ず。大乘、小乘の區別も初期にありては、未だ嚴密ならざりき。世高は主として小乘教を傳へ、（『出三藏記』の經錄による）、婁迦讖は大乘教を傳へたるも、康僧會『安般守意經』序（結一31）（小乘經）に「夫安般諸佛、大乘、以濟衆生之漂流也」と云ふ。大小未だ混沌たる佛教なりき。羅什が『般若』諸部の經論並に『法華經』を譯し、曇無讖が『涅槃經』を譯し、佛陀跋陀羅が『華嚴經』を譯してより、支那佛教は教義研究の時代に入り、空論並に法身常住說と共に所謂、法華、華嚴の純大乘の教義は盛んに江の南北に蘭菊競美の盛況を呈し、延いて宗派成立の端緒をなしぬ。然れども教義中心の佛教は支那佛教の中葉にあり。其初期にありては、神異と誦經と習禪と明律とが其特色をなせるが如し。

迦葉摩騰、法蘭を始め、世高、婁迦讖、佛圖澄、求那跋摩、佛調等多くの奇蹟的行事を傳へ、其他高僧傳、神異篇を見るに、神異の信仰盛んなりしを知るべく、蓋し道教と對抗上に出てたるもの多かるべきも、當代の一信仰たりしは明かなり。然るに『無量壽經』は神異に關せざるにはあらざるも、神異は明律達禪の人にして始めて之を能くするものなれば、此經典に比較的疎緣なり。而して魏代戒律を創め、僧祇律を譯したる曇柯迦羅を始め、次いで姚秦、宋の時代に至りて他の四大律は譯せられ、從て律に通ずるもの少なからず、其以前に於て、戒律を以て稱せられたるもの亦頗る多し。梁傳に十三人を數ふるも、その以外、譯經、義解、神異の諸高僧中に其數甚だ多し。特に禪數の學に至りては、禪經の諸譯が特に多きを以ても其風潮を知るべく（境野氏『支那佛教史綱』111-114 當代經經中禪經の目錄あり。四十餘部を數ふ。然れとも禪的經典は決して是れに限らず。）又漢末爭亂を承けて、清談に傾ける當代の風尙を見て之を解すべく、諸高僧傳中、禪に關係なきもの殆ど無く、『出三藏記』集經序、若しくば後記を集めたるものを見るに、如何に當時、禪若しくは『般若』、『法華』一流の佛教が盛んに讀まれしかを知るべく、從て誦經者が愛讀せしものは『安般守意經』等の世高譯の禪經、『大品』『維摩』『道行』『放光』等の般若諸部、其他『般舟三昧

經』『首楞嚴經』『悲印三昧經』等にして、特に『維摩經』、『涅槃經』、『法華經』等は頗る愛玩せられたり。（『梁僧傳』誦經篇（致二80-81）二十一人中『法華』十二。『維摩』六。『般若』三。『涅槃』三。『十地』『金光明』各一人あり。）抑も初期の譯經は文質共に晦澁にして、人々たゞ轉讀するに過ぎず。道安、先づ注釋を始め（『和漢年契』には僧會よりと云へり）此前後より誦經の風漸く起りしものなるが、その流行せし經典中には『無量壽經』は無かりき。思ふに『觀經』の譯者なる畺良耶舍は、傳に依るに、「禪門專業、每一禪觀、或七日不起」と云へば、禪經の一として之を譯せしこと明かなり。（致二179）

抑も淨土門に於て傳統を數ふるに、馬鳴、龍樹、天親、菩提流支、曇鸞、道綽、善導となす。縱令菩提流支は『往生論』を譯し、『觀經』を曇鸞に附與し、淨土門の祖師に數ふるを得とするも、是れ北魏の人にして初期の人にあらず。支那佛教の初期にありては、殆んど淨土門の系統者無し。勿論支那淨土教の系統に三あり。善導流と慈愍流とは後代なるも、惠遠は東晉時代にして、羅什、覺賢と時を同ふせり。惠遠の禪觀念佛は支那に於ける淨土門の始祖と稱するを得べきも（『三藏記』（結一83）『統記』（致九259）東林法師、始以念佛三昧之道、開先一時、貽則千古。）唐代の淨土門家と其趣を異にし、所謂、習禪明律を以つて其特色とせるは、其傳に見て明かなり。從つて『無量壽經』に就きても何等の著述なく、惠遠の遺文は『出三藏記』『廣弘明集』等に散見するも、念佛に關しては念佛三昧詩序あるのみ。（略六126）而して其序文なるものも無量壽經の趣旨と相距る遠きが如し。惠遠の師なる道安に『淨土論』の著ありと稱するも、（『晉書』『高僧傳』、『樂邦文類』二、12等）傳並に『歷代三寶記』に其記事を欠き、傳文にては、道安は兜率上生を求願せりといふ。（致二25）其弟子曇戒は其死に臨みて、人、願生安養を勸むるや、其師道安等八人等と曾て約あり、兜率に生ずるの願を起こせしが故に彌勒佛名を誦すといふ（致二28）に併せ考ふるに、『淨土論』は極樂淨土論なるか否か既に不明にして、且つ其著の存在せしや、否やも殆んど疑はし。（『綱年通論』三云、法源遙觀之初由佛圖澄（致二18）而得安、由安而得道公、此三大忘儀礼則、或無以異といへるも、僧傳に見るに淨土の教義に關して、三代相繼の旨なし。）但し惠遠以前に阿彌陀佛の信仰者全くなしと云ふにあらず、僧傳を探るに僧顯傳に曰く、

顯以晉太興之來、南遊江左、復歷名山修已恒業、後遇疾綿篤、乃屬想西方心甚苦至、見無量壽佛降以眞容光照其身、所苦都愈、是夕便起、梁脩、爲同住及侍疾者說已所見、並陳因果、辭甚精折、至明清旦、平座而化、室內有異香、旬餘乃歇。（『梁僧傳』（致二30）

大興は東晉初期の年號にして、三一八年より三二一年の間にあれば、惠遠が淨土念佛を始めたる太元十五年に先だつ事七拾年前なり。曇戒以前大略二百年なり。

又元興元年（四〇二）に春秋七十六を以つて沒したる笠法曠の傳には。

每以法華爲會三之旨、無量壽爲淨土之因、常吟咏二部、有衆則講、獨處則誦、又云、時沙門笠道隣造無量壽像、曠乃晉其有緣起立大殿。（致二39）

元興元年は太元十五年より十四年後にして、惠遠は義熙十二年（四一六）に八拾有三を以て沒したるが故に、法曠は殆んと惠遠と同時の人なり。又晉廢帝太和元年（三六六）、太元十五年に先立つ事二拾五年前に沒した る、支遁（致二21）の「阿彌陀佛像贊並序」によるに晉代往々にして『無量壽經』の讀誦者ありしを想見せしむるものあり。

佛經記西方有國、國名安養、迴遊迴路距恒沙……其佛號阿彌陀晉言無量壽、國無王制斑爵之序、以佛爲君、三乘爲教、男女各化育於蓮

華中、無有胎孕之穢也……別有經記以錄其益云此晉邦五末之世、有率佛正戒諸師阿彌陀經、誓生彼國、不發誠心者、命終靈識化往之彼、見佛神悟即得道矣、近生末隣忝同殘跡、馳心神國、非所敢望、乃因匠人、圖亦神裴仰瞻高儀以質所天。（露五86）

此末文に見れば、支遁は西方淨土を欣ひし人ならざりしは明かなるも、經記と稱するは、前後の文に徴するに『無量壽經』、『觀經』、『小經』の類なるべく、由つて以て晉代淨土を願ひし人有りしを知るべし。

『無量壽經』の飜譯が二三世紀の間に開始せられ、其讀誦者、奉持者が四世紀間に僅に二三を數へ、正しくは五世紀以後に漸く流行するに至りしは、之を彼の朱子行が『小品般若』の首尾格礙あるによりて、遙に『大品』を于闐に求め、（註一）羅什の『般若』、『法華』、『智度論』、『中論』及び覺賢の『華嚴經』が譯成りて直に流行し、曇無讖の『涅槃經』を譯する以前、惠遠が法性論を著はして既に涅槃常住の教理を推論し、（致二30）其譯の成るや、盛に喧傳せられしに比すれば、『無量壽經』の流行甚だ後れたるに似たり。是れ主として、一は譯者が此經典の信仰者ならざりしと、又當時支那に於ける淨土教の氣運の未だ熟せざりしものありしとに依る。從つて印度、西域の佛教の何物たりしかを推するを得べし。

支那に於て佛教東漸の初期より今日に至るまで其信仰の機緩せるは觀音にして、阿彌陀佛、彌勒、觀音等は殆んど前後して支那に入る。觀音に就きては笠法義は常に觀音を念じ、且つ人に其神異を說き（致二23b 康僧會三年（三七五年、七十四歲））又惠遠を慕ふて廬山に投じたる慧度は、其病めるや觀音を念じ、其來迎により淨土に往生せりと云ふ。而して法義は法華經に通ぜりと云ふ。（致二28）外來三藏にては一卷無量壽經の譯者なる、求那跋陀羅は元嘉十二年（四五五）海路、廣州に來る。其師子國を發して后、途中、觀音を念じて水難を免れ、支那に來りても觀音を信せり。（致二18a）『法顯傳』亦同樣の事蹟を傳ふ。（致六8a）道安の彌勒信仰者なりし事は前に既に云へり。而して道安は支那に於ける兜率往生を願へる始めなりしと云ふ。（前田博士『慈恩と研究』132『梁僧傳』22）覺賢亦禪定に入り兜率に往いて彌勒に敬を致せりと云ひ、（致二10b）僧輔も亦兜率上生を欣求し、（致二5）道安の弟子曇戒が特に安養を願はずして兜率を願へるは先に述べたり。智嚴は得戒の有無を正さんが爲めに兜率に到りて彌勒に諮れり。（致二11b）此の如く彌勒觀音の信仰と共に阿彌陀佛の信仰も此時代より發生し、上に擧げたる僧顯、法曠、道隣の外、阿彌陀佛を信仰し若しくは西方往生を求願せし人を列擧すれば、惠遠は云ふを待たず、慧虔は觀音を信ずると共に安養に生ぜん事を願ひ、（致二8b）慧持亦道を求めて西方を所期とし、（致二8b）慧永は厲行精苦、西方の行を修し、義熙十年、佛の來迎に接せりといひ、（致二8b）僧濟は其死に際して人をして『無量壽經』を讀誦せしめ、（致二8b）僧叡は『大論』、『中論』、『十二門論』等の諸論並に『大小品』、『法華』、『維摩』、『思益』等の諸經に序を書ける、羅什門下の高僧にして、又安養に生せん事を願ひ、行住座臥西方に背かず、奇瑞を得て往生すといふ。（致二9a）道祖の弟子曇鑒及同代の道海、慧龕、慧恭、曇弘、道廣、道光等亦彌陀の淨土を願ひ、而して是等は惠遠若しくは其徒の感化に出でしものにして、此時代より漸く阿彌陀佛の流行を見るに至れり。釋法度、寶亮（致二8b）法琳（致二6b）曇弘（致二9a）は『無量壽經』若しくは『觀經』を講讀し西方を願へり。柘跋魏の時に崔皓の讒に會ひ、玄高と共に害せられたる崇公は亦常に安養を祈り、慧進は傍ら『法華』を誦して安

發を祈り、（致二）僧亮は、伍子胥の銅器を以て無量壽の金像を造り、（致二22.b又『出三藏記』法苑雜錄原始集第七には荆州釋僧亮造無量壽丈六金像記といへり。）宋孝武帝は無量壽鎔石像を作る。（三藏記 仝上）而して法度以下、此等は悲遠の寂後三十餘年、宋の文帝、元嘉の末年（四五〇）より齊、梁の永元、天監に至る間の、直接阿彌陀佛に信仰を繫ぎ、若しくは關係あるべしと思はるゝ人々なり。而して曇鸞は宋の後廢帝、元徽四年（四七六）に生れ、菩提流支は魏、永安元年（五〇七）支那に來る。次いで二年を經て『往生論』を譯せり。曇鸞の流支に會見したるは此前後の事なるべく、印度に於ける無量壽の釋論は茲に始めて飜譯成り、支那に於ける『無量壽經』の釋義たる『略論安樂淨土義』幷に『往生論』の註とは曇鸞によりて著はされ、此より無量壽經は支那淨土敎史上に重要なるものとなれり。

之を要するに、主として彌陀の信仰を傳へし『無量壽經』は其飜譯の始めは、支那佛敎史の發端と殆んど時を同うし居るにも拘はらず、支那佛敎に著大なる影響を與ふるに至りしは四世紀後半より五世紀以後の事にして、同じく大乘經典なるも『般若』、『涅槃』、『法華』、『華嚴』の諸經が多くは譯者の信仰と飜譯の經典とが相一致して、譯經の成ると共に流行せるに比すれば、久しく世の注目を惹かざりしもの、如し。

四　表

阿彌陀佛並に其淨土を記載せる經論を擧ぐるものに『樂邦文類』『淨土指歸』『西方合論』『往生要集』『淨土論』『長西錄』『蓮門經藉錄』等あり。就中『阿彌陀佛說林』は該博詳密漏らす所甚鮮し。今は右說林に基き、外『閱藏知津』等により、縮刷藏經中に檢文し、正明三經を除きて餘他の經、論、集、を集め、譯者の次序を以て之を排列せり。但し譯者の生國及其譯年の如きは異論少からず。此には其大略を記せるのみ。此表は主として藏經の丁數を明記して研究者の資助となすを目的とせり。初め阿彌陀佛極樂の名義。阿彌陀佛に親緣ある諸佛菩薩。各經文の要領の三項を下欄に錄すべかりしも、紙幅の都合により第三項を略せり。又所出經論極めて多く二三脫略訛誤なきを保する能はず。龍樹の十二禮文は縮藏に載せず。阿彌陀佛說咒唯た鹿藏に載するのみ。此他別時意趣を說くに就き阿彌陀佛に關說せるものに攝大乘論（眞諦譯、十七、11（一一八三、來九 54.a）（玄奘譯、三十五、11（一二四七、來九 37.a）（佛陀扇多譯）（往八 42.a, 116.a）（達摩笈多譯廿五、10）（往九 20—1）（玄奘譯五、10（往七 36.b—27.a）（同九、5（往九 72.a）大乘阿毘達磨雜集論（玄奘譯十二、14（一一九九、來八 77.b）大乘莊嚴經論（波羅譯六、9—10（一一九〇、來四 31.b）あり。以上を併せて表中に除けるが故に茲に揭出せり。此他に眞僞若くは存否不明のものは之を省略す。尙淨土宗全書第一卷（199—208）には更に二三を增し、縮刷藏經の序次に從つて配列せり。

經名	南條目錄番號	譯者	譯者生國	年時（主として譯經の）	說林丁數	縮刷藏經丁數	佛名	土名	
般舟三昧經三卷本	73	支婁迦讖	月支	一隱（或二六四來）一八六	一 17	玄九 29.ab 32.a	阿彌陀佛	須摩提	阿彌陀佛と一類とせらるゝ佛陀名は本生所値の佛四佛五佛は密敎にて普通に稱せらるゝもの
							阿彌陀佛	須摩提	
							無量壽	阿閦佛	
							無量壽	蘇摩提	
							無量壽	安樂	
							無量壽	清淨	
							無量光	極樂	
							無量光	無量壽	
							清淨光		

般舟三昧經一卷本	73	仝	仝	仝		玄九 24.a	阿彌陀		須摩提
後出阿彌陀佛偈經	202	失譯			六 3	地十二 75	得佛號無量	世界名清淨	
作佛形像經	289	失譯			一 30	宙七 75.a	阿彌陀		
拔陂菩薩經	76	失譯			一 19	玄九 43.b	阿彌陀		須摩提
維摩詰經	147	支謙	月支人	二二三—二五三	一 25	黃七 38.b	無量	一切安樂國	阿閦、釋迦、寶首、樂析、寶月、寶淨
老女人經	224	仝	仝	仝	一 30	黃五 60.a	阿彌陀		
慧印三昧經	256	仝	仝	仝	二 20	宙一 42.b	阿彌陀		阿閦、光明
無量門微密持經	355	仝	仝	仝	三 9	成九 5.b	無量壽	須摩訶提	錠光、寶首曜
菩薩道樹經	378	支謙	月支	二二三—二五三	三 26	宙七 36.a	壽極王 法無	安隱國	須摩提 須摩訶提作
菩薩生地經	377	仝	仝	仝	仝	宙七 37.b	無量	清淨國	無量壽 無量明 [illegible]
舊雜譬喩經	1359	康僧會	康居	二五一—二八〇	五 31-33	辰七 27.b 28.b	阿彌陀		須摩提菩薩

文殊師利佛土嚴淨經	31	法護	燉煌 月支 天竺	二六六—三一三 三一七	一 13 14	地十 8.b 11.b	無量壽	安養國	
太子刷護經	49	仝	仝	仝	一 14	地十二 1.a.b 2.a	阿彌陀	須摩提	
方等般泥洹經	116	仝	仝	仝	一 21	盈九 62.b	阿彌陀		
正法華經	138	仝	仝	仝	一 24	盈二 23.b	無量壽		阿閦、釋迦、等十六王子、大通衆慧
阿惟越致遮經	150	仝	仝	仝	一 25	盈三 67.a	阿彌陀	安樂國	
持心梵天所問經	177	仝	仝	仝	一 29	宇一 25.b		安樂國	
決定總持經	242	仝	仝	仝	二 13 14	宙八 49.b 50.a	阿彌陀		阿閦、光世音
賴吒和羅所問德光太子經	518	仝	仝	仝	四 16 17	宙六 20.b	無量壽		釋迦、吉義、無怒
濟諸方等學經	252	仝	仝	仝		盈九 107.a			大月、德嚴、等
賢劫經	403	仝	仝	仝	三 2-4	黃四 6.a.b 8.a.b 46.a 50.b	阿彌陀（阿彌陀の佛名を擧ぐれば無量[illegible]佛、無量光氏、[illegible]（千佛名號品）[illegible]あり（千佛興立品）又た無量門[illegible]名多し）		阿閦、淨嚴辨、吼音雷(?)（50.b, 8.b 黃四）（6 黃四）
寶網經	385	仝	仝	仝	三 27	黃四 84.a	阿彌陀		阿閦

海龍王經	生經	三曼陀颰陀羅菩薩經	菩薩受齋經	太子和休經	七佛所說神呪經	大灌頂神呪經	大方廣華嚴經	文殊師利發願經	出生無量門持經	觀佛三昧海經
458		1104	1105	50	447	167	87	1336	356	430
仝	仝	聶道眞	仝	失譯	失譯	帛尸梨蜜多羅	佛陀跋陀羅	仝	佛陀跋陀羅	仝
仝	仝	支那	仝			西域	迦維羅衛	仝	迦維羅衛	仝
仝	仝	二八〇—三一二	仝			三〇七—三一二	三九八—四二一	仝	三九八—四二一	仝
三 31		五 28	五 29 30	一 14	四 14	一 26-27	一 1-3	一 3	三 9	三 29 30
宇九 61.a	宿五 55.a	列二 74.b 75.b	列二 105.b	地十二 2.b	成七 7.a.b	成六 62.a 64.b 65.a	七天 35 八天 46.a 等	天十一 23.a	成九 7.b	黃五 35.b 36.a
	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀		
無量壽							無量壽		無量壽	無量壽
							無量光			
			須摩提							
		須呵摩提	須訶摩持							
安樂世界							安樂國	安樂國		
							極樂國			極樂國
						無量壽國				
	元明作須訶摩提									
										四佛

大般泥洹經	請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經	十住斷結經	菩薩處胎經	菩薩瓔珞經	中陰經	妙法蓮華經	維摩詰所說經	諸法無行經	思益梵天所問經	思惟要略法
120	326	376	133	1092	463	134	116	164	190	1373
法顯	難提	佛念	仝	仝	仝	羅什	仝	仝	仝	羅什
支那	西域	涼州	仝	仝	仝	龜玆	仝	仝	仝	龜玆
三九九印度入り四一四歸國	四一九頃	三七四—三八四 四一七	仝	仝	仝	四〇二—四一二	仝	仝	仝	四〇二—四一二
一 21 22	三 6	一 31	四 10 11	四 13	三 31	一 23	一 24 25	一 26	一 19	六 23 24
盈九 5.b	成十 45.a	宇三 58.b 93.b	盈十 73.b 等	宇四 70.b 71.a	盈十 17.b	盈一 25.b	黃七 23.a	宇二 21.b	宇一 2.b	暑六 32.ab
			阿彌陀	阿彌陀		阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀		
		無量		無量						
	無量壽	無量壽			無量壽					無量壽
			清淨光							
			安樂國						安樂國	
								清淨土		
極樂國										
			無量壽國							
							一切樂莊嚴			
			阿閦	無[illegible]		阿閦	釋迦			
						十六王子等	阿閦			
						大通智勝佛	寶月			
							寶嚴			
							等			

十住毘婆沙論	1180	仝	仝	仝	七 1-5	暑八 7.a 19.a.b	阿彌陀		無量明佛				世解（據冠註）　世自在王乃至 實相（19.a 暑八）
大智度論	1160	仝	仝	仝	七 5-11	往一 35.a 59.a 62.a 68.a　往二 6.a 70.b 75.b 102.b 103.a　往三 50.a	阿彌陀					清淨無量壽	
大方等大集經	61	曇無讖	西域	四一四—四二一	一 15 16	玄二 15.b 16.a 等　往五 67.a 70.a 等	阿彌陀	無量壽		安樂國	極樂國		阿閦（70.a 往五）
大般涅槃經	113	仝	仝	仝	一 20 21	盈五 8.b 51.a 18.a　盈六 18.b		無量壽		安樂國			
金光明經		仝	仝	仝		黃九 45 53.a							
合部金光明經	130	仝	仝	仝	一 22	黃九 64.a 72.b		無量壽					阿閦　四佛　觀音（2.a.b 64.a 黃九）　勢至　阿閦等二十佛　普賢等多佛（72.b 黃九）　[illegible]
悲華經	142	仝	仝	仝	二 1-10	宙三 3.a.b 8.a.b 42.b 53.b				安樂國			
大方等大雲經	244	仝	仝	仝	二 14-16	盈十 16.a.b		無量壽	菩薩無邊光あり	安樂國			
大方等陀羅尼經	421	法衆	高昌	四〇二—四一二		成五 73.b 70.b 等		無量壽		安樂國		妙樂世界	
不退轉法輪經	157	失譯			一 25	盈三 44.b			欲見三佛陀安菩薩思議	安樂		妙樂世界	
大乘大悲芬陀利經	180	失譯			二 10 11	宙三 69.a.b 70.a.b 91.a 等	阿彌陀			安樂國			
南本涅槃經	114	慧嚴等	支那	四二四—四五三	一 20 21	盈七 9.b 等		無量壽		安樂國	極樂國		
如來智印經	255	失譯			二 18 19 20	宙一 34.a	阿彌陀				極樂國		
佛說老母經	225	失譯			一 30	黃五 60.b	阿彌陀						
法華三昧經	135	智嚴	涼洲	四二七頃	一 24	盈二 100.b	阿彌陀						
廣博嚴淨不退轉法輪經	158	仝	仝	仝	一 25 26	盈三 21.b	阿彌陀			安樂國			
出生無邊門陀羅尼經	360	仝	仝	仝	三 11	成九 22.a.b 等		無量壽					
菩薩內戒經	1082	求那跋摩	罽賓	四三一（來）四三一（寂）	五 27 28	列一 95.a 96.b	阿彌陀						
央掘魔羅經	434	求那跋陀羅	中印度	四三五—四四三	四 12	黃十 57.a				安樂國			
大法鼓經	440	仝	仝	仝	四 12	盈四 65.b				安樂國			

阿難陀目佉尼訶離陀經	358	求那跋陀羅	中印度	四三五-四四三	三 10	成九 12.b	阿彌陀		
拔一切業障根本得生淨土神咒經	201	仝	仝	仝	二 12	地十二 71.b	阿彌陀、阿彌多婆		
觀世音菩薩得大勢至菩薩受記經	395	曇無竭	幽州	四五三印度ヨリ歸國	三 27 28	地十二 82.a 85.a	阿彌陀	安樂國	
菩薩念佛三昧經	71	功德直	西域	四六二頃	一 16	玄八 66.a.b 等	阿彌陀	安樂國	不動(玄八62)
舍利弗陀羅尼經	353	僧伽婆羅	扶南	五〇六-五二〇	三 8	成九 18.ab	無量壽		
菩薩藏經						列二 76.b	無邊光明	跋陀羅	(東)月勝吉、(南)旙檀吉、(西)無邊光明、等十方佛
大乘起信論	1250	眞諦	支那	五六九寂	七 12	來十 41.b	阿彌陀	極樂國	
寶髻經四法優婆提舍	1241	毘目智仙				宿十一 3.b			
阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經	485	失譯			四 1 2	地十二 70.ab 77.a	阿彌陀	安樂國、極樂國	
過去莊嚴劫千佛名經	405				四 4	黃三 41.a	無量壽		
現在賢劫千佛名經	406	失譯			四 4 5	黃三 48.a	無量壽、無量明佛		

虛空藏菩薩問七佛陀羅尼經	368	失譯			三 26	成八 34.a			
稱揚諸佛功德經	402	吉迦夜	西域	四七二	三 1	黃四 61.a	阿彌陀	安樂國	
究竟一乘寶性論	1236	勒那摩提	中印度	五〇八	七 12	宿二 102.b	無量壽		
入楞伽經	176	菩提流支	北印度	五〇八-五三五	一 28	黃六 71.a	阿彌陀	安樂國	
勝思惟梵天所問經	180	仝	仝	仝	一 28 29	宇一 51.b	無量壽	安樂國	
無字寶篋經	221	仝	仝	仝	二 12 13	宇三 4.a	阿彌陀		
諸佛經	243	仝	仝	仝		宙八 48.b	無量壽		
佛名經	404	仝	仝	仝	四 2-1	黃一 1-77		安樂國	此經の佛名は悉く阿彌陀佛の[illegible]
無量壽經優婆提舍願生偈	1204	仝	仝	仝	七 11	宿十一 1.a	阿彌陀	安樂國	
阿難陀目佉尼訶離陀鄰尼經	357	佛陀扇多	中印度	五二四-五三八 五三九	三 9 10	成九 10.a	阿彌陀		
								無量壽國	

不思議功德諸佛所護念經	僧伽吒經	大寶積經	大悲經	月燈三昧經	百佛名經	大乘同性經	十一面觀世音菩薩神咒經	大乘方廣總持經	大寶積經	添品妙法蓮華經
412	419	23	117	191	411	195	327	258	23	139
失譯	月波首那	那連提耶舍	仝	仝	仝	闍那耶舍	耶舍崛多	毗尼多流支	闍那崛多	仝
	中印度	北印度優菩那	仝	仝	仝	中印度摩竭陀	北印度犍陀羅	北印度優菩那	北印度犍陀羅	仝
	五三八—五四〇 或五四一	五五七—五六八	仝	仝	仝	五六四—五七二	五六一—五七八	五八二	五八五—五九二	仝
	三 31	一 5-13	一 21	一 20	四 5	二 12	三 7	二 18	一 5	一 24
黃三 86-87	玄九 94.a	地四 81.	盈九 88.a.b	玄十 3.a 39.b 等 21.b 15.a 21.b	黃三 80.a	宇二 4.b 9.b 等	成十二 21.a 22.a	盈九 104.a	地五 1-6	盈二 78.a
	阿彌陀			阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀		阿彌陀
		無量壽							無量壽	
				彌陀						
		安樂國								
				安樂妙世界						
			無量壽國				無量壽國			
						蓮華開敷星			阿閦	
						龍主王			釋迦	
						寶德				
						(9.b二字)				

諸法本無經	五千五百佛名神咒除障滅罪經	觀察諸法行經	月上女經	一向出生菩薩經	東方最燈王如來助護持世間神呪	如來方便善巧呪經	大法炬陀羅尼經	大乘三聚懺悔經	出生菩提心經	大方等大集賢護經
163	408	424	411	359	366	367	422	1090	450	75
闍那崛多	仝	仝	仝	仝	闍那崛多	仝	仝	仝	仝	仝
北印度犍陀羅	仝	仝	仝	仝	北印度犍陀羅	仝	仝	仝	仝	仝
五八五—五九二	仝	仝	仝	仝	五六一—五九二	仝	仝	仝	仝	仝
一 26	四 4 5	四 5-10	四 12	三 10 11	三 25	三 25	三 29	五 28	三 31	一 19
宇二 30.b	黃三 13.b 等	宇八 7-89.b 等	黃八 27.b	成九 3.b	成七 34.b	成八 37.a	宙九 41.a 67.b	列二 82.b	宙二 11.b	玄九 4.ab
	阿彌陀		阿彌陀	阿彌陀				阿彌陀	阿彌陀	阿彌陀
	此他に類似の名頗る多し			(明宋)						
		無量壽			無量壽		無量壽			
			阿彌多婆 (隋)							
					無量光 (隋譯)					
	無邊光如來 阿彌梨多耶							他佛名中有無邊光無礙光等		
			安樂土		安樂國		安樂國			安樂國
阿彌多由國										
		不動 (7.b八字)								

發覺淨心經	38	闍那崛多	北印度犍陀羅	五六一—五九二	一 14	地十一 17.b 24.a	阿彌陀 / 陀三本俱作多 / 極樂國
大方等大集菩薩念佛三昧經	72	達摩笈多	南印度羅囉	五九〇—六一六	一 16	玄八 31.b 43.a 60.a 等	彌陀 / 放光無邊光無量相 / 安樂國
藥師如來本願經	170	仝	仝	仝	一 27	黃四 85.a.b	阿彌陀 / 極樂國
顯無邊佛土功德經	95	玄奘	洛陽	六二九入竺 六四五歸 六六四寂	一 4	天十 84.b	無量光
大般若波羅蜜多經	1	仝	仝	仝	一 20	洪一 16.a 等	極樂國
說無垢稱經	149	仝	仝	仝	一 25	黃七 58.b	無量壽 / 安樂國 / 釋迦 / 不動 / 寶勝 / 寶月 / 等
不空羂索咒心經	310	仝	仝	仝	二 21	成十 8.a	無量光
十一面神咒心經	328	仝	仝	仝	三 7	係五 21.b	極樂國
清淨觀世音菩薩普賢陀羅尼經	494	智通	支那	六二七—六四九 或六五〇—六五三	四 15	成十 43.b	阿彌陀 / 四佛
千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神咒經	318	仝	仝	仝	三 4	係五 30.b 34.a	阿彌陀 / 阿彌多婆
觀自在菩薩怛嚩多唎隨心陀羅尼經	325	仝	仝	仝	三 6	係五 14.b	極樂國

寶星陀羅尼經	84 89	波羅頗密多羅	中印度	六二七來—六三三寂	一 19	玄六 71.a 75.a	阿彌陀 / 安樂國 / 如 / 四佛 / (玄六 75.a)
						閏四 28.a 34.a	
佛說陀羅尼集經	363	阿地瞿多	中印度	六五二頃	三 11-24	閏四 39.b 40.a 37.b 38.a 39.a	阿彌陀 / 無量壽 / 阿彌陀婆(去聲)耶 / 外有彌陀大身咒阿密唎多之語 / 安樂 / 無量壽國 / 四佛 / 阿閦
						閏五 26.a.b	
千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經	320	伽梵達摩	西印度	不明	三 4	成十 32.a 34.b	阿彌陀
離垢慧菩薩所問禮佛法經	521	那提	中印度	六五五來—七三〇	四 17	黃五 58.b	無量壽 / 十方佛
證契大乘經	196	地婆訶羅	仝	六七六—六八八	二 12	宇二 14.b 19.a	無邊光如來
大乘遍照光明藏無字法門經	223	仝	仝	仝	二 13	宇三 2.b	阿彌陀 / 清淨佛
大乘密嚴經	444	仝	仝	仝	四 12	黃八 33.a	無量壽 / 極樂國
佛頂最勝陀羅尼經	352	仝	仝	仝	三 7	成五 60.a	阿密唎多 / 極樂國
大乘離文字普光明藏無字法門經	222	仝	仝	仝		宇三 5.b	阿彌陀 / 清淨佛

非	心觀	佛頂	大	金	佛	不	陀羅	大	無	不	般若	大	佛	佛	尼拔
般	陀山	本師	金	光	頂	空	尼世	一陀	垢淨	空	羅蜜	光	頂	頂	浮陀
王	經准	寶	色	明	如	羅	陀奇	守護	光大	垢	經	垢	尊	尊	除佛
陀	經苦	頂瑜	孔	最	來	密	密	心尼	陀	陀	陀	陀	陀	陀	陀
羅	尼陀	功德	雀	勝	佛	羅	心羅陀	羅陀	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅
尼	咒如	德光	王	咒	頂	尼	咒	王	尼如	咒來	尼	尼	尼	尼	尼
呪	經怨	經七	經	經	經	經	經怨	經	經怨	經法	經	經	經	經	經
504	323	172	306	120	250	313	322	541	380	314					
仝	仝	仝	羅婆仝	仝	淺	仝	仝	我見	到陀	李解					
			薩作		評			慢	山	脫					
仝	仝	仝	仝	仝	范陽	仝	仝	羅羅北	祝貝	阿北					
								藏印	經	波印					
								經		度					
仝	仝	仝	仝	仝	七七	仝	仝	七六	不一七	不一七					
					一一			〇〇	〇	〇					
					〇〇			六一九	三	明	五				
四	三	一	二	一	三	二	三	四	三	二					
15	5	27	20	23	7	20	5	19	28	21					
成	倍	成	成	黃	成	成十	成	四	倍	倍					
八	十	五	八	九	五	一.a二.a	十一	六	五	五					
				2.a		7.a	39.b		41.b	79.a					
		57.b		2.b		10.b		45.a	42.b						
77.a.b	41.a	59.a.b	5.a	11.b	56.a		40.b	47.a	43.b	86.b					
陀羅阿			陀羅阿		陀羅阿				陀羅阿						

大	觀世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼呪經	大乘入楞伽經	寶	大方廣如來不思議境界經	大方廣佛華嚴經	不空羅尼呪心經	大方廣佛頂陀羅尼經	大方廣佛頂尊勝陀羅尼經	佛頂尊勝陀羅尼經	佛頂放光摩訶般若波羅蜜多經	尼拔陀羅尼呪經	阿彌陀佛の研究													
1249	221	177		97	88	96	94	318	349	351															
仝	仝	仝	仝	仝	雙鶴陀羅	仝	般若	波羅	杜行頭	阿地															
							菩提	利陀		經淡															
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	于闐		炎那	中印度															
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	六七〇一九五〇	六一八九一	六七六	六七九	六八一七八六													
七	三	一	一	一	一	一	一	一	三	三	三	三													
11	5	27	5	4	3	4	4	4	7	7	7	7													
來十	成十	黃六	地三	天一	天四	天三	天十一	天十一	四六	成五	四六														
						11.b	23.b																		
35.a	37.a	113.b	94.a	25.a	91.b	22.a	28.a	30.b	57.b	62.a	61.a														
	38.b	114.a	95.a																						
陀羅阿	陀羅阿		陀羅阿	陀羅阿	陀羅阿																				

諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無	諸佛無
婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿	婆多羅阿
光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音	光世音
國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師	國樂師
光定(市)　伸四																									
空海七(北)(2.a九貳)																									
諸佛無(西)　佛陀勞國阿																									
陀羅(東)(11.b九貳)																									

香王菩薩陀羅尼呪經	503	仝	仝	仝	四	16	閏十 12.b	陀彌阿
一切法功德莊嚴王經	496	仝	仝	仝	四	15	成八 74.a.b 77.a	婆多彌阿；國樂安；國樂極；動不
無常經附臨終方訣	727	仝	仝	仝	四	19	宿七 20.a	國壽量無
龍樹菩薩勸誡王頌	1141	仝	仝	仝	六	27	藏八 94.a	
廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經	535	菩提流支	南印度	六九三—七一三	四	18	成五 26.a 33.a	明光淨淸寶；國樂極
大寶積經	23	仝	仝	仝	一	5	地一 32.a；地五 45.b；地五 52.a；地六 1.b；地六 25.a	陀彌阿；量無；壽量無；說令量作箭無 林樣壽無說量；國樂極；國量壽無；閦阿 (32.a一地)
不空羂索神變眞言	317	仝	仝	仝	二	21	閏十一 5.a 7.b；9.b 10.b 16.a 18.a 23.a；26.b 27.a 27.b 28.a 28.b；32.b 36.a 36.b 37.b 51.a；53.b 54.b 55.b 57.b 60.a	陀彌阿；壽量無；婆多彌阿；光量無；彌耶府 餘明明；國樂安；國樂極；土報淨淸；迦釋 王光觀間世 (王間世)；那舍盧毘 王在自間世 (70.a一十閏) (28.b 仝) (68.a 仝)

（不空羂索神變眞言 續）							66.b 67.a 68.a 68.b 70.a；70.b 72.a 73.a 80.b 81.a；82.a 85.a 89.a 93.b 97.b；98.a；閏十二 2.a 3.a；5.a 6.b 7.b 10.b 32.b；35.a 47.b 等	
文殊師利寶藏陀羅尼經	448	仝	仝	仝	四	14	餘五 63.b 65.b	陀彌阿；婆多彌阿；動不心 佛七等
如意輪陀羅尼經	324	仝	仝	仝	三	5	餘五 2.a 6.a	陀彌阿；國樂極
一字佛頂輪王經	532	仝	仝	仝	四	18	閏六 23.a	光量無
千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經	319	仝	仝	仝	三	4	餘五 24.a 28.a	陀彌阿；婆多彌阿
大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經	446	般刺密帝共伎迦	中印度	七〇五	四	13	成一 20.b 25.a	耶婆多彌阿；彌陀；閦阿 迦釋 勒彌 音觀
大毘盧遮那成佛神變加持經	530	輸波迦羅	中印度	七二四—七二五	四	17	閏一 30.a 45.a	壽量無；佛四
一金剛頂瑜伽中略出念誦經	534	金剛智	南印度摩賴耶	七二三—七三〇	四	16	閏一 82.a.b	陀彌阿；壽量無；光量無；宮足界極 天知樂

千手千眼觀世音菩薩大身咒本	金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經	金剛頂經瑜伽觀自在王如來修行法	大吉祥天女十二名號經	大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經	葉衣觀自在菩薩經	觀自在菩薩說普賢陀羅尼經	八大菩薩曼荼羅經	瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀經	一髻尊陀羅尼經	不空羂索毘盧遮那佛大灌頂光真言經
	1030	1430	958	959	973	980	981	985	1000	1002
金剛智	仝	仝	不空	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
南印度摩賴耶	仝	仝	北印度	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
七二三—七三〇	仝	仝	七四六—七七一	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
	五 19	六 26	四 26	四 26	四 27	四 27	四 27	四 28	四 28	四 28
成十 23.b	閏二 40.b	閏五 48.a	閏十四 38.a	閏十四 38.b	閏十二 62.a	閏十 34.a	閏九 68.b	成八 42.b	閏十二 71.a 73.b	閏七 72.a
								阿彌陀	阿彌陀	
					無量壽	無量壽	無量壽			
					阿彌多婆					
紇阿馱耶 哆弭[illegible]		阿[illegible] [illegible]								
				安樂國						
			極樂					極樂國		極樂國
									無量壽國	
	極界足王 樂知天宮									
						四佛		安勝 離怖畏 廣博身 妙色身 多寶 佛		

一字奇特佛頂經	出生無邊門陀羅尼經	阿唎多羅陀羅尼阿嚕力經	大寶廣博樓閣善住秘密陀羅尼經	菩提場所說一字頂輪王經	金剛頂瑜伽念珠經	最上根本大樂金剛不空三昧大教王經	普遍光明焰鬘清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經	大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經	金剛恐怖集會方廣軌儀觀自在菩薩三世最勝心明王經	十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經
1023	936	1021	1028	1024	1036	1037	1042	1044	1047	1035
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝
四 31	三 7	五 8–10	五 15	五 15	五 17 18	五 18	五 21	五 21 22	五 23	五 24 25
閏五 70.b	閏八 26.a.b	閏十 35.a.b 37.a 38 39.a	閏七 84.a	閏五 88.b	閏十五 23.a.	成三 46.a 45.b	閏九 77.a.b	閏十三 3.b 11.a 16.b	閏十 27.a.b 29.b 31	閏十 50.a.b 帙
		阿彌陀						阿彌陀	阿彌陀	
無量壽	無量壽			無量壽	無量壽	無量壽		無量壽		
									阿彌多婆	
										阿唎 密帝
		安樂國					安樂		安樂	
極樂國		極樂國	極樂國				極樂	極樂		極樂
								無量壽		
						五佛				

佛說大方廣曼殊室利經觀自在多羅菩薩儀軌經	1050	不空	北印度	七四六—七七一	五 23	閏十一 66.b			無量壽							
金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大敎王經	1020	仝	仝	仝	五 30	閏二 60.b 63.a			無量壽		無量光	阿彌多鉢羅婆				四佛
金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經	1410	仝	仝	仝	五 30	閏九 10.b			無量壽		無量光					
金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經	1383	仝	仝	仝	五 30 31	閏十 42.a 44 50			無量壽							
無量壽如來修觀行供養儀軌經	1412	仝	仝	仝	六 19-23	閏五 42.a 45	阿彌陀	阿彌多由	無量壽	阿彌多婆		阿密嘌多			極樂	
大樂金剛薩埵修行成就儀軌經	1386	仝	仝	仝	六 25	閏九 2.a.b					無量光					
成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌經	1412	仝	仝	仝	六 25	閏七 66.b						無量壽命				
金剛頂瑜伽他化自在天理趣會普賢修行念誦儀軌	1390	仝	仝	仝	六 25	閏九 5.b	阿彌陀		無量壽							
觀自在菩薩如意輪念誦儀軌	1394	仝	仝	仝	六 25	閏十 71.b									極樂	
大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋	1407	仝	仝	仝	六 26	閏八 8.a			無量壽					安樂	極樂	
金剛王菩薩秘密念誦儀軌	1400	仝	仝	仝	六 26	閏十四 13.a			無量壽							

金剛頂經觀自在王如來修行法	1431	不空	北印度	七四六—七七一	六 27	閏五 48.a		無量壽	無量光	安樂	極樂
金剛頂蓮華部心念誦儀軌	1436	仝	仝	仝	六 27	閏二 45.a 47.b		無量壽			
金剛頂瑜伽護摩儀軌	1443	仝	仝	仝	六 28	閏五 30.b 31.a		無量壽			
陀羅尼門諸部要目	1452	仝	仝	仝	六 28	閏四 15.a	阿彌陀				
金剛頂瑜伽三十七尊禮	1453	仝	仝	仝	六 28	閏十五 12.a 13.a	阿彌陀			安樂	
金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身內證智眷屬法身異名佛最上乘秘密三摩地禮懺文(略稱金剛頂瑜伽三十七尊禮)		仝	仝	仝		閏十五 10.a					
百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚	1457	仝	仝	仝	六 29	閏十五 10.a		無量壽			
瑜伽集要焔口施食儀		仝	仝	仝	六 29	成十三 75.a 79.b 83.b 等	阿彌陀				
金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論	1319	仝	仝	仝		閏一 10.a 9.b	阿彌陀				
瑜伽蓮華部念誦法	1429	仝	仝	仝		閏十 24.b					

經觀	空觀	經觀一切	佛說	明大乘	觀一切	現	一切	無量	觀自在	十八	阿								
菩薩	觀自在	一切	聖觀	王如來	如來	伽	如來	壽大	菩薩中	陀羅	彌								
多佛	菩薩百	佛	自在	如來真	菩薩	大	多聞	陀羅	陀羅尼	尼	陀								
母般	八名	頂部	菩薩	陀羅尼	菩薩	牧	陀羅	尼	經	尼	佛								
若經	經	經等	陀羅尼	經	說	王	尼	經		經	說								
828	816	815	1061		1031	1022	910	913	910	803	1454								
仝	仝	天竺	法	法	仝	仝	仝	仝	仝	仝	佛の研究								
仝	仝	異	異	天	仝	仝	仝	仝	仝	仝									
仝	仝	極迦羅北印度	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝								
仝	仝	五天竺	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	一〇一—九七三								
四	四	四	五		五	四	四	四	四	四	四								
20	20	20	27		24	10	26	25	25	25	25								
成十二	成八	成十二	成三	成八	成十三	27.b 28 38.a 41.a 24.a 42.a 26.a	成四十	成十二	成十	成八	41.b	7.a							
74.b	27.b	62.a	60.b 62	7.a	13.a		42.b	37.a	41.b	7.a									
陀羅尼								多羅尼											
誐達無	誐達無	誐達無	誐達無	誐達無	誐達無			誐達無											
度修羅尼																			
光放無																			
多羅尼	野多阿	波羅																	
彌波	波羅																		
樂悟	樂悟	樂悟	樂悟	樂悟	樂悟														
迦葉	佛四	佛四																	
維摩	(60.b三成)	(24.a四成)																	
照觀六																			
乙經																			

無垢	日	聖	遮一	阿佛	聖觀	今	大	愛											
垢	說	說	切如	說特	說菩	國	方	尊											
經觀	如	說	來	羅一	薩陀	界	說	捉											
一切	所	神	如來	百八	羅尼	主	佛	佛											
佛說	聞	咒	真言	名稱	經	陀	菩	心											
功德	佛	經	特經	經		羅	薩	戒											
陀羅	執	軌	細說			尼	陀	儀											
尼經	經	經				經	羅	經											
820	888	881		1040	871	810	703	978	89	1454									
仝	仝	法	仝	仝	仝	仝	法	仝	說	不									
		異					天		岩	佛の研究									
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	中印度	仝	國	北印度									
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	賀	賀									
仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	仝	七七—四六八七—五一									
四	四	四	七	五	四	四	四	四											
24	24	24	15	22	21	20	20	27											
成八	成八	天十	經說十ナシ阿	成十三	成六	成八	成八	四七	天六	四一									
72.b	63.b	85.a		41.a.b	23.a 16.b	28.b	33.a	25.b	77	2.b									
多羅尼								陀羅尼	仏										
誐達無	誐達無	誐達無	誐達無																
度修羅尼																			
光放無																			
樂悟																			
樂悟	樂悟																		
佛說																			
初淨																			

一切如來大秘密王未曾有最上微妙大曼拏羅經	1018	天息災	北印度惹爛駄羅或へ迦濕彌羅	九八〇(來) 一〇〇〇(寂)	四 30 31	成三 81.a 82.b 89.b 81.a	無量	無量壽					毘盧舍那 (82.b三成)
大乘莊嚴寶王經	728	仝	仝	仝		成十 17.b		無量壽				極樂	
大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經	1056	仝	仝	仝	五 25	成九 26.a 55.a 等	無量	無量壽				極樂	尊乾闥婆曬吉祥 藥師光王 普照吉祥 田生王 娑羅王 仁王
大摩里支菩薩經	844	仝	仝	仝	四 21	成十一 76.b 81.b	無量						
守護大千國土經	784	施護	北印度烏塡曩	九八〇(來)	四 19	成五 15.b		無量壽					五佛
佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心陀羅尼經	790	仝	仝	仝	四 19 20	成五 4.a.b					安樂		
護國尊者所問大乘經	873	仝	仝	仝	四 23	地十 75.b		無量壽					
發菩提心破諸魔經	934	仝	仝	仝	四 26	宙二 16.b	無量						
金身陀羅尼經咒品		仝	仝	仝	四 26	成八 56.b			阿彌多婆				
大集會正法經	972	仝	仝	仝	四 26	玄九 78.a						極樂	
聖觀自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經	·	仝	仝	仝	四 28	成十 13.b				無量光			

一切如來眞實攝大乘現證三昧大教王經	1013	仝	仝	仝	四 29	成一 58.a 63.a 65.b		無量壽					
	1027					69.a 72.b 75.b		無量壽					五佛 (93.a二成)
一切如來金剛三業最上秘密大教王經	1030	仝	仝	仝	五 11-15	成二 95.b 96.a 97.b 93.a 94.		無量壽					
無二平等最上瑜伽大教王經	1385	仝	仝	仝	五 15	成四 11.a 18.b 21.a		無量壽					
一切秘密最上名義大教王儀軌	1060	仝	仝	仝	六 24 25	成十二 40.a 42.b		無量壽					四佛
大悲空智金剛大教王儀軌經	1311	法護	中印度摩竭陀	一〇〇四(來) 一〇五八(寂)	五 26 27	成三 73.a				無量光			
大乘寶要義論	1298	仝	仝	仝	七 13 14	暑三 3.b 13.b		無量壽		無量光		極樂國	
大乘集菩薩學論	1014	仝	仝	仝	七 12 13	暑三 24.b 52.a		無量壽			安樂		
佛說大乘智印經		吉祥	西印度	一〇五三(來)	六 1-3	宙一 33.b 34.a 35.b	阿彌陀	無量壽				極樂	五佛
妙吉祥平等秘密最上觀門大教王經		慈賢	中印度摩竭陀	(以下略)	五 19-21	成四 92.b 91.b							
妙吉祥平等瑜伽秘密觀身成佛儀軌	1041	仝	仝		六 27	成十二 45.a 69.b 72.a	阿彌陀		阿彌多婆				

妙吉祥平等觀門大教王經略出護摩儀軌	聖妙吉祥眞實名經	聖佛母二十一種禮讚經	大白傘蓋總持陀羅尼經
1444	1032	1068	1016
慈賢	釋智	安藏	瞿曇眞智等
中印度摩竭陀	土蕃	支那	印度
六28	五16	五27	四28 29
成十二47.b	成十三55.a	成十三61.a	成六21.b 23.a
阿彌陀	阿彌陀		
無量壽			
阿彌陀多婆			
無量光			
樂極			

明治四十四年二月十一日印刷
同　年二月十六日發行

《正價金壹圓貳拾錢》

著者　矢吹慶輝

發行者　高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者　佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

不許複製

發行所
東京市小石川區原町六番地
振替口座東京一五六八六番
電話番町二六〇八番

丙午出版社

文學博士　遠藤隆吉先生新著

◎孔子傳

定價壹圓四拾錢　郵稅金拾貳錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深邃なる識を傾け極大なる筆を振つてこゝに東亞の大聖孔夫子を傳すと言はば敢て又別に時流の廣告的文字を列ねるの要なかるべけむも猶みに少しく言はんかその涉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその組織極めて敏捷なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ爲くば東洋學術の精髓を味はむと欲する人士界の俊人に接して修養の資を得むと欲する人悉く來つてこの卷前にして而して唯一なる『孔子傳』を讀め

ソエヒネル先生原著　第三高等學校教授文學士　平田元吉先生譯

◎死後の生活

定價金五拾錢　郵稅金八錢

フエヒチルは哲學史上特筆大書せらるゝ十九世紀の鴻儒にして、實に今日の經濟的心理學、經驗的美學の基礎を啓きし者たり。「死後の生活」は此經驗的傾向の大哲學者が、現世の事實を基とし、最高の時的想像を交へ、或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に敍述したる、時と科學との微妙なる融合なり、氏の說を以てせば、千里眼、圓筆等の不思議なる現象も容易に解釋することを得。故に本書は親愛者を失ひし人、死生の疑惑に苦しめる者に無二の慰藉となり、一般の讀者に非々たる興味を與へも、又學者研究者に尊貴なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず。廣く江湖の愛讀を敢む。

ベークマン先生著　杉村縱橫先生譯補

◎改訂增補強肺術

定價金四十錢　郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め　肺病に罹れるものは讀め　既來に於ける最新式の躬力養成法を讀め此書に六の特色あり。

第一、時間を要せざること。
第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。
第四、勞力を要せざること。
第五、書文一致なること。
第六、總ふり假名付なること。

故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に理解し容易に實行し而して確實に其功を收め得べし。

東洋大學講師　釋清潭先生著

◎和漢高僧名詩新釋

定價金五十錢　郵稅金六錢

本書は、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉たり、和は戊辰以來經海鴻雲に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるなり、其詩趣深なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの、清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨とし深切を極む和漢高僧詩篇を繙讀して此の如きもの恐くは嚆矢なるべし。

文學博士　村上專精先生編

◎科學人論

定價金十二錢　郵稅金二錢

◎哲學原論

定價金十六錢　郵稅金二錢

右の二書は共に雜誌掲載入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の教科書會の讀本として最も適當なり。

文學博士　法學博士　男爵　加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金七十五錢　郵稅金八錢

龍に『哲國說と基督教』を刊行せし以來其批評囂々として既に數十種に上れり仍て今後その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を擧げて讀者に其解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又哲國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるるを得べしと信ず大方の諸子疎れて批評せらるるともあらば幸甚。

著者　敬白

ワーナー、フライト氏原著

東洋大學講師　中島德藏先生述

◎解說批評倫理學原論

定價金五十五錢　郵稅金八錢

ワーナー、フライト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を提へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なり　これを以て哲國にても大島學士の繼譯によりて已に紹介せられつゝあり給るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾とし　これが解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各論各章の間を通うて始ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ讀過筆錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり。

講述者　敬白

文學士　渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢　郵稅金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に適述せる所に係り所論の明晰にして內容の豐富せる前源平易なる敍述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老練の大著なり又欄外に重要なる題目を掲げ參考に資に對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし。

新公論社編　○附錄學生鎖夏法

◎男女學生氣質

定價金二十錢　郵稅金二錢

此書は坪內雄藏、柳橋絅子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山脇ふさ子、眞村五百子、鳥山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣悌三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戶川殘花、鈴木券太郎、石黑忠悳、廣瀨旭水、中川暢次郎、南弁倉員、棚橋一郎、寺田勇吉、クオスター、坂本盛穆、加納久宜、吉川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島德藏、下田次郎等の大家が、現今男女學生の長短所を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

文學博士　高楠順次郎先生閱
曹洞宗大學教授　立花俊道先生著

◎巴利語文典

定價金壹圓　郵稅金八錢

文學博士　村上專精先生著

◎改訂增補 自信錄

定價金六十錢　郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり百々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまつ能く「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之れ朝夕五尊世七師說いて至らざるなく進べて盛さ者るなし淵博なる宗教學者の見解は此書によつて知るを得べし今や第六版を發行する佛教信者の渴愛は此書によつて滿ふべく敬虔なる信仰に當り更に先生の改訂增補を得て先生の信仰に一大進歩あることを隱したるのみならず全然舊版と面目を異にするを得たり願くは再讀の榮を賜へ。

文學博士　村上專精先生著

◎女性訓

定價金四拾錢　郵稅金六錢

本書の內容は天職中庸貞操謙節操の五訓を以て女子座右の銘百となす村上博士はよく女性の缺點を握みそのその切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず此の座右を離すべからざる珍書なりとす。

文學博士　村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢　郵稅金六錢

誠は實に人生の根柢なるものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を闡明せられ初めて誠を解得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

文學博士　村上專精先生著

◎梵語入門

定價金壹圓　郵稅金八錢

歐亞言語の源泉を解めんと欲する人は梵語を學ぶべし宗教の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし東亞文明の根據を識らんとする人も梵語を學ぶべし。

我邦一部人士の梵語を學ぶものあるも彼等は或る歐語の梵文典を使用すれど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格低廉ならず今以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初步たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字世二十六を識み得る人は僅少なる代價を拂つて速やかに梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし。

熱田尊者傳說
高橋觀天耶氏序　阿滿得尊先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金壹圓　郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり特に悉曇と冠語せしは新譯梵字に簡ぱんが爲めなり梵文に加ふるに漢字和訓字音を附し即能には高博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本辭書解釋二部を掲げたり學者此の書に依れば悉曇學の一端を窺ふに易からん。

京都帝國大學文科大學長　文學博士　松本文三郎先生閲並序
京都帝國大學文科大學講師　文學士　羽溪了諦先生新著

◎釋尊の研究

定價金一圓　郵稅金八錢

著者は帝國大學出身にして陛下恩賜の銀時計を拜受したる秀才なり今や大學院に在りて專ら釋尊大乘界の研究に從事す本書は實にその近著たり彼が釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の脈絡より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し其に東西學者の誤謬を破る點に教界及學界に於ける偉績すべき一大新研究なりと稱すべし尊に松本博士は學者に校閲の勞を煩りて研究上の責任を分つ本書の價値以て知るべきにあらずや。

東京帝國大學講師　文學士　常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢　郵稅金八錢

佛陀の大部を占むるものは神秘なる傳說なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も これ等の傳說が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として巴等の傳說の起原を探れ意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以てこの千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り著者常盤大定先生氏に篤學能文を以て聞え殊に佛傳の研究に從ふものこゝに年あり此著の價値蓋し推知し得むか。

京都帝國大學講師
慶應義塾大學講師　忽滑谷快天先生著

◎達磨と陽明

定價金七十五錢　郵稅金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を闡明して餘蘊なく道德の工夫修養の方法及學の用心精神を會人格發成等一として備はらざるなし蓋に是れ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり。

曹洞宗大學講師
慶應義塾大學講師
曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生評釋

◎和漢名士參禪集

定價金五十錢　郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家柳正成等古今の名臣支那に於ては唐の太宗宋帝宋の太宗眞宗等の聖帝より鼓山谷蘇東坡白樂天張無盡張伯等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する逸話奇談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして亟ながら古今の逸傳碩學と即を同道し名僧大德の針線に接するを得しむ。

東洋大學講師　釋清潭先生著

◎寒山詩新釋

定價金五十錢　郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂か得て解すべからざるは寒山士なり是れ詩か是れ詩か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團來固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一能匂所破が面目ここに於てか露出す寒山詩釋を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

文學博士　三宅雄二郎先生著

◎偉人の跡

定價金壹圓　郵稅金八錢

古今東西の偉人數十人を擇へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功績を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として並に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして偉業したるか偉人は如何なる研究を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀じかを知らむと欲せば謹くば此の偉人の傳著に問へ

文學博士　三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢　郵稅金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文筆超凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを傾倒してこの著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては潺湲盡きざる大河となり散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か微瀾か蓋し近代稀有の快著なり。

文學博士　井上圓了先生著

◎西航日錄

定價金三十錢　郵稅金四錢

○繪はがき寫眞版數十葉入

是れ井上博士の洋行土產なり歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民はまた世界の大勢に遲ぜざるべからず謂ふ一本を讀へ。

前文部次官文學士　澤柳政太郎先生著

◎退耕錄

定價金壹圓　郵稅金八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも何ほ吸ふくるゝ心地を忍んで官はざりし者多し」と。知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなりとを闡明あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり警拔にして遺憾なる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり皆はんとする所は皆ひ盡くして毫も時勢に向らず誠に憂國警世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず。

前司法省戶籍局長任韓國法部書務官　白井水城先生著

◎戶籍法釋疑

定價壹圓四拾錢　郵稅金八錢

附錄、改定身分登記例、改定戶籍記載例

戶籍吏並に區裁判所其他戶籍事務監督者の戶籍事務に關する百般の疑問を解釋し並て司法省の解釋方針を示せる者也▲總て司法省の解釋と同樣に解釋せるを▲明治廿一年戶籍法施行以來二時半五年來日迄即ち十ヶ年間に全國戶籍吏並に區裁判所に起りたる實地問題に對する司法省の解決に基き總問題を分類し類別を設けて編纂したること▲司法省通牒以外親しく起りたる問題解釋が大部分として亟に しあること之れ本書以外になき本書の特色なること他の書籍と比較して見られたし。

東京帝國大學教授文學博士　高楠順次郎先生新著

◎國民と宗教

定價金七十錢　郵稅金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が熱烈なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを調和せられたる新著なり若し日本の國民たるものの日本の宗教家たるものは一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし。

◎附錄として研究上後學上極めて重要の論文十篇を收むこれまた實に學界及教界の珍たり。

黑岩周六先生講演　四年出版社編

◎人生問題

定價金五十五錢　郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり賢人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々濃に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の巨斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の渦泉を探り大に其深邃を得て茲に此書あり敍る所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の絃音なり世の悩ある人疑ある人迷に來て此圖書に接せよ應愛くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

第三高等學校教授文學士　野々村直太郎先生著

◎宗教と倫理

定價金五十錢　郵稅金八錢

正にこれ新宗教論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との調和に悩むもの知と情との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と科學とに感ずるものは速に來つて こゝに靈上の安樂地を見出せ。

◎附錄、二宮尊德翁の宗教觀を附す。

文學博士　松本文三郎先生著

◎宗教と哲學

定價金四十五錢　郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まづ進化宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道德研究と信仰等次第を追うて遂に從來なる宗教の基礎は哲學的論據にあり邪を闡明す益し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり。

マクス、ミュラー博士原著
文學士　清水友次郎先生譯

◎宗教學綱要

定價金五十五錢　郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を譯本とし隨つて敷ふゝこれを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり。

前外務大臣 伯爵林董閣下序
前文部次官 澤柳政太郎先生序

◎修養史譚

櫻所 干河貫一先生編

定價金壹圓 郵税金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乗より異世同様の事實二百余を挙げたるものにして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく公母これを讀まば以て座訓の料たらむ」と

澤柳前文部次官曰はく「道徳上の實行を期するには先づ之を實行せむとの意志を起さしめることが必要であるそれには人の感興を惹くべき實例を示すのが最もよいしかしその實例を示さうとなると適當なるものが極めて少ない本書の著者は博覽強記能く適當なるものを撰め來りて其の教訓を多く修身教授上の材料として有益なるものあるを覺ゆ」と

前文部次官 澤柳政太郎先生序
スタンフオルド大學總長ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

◎人物の修養

定價金五十錢 郵税金八錢

ジョルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情亦に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を俟たず大方の君子願くは本書に對し尊敬と同情とを表して博士に報ゆる所あれ。

前外務大臣 伯爵林董閣下纂譯

◎修養の模範

定價金七十錢 郵税金八錢

今の人何故に修養せざるべからざるかを知らざるもの少しと雖もその如何にして修養すべきかに至つてはこれに迷ふもの頗る多し本書は主として古聖前賢が如何に修養したるかを敎へんがためその美譚逸話を纂譯したるものなれば以て青年自修の良師友たるべく以て敎育家宗教家が講壇に用ゐる例話の寶庫たるべし。

東洋大學講師 境野黄洋先生著

◎增補聖德太子傳

定價金五十五錢 郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の熟練なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の敎主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政敎習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確眞に他に其匹を見ざる所。

國學院學博士ポール、ケーラス先生著 鈴木大拙居士譯

◎阿彌陀佛

定價金三十五錢 郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ時ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評喧々たるとや弊社既に十年博士と居を同じうし最も博士と親密なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悩ゆる人のみこれを讀むべしと曰はむや。

68